
早すぎる転生物語

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

早すぎる転生物語

【Nコード】

N9540S

【作者名】

ゆう

【あらすじ】

間抜け・変態・臆病者と3拍子揃った少年が、チートすぎる能力を貰って恋姫無双の世界に転生した。テンプレ通りに能力使いまくりで大活躍かと思いきや、本人はあまり活躍したくないようだ。それでいて安全と幸福とハーレムを確保しようとしているみたいなんだけど……そんなことできるのか？ ちっぽけな人間の数奇な人生を、ぜひご覧になって下さい。恋姫無双の世界で死んだ後は、Angel Beats!の世界に送り込まれます。

臆病者の転生

チートというのは元々ゲームで能力値などを違法に書き換えることを言っていた。

まあ大抵はプレイヤーに有利な書き換えだけだな。

RPGやシミュレーションゲームで全ての能力値をMAXにしたり、恋愛ゲームで好感度を最初からMAXにしたり、シューティングゲームやアクションゲームで敵の攻撃が当たっても効果がないようにしたりというのが有名だ。

俺がよくやっていたのは、能力値&好感度MAXだな。

あとキャラメイクできるゲームだったら主人公に都合の良い美女・美少女を限界いっぱいまで作成。

……まあ、若気の至りってやつだ。

一部趣味が入っているが、安心・安全にさくさくゲームをクリアするためだ。

元々チートとかできなかった頃、RPGでは数日かけて可能な限りレベル上げとアイテム回収をしてから物語の要所に突入！ っといったプレイを繰り返していたからな。

それで何が言いたいのかというと、こんなゲームにまで臆病な性格が現れている俺が自称神にどんな能力を求めるのかということだ。

ああそうだ、二次創作の転生だよ、今真っ白な部屋に神様（笑）が居るんだよ、3つ能力を与えるって言ってるんだよ！！

テンプレ通りだよコンチクショウ！！！！

「わし本当の神様なんじゃが……」

「っ！！ い、今更心を読まれたくらいじゃ驚かないぜっ！！！！」

「クツクツクツ、足震わせて言っても説得力ないぞえ」

「ほ、ほっといってくれ！ それより能力だよな？」

「お主が臆病者の変態って話じゃ」

「能力だよな！ 創造能力と改造能力だ。もちろん条件や制限や代償は無しで」

「そ、それは随分と欲張りじゃのう。しかも1つ残しておるし」

「残り1つはいいから、代わりに俺以外のイレギュラーは無しにしてくれ」

「む、それでは戦いにならないか」

「や、戦いとか怖い嫌だし。現代人の平和ボケなめんな」

あ、しまった。

つい勢いで言っちゃったけど思考の穴とかないよな？

未成年でエロゲーしてる臆病者の変態なめんな。

一度死んだとはいえ耐えられるはずないだろう。

だから当然ひとしきり怯えて叫んだあとは…。

「……………（キユウ）」

まあ、気絶するわな。

実際気絶したからその後のこと憶えていないし。

今回の経験を纏めると『死んだ俺は創造能力と改造能力を貰って、他の転生者とかがいない世界に転生しました』ってことだろう。

テンプレ通りだったけど、どんな世界に行くかは聞いていない。

あと能力が強力すぎるとか思うかもしれないが、神に能力あげるとか言われたら普通このくらいはやらないか？

とくに戦いとかが遠い世界に感じてるはずの現代日本人！

俺がヘタレなのは認めるが、それを差し引いても他の二次創作の主人公みたいに攻撃一辺倒な能力は求めないだろう。

……いや、事実は小説よりも奇なりとも言うし、そう思うのは俺がヘタレだからか。

転生物の物語とか見ない奴だったら、現実世界に転生すると思って催眠術や幸運だけとか普通にありそうだしな。

ま、何はともあれ、死んだ俺がチート能力を貰って転生したのは事実だ。

俺がどんな世界でどのように生まれ、どのように生きていくのか。

人に見せるために生きるわけじゃないから原作とか物語性とか考えない人生を送るけど、今後ともよしなに。

こんな臆病で変態な俺の人生で良かったら……だけどな。

0歳児にして能力使用！？（前書き）

さっそく2人もお気に入り登録してくれたんですか！？

初投稿で物語も転生前なのに嬉しいです。

ありがとうございます！

では早速第2話です。

最初の転生先は恋姫無双。

臆病者の新たな人生のスタート、ぜひご覧あれ。

「濡れてないってことはお腹が空いたのかしら？ はい、おっぱいでちゅよー」

「うぶっ、んーんー」

全力で嫌がる。

俺の話を聞きやがれ…って、俺の声とか聞こえてないのか？

というか口と鼻が塞がれて、死、死ぬ…。

気がついたら知らん女に胸を押し付けられて窒息死ってどんな人生だよっ！！！！

「誰か助けてっつ！！！！」

相変わらず声にならないが、思いだけは通じたのか。

扉が開く音と共に大声が響き渡った。

「可憐、赤ちゃんが窒息しちゃっ！早く放しなさい！」

「えっ！」

「ぶあっ」

「ああああ、ごめんねっ、ごめんねっ!!」

「だ、誰だか知らんが助かった…」

はあ、死ぬかと思った……ん？

今助けてくれた女、早く放しなさいって言ったか？

まあ俺が赤ちゃんなのは転生したんだと仮定してそれで良いとしてよ
う。

でも何で真っ暗闇なのに俺が窒息する原因がコイツだとわかったん
だ？

扉の音からして数メートルは離れているはず…だよな？

そういえばその前に俺が抱かれた時、コイツは手探りもしなかった。

いきなり首の下に手を差し込まれたし…。

……。

ま、まさか、もしかして…。

いや、そんなはずは…と、否定したいけど否定できない。

なぜなら、そう考えれば全てつじつまが合うんだ。

つまり、俺は真っ暗闇の部屋の中にいるのではなく…。

「あんだねー、気をつけないとこの子の父親のように軽蔑されるわよ」

「うっ…。ごめんねシンガン」

「まあ生まれながらに目が見えないからって可憐が自分の子を殺すとは誰も思わないでしょうけど」

そう、俺の目が見えていないだけなんだ……。

それを聞いた瞬間、俺は目の前が真っ暗になった。

まあ、最初から真っ暗なんだけどね。

絶望という比喩的な意味で、本当に真っ暗になった。



後で落ち着いて考えて、普通に改造能力で直せたのは言うまでもない。

「シンガンの目が治ってるっ！ 奇跡、奇跡よっ！」

あの時の絶望はなんだったのか。

というか何ですぐに思いつかなかったのだろうか。

俺にはあの自称神から貰ったチート能力があるんだ。

キャラメイクと能力値改造の経験から思いついた創造能力と改造能力だけれども、この力は物や病にも使える。

なにせ条件や制限や代償がないからな。

最初が自分の目の治療というのは予想外だが、これで改造能力を使えることがわかった。

ちなみに仕様なのか、改造能力を使うとステータス画面みたいなものがでてくる。

こんな感じで……とそのまま出そうと思ったが、やっぱりやめた。

制限無しと言った弊害で項目が多すぎるんだ。

これで安心だ。

ちなみに防御力は999のままだよ？

だって恋姫って殺し合いの世界だし。

主要人物は死なないけど、数字だけで表されていた兵士達は当たり前のように死んでいくし。

それでなくても事故で死ぬ可能性は普通にあるんだから。

と、そんなことを窪んだ土の上で考えていたら母親登場。

血相を変えて部屋に飛び込んできて呆然とする。

それは当然だろう。

自分の子供から目を離しているうちに、子供が居た部屋から物凄い音が聞こえてきたんだ。

しかも部屋を見てみたらベッドどころか床が抜けていて、部屋中に木の破片やら土やらが散らばっている。

その中にポツンと俺だけが無事に寝ているのだ。

母は体中が震えている。

そして震えながらも、よたよたと俺に近づいてきて、そして……。

正直物凄い誘惑に駆られたが、よく耐え切った俺！

まあ年齢差すさまじいからな、忘れがちだが俺0歳だし。

母親は13歳で前世の俺的にはドンピシャだけど、他は20歳以上とか多いしな。

……そこ、ロリコンとか言うな、俺は15歳だったんだからな！

え？

言っただけじゃなかったっけ？

まあいいや、話を元に戻そう。

思いがけずにつけてしまった魅了についてはこれくらいにして、あとは記憶操作：これは母親も含めてだな。

ガッツポーズで崩壊した部屋の記憶は全員から消しておいた。

直っているのを見られて「誰が直した!？」とか話題になっても困るからな。

大きな音については、母親のうっかりのおかげで大したことなさそうだし。

またいつものアレかで済むだろう。

「う、うーん……あれ？ 転んで頭でも打っちゃったのかな？ でも何で皆も寝てるんだろっ？」

しまった、母が勝手におきちゃったし、この状況になる経緯を考えてなかった。

やばいか？

「まあ、いつか。何だかいつもより頭がスッキリしてるし。みんなくおきてー！」

ちよつとだけ記憶操作してから睡眠を解除する。

これでとりあえず今を乗り切れるし、今後死ぬことは無いはず。

—安心だ。

それにしても0歳児でこんなに能力を使わざるを得ないって、どんな人生だ。

先が思いやられる。

.....
.....。
.....。
.....。

その後、
何かに目覚めた母が益州を急激に発展させるのは、
また別の
お話。

憧れのリアル新武将登録(前書き)

まだ1日も経っていないのにもう7件。

驚きました。そしてありがとうございます！

では早速第3話です。

前回はやむを得ず能力を使いました。

今度は自分の意思で使います。

臆病者の新たなチート、ぜひご覧あれ。

憧れのリアル新武将登録

あのガッツポーズで衝撃波事件から数日後、俺はさっそく後悔していた。

義侠心の強い能力値MAXの女武将を無数に作って天下統一。

これは前世のゲーム”三国志”で俺がよくやっていたプレイなのが、それが現実にできなくなったのである。

なぜならあの事件の後からずっと、俺が1人になる機会がないのである。

母は俺を負ぶったまま仕事に励みだして、寝るときは執務室の椅子で寝落ち。

それでも俺の世話をかかさない母を見た部下が感動し、負担軽減のため俺の世話を共同ですることになった。

しかし魅了状態の母は俺と離れたくないから反対。

部下と大論戦の結果、場所を大部屋に移し、全員で仕事と子育ての両方をする事になった。

あまり泣かないのが仇になったらしい。

寝るときは俺と女性陣だけ大部屋に布団を敷いて雑魚寝だ。

気持ちは嬉しいが、これでは女武将の創造ができない。

手詰まりだった。

スー、スススツ、サツ、ピチャピチャ、スツ、スツ、スツ、ピチャ
ピチャ、カタツ。

静かな大部屋に墨を筆に漬ける音と竹簡に文字を書く音が響く。

時おり書き終わった竹簡を重ねる音が大きく聞こえるくらいだ。

刺史が頑張っているからか、部下も黙々と作業に没頭していた。

と、1人が立ち上がってこっちに来た。

いや違う、ちょっと向きがずれているから、その先に居る母が目当てだ。

「可憐様、ちょっといいですかー？」

「ん？ なにかしら？」

「あと2ヶ月で靈帝のお子、劉協様が生まれますが、可憐様はどうするんですかー？」

「贈り物だけ届けさせたわ。今頃使者は洛陽で待っているんじゃないかしら？」

「では前任の劉焉さんのはどうしますかー？」

「何もしないわ。それより大長秋のお孫さんよ。今の私があるのは曹騰様のおかげなんだから」

「確か曹操、だったかなー。3ヶ月前に豪華な荷車を用意されてましたよね？」

「それは劉協様だよ。曹操のはもう少し質素な荷車で送らせるつもり。中身は劉協様以上だけど」

「それでは益州としてのお祝いは、劉焉さんのだけでいいでしょうかー？」

「劉焉のはいらないわ。あと送るときは全部州じゃなくて私個人から。州のお金は使っちゃだめよ？」

「あ、それで予算が無いんですねー。わかりましたー」

相談を終えて自分の席に戻る部下を見ながら、少し考えてみる。

赤ちゃん……つまりお腹の中になら、この場に居ながら作れるのではないか、とだ。

良い案だが、大部屋の中にいる女性の中に作ってしまえというわけにはいかない。

誰が純潔を守っているかわからないし、夫のいる女性でも最近は無沙汰かもしれない。

というか、大部屋で雑魚寝している女性は大抵がそんな気がする。

だから適当な女性のお腹に作るのは却下。

どうするか…。

今候補に出来るのは霊帝と劉焉の子、大長秋の孫。

たった3人だけだ。

ううむ……………ん？

確か創造能力にも制限ってなかったよな？

ということは、能力を作っても問題は無いってことか？

例えばこれから生まれてくる子の全てを俺に忠実な能力値MAXの女性にする能力…とか。

考えてみる。

「はい、おしめを替える時間だよー」

足を左右に広げ、部下の女性に股間をガン見されながら考えてみる。

もしも今後生まれてくる子の全てが俺に忠実な能力値MAXの女性になったら…と。

どんな様子が思い浮かぶだろうか？

.....。

産声を上げる世界中の赤ちゃんが辺り一帯を壊しまくる様子が思い浮かんだ。

やっぱりダメ……いやいや、その辺の値は調整するとして、問題は俺の望み通りの女性を自動的に作らせるシステムは有りかっただ。

子の全てというのも少しやり過ぎな気がするが、そこは対象や期間を絞り込めば良い。

そう考えると……有りだ。

問題は原作キャラとかも対象になって未来が読めなくなるかどうか、そんなの知ったことか。

全勢力を俺に忠実な女性が牛耳れば、戦争と俺の死が直結しなくなる。

というか、戦争そのものを無くせる！

それに能力値MAXの領主なら民の暮らしも良くなるから、結果万々歳だろう。

……いや、俺に忠実だからと言って、それで争いが無くなるわけじゃないな。

例えば遙か北の袁紹の領地に生まれた俺に忠実な女武将が居たとする。

でも俺はその人とは面識が無い。

しかも会ってもわからないし、そもそも地理的に会う機会もない可能性がある。

そんな人が同じく俺に忠実な女武将と争っていて、それを俺が知ることもできない。

……だめだ。

俺に忠実な女武将を作る案は良いとしても、別に情報収集と意思伝達の手段を用意する必要がある。

俺を中心にした念話ネットワークでも作るか？

.....。

うん、その場の思いつきだったけど、それで良い気がしてきた。

念話ネットワークを使えるのは俺に忠実な女性だけにしてしまえばいい。

よし、やってみるか。

対象は村長以上の地位もしくは一定以上の収入を持つ人の赤ん坊だ！

「はい、おっぱいの時間でちゅよー」

「あむ」

俺は母のおっぱいを吸いながらやってみることにした。

..... 格好付かないなあ。

.....
.....
.....
.....

1年後。

俺はまたしても後悔していた。

何を後悔しているのかというと、俺に忠実な女性を作る基準を間違えたことである。

俺の作った基準は”村長以上の地位もしくは一定以上の収入を持つ人の赤ん坊”だ。

だから妾の子でも当てはまるし、30人もいない村の村長でも当てはまる。

そして何より”地理的な範囲を指定していなかったこと”が仇となった。

当初から人数が多すぎる気がして地位と収入の基準を上げては来たが、相手は赤ん坊。

最初の1人が念話で喋りだすまで、地理的な範囲に気づくことができなかつた。

どんな子が最初に念話で喋るかなー、とわくわくしていたら…。

□

！

『

と、訳わからん言葉が聞こえてビックリした記憶がある。

へブライ語の「誰がいるー！ 答えてえー」か？

（違います。ロシア語の挨拶と自己紹介です。by作者）

また変な注釈が聞こえた気がするけど、まあいい。

何にせよ今は地理的な範囲にも制限を設けているし、制限外の子は普通の赤ん坊に戻してネットワークから除外した。

今の制限は、県長（小さな県の県令）以上の地位または県長に匹敵する収入を持つ人の、正妻の子供に限っている。

ちなみにこの時代の中国では、州の中に郡、郡の中に県、県の中に郷、郷の中には里という区分がある。

県だけでも1000以上あるのだから、数日でゲームでの限界登録数を超えたのは言うまでも無い。

ここは現実だからな。

際限無く増え続けるわけだ。

だから…。

『初めましてー、呈立ですー』

『眠いんだから話しかけないでっ!』

『そうよそうよっ!』

『今何時だと思ってるんだ!』

『昼の2時でしょ! 何寝てるのよっ!』

『赤ん坊なんだから寝るに決まってるでしょ!』

『それって、いつかは誰かが寝てるんじゃない?』

『だから念話はなるべく使わないように決めたんじゃない!』

『そんなの初めて聞いたのですよー』

|| ||

俺も知力が70あるのにどうしてミスばかりなんだろう。

.....。

ま、まあ、それはともかくとして、念話ネットワークを何とかしないといけないな。

彼女達はまだ言い争っているから、まずは.....。

『みんな、静かにして!』

『.....!?!?.....』

『この念話ネットワークは俺が作ったんだけど、どうやら不具合があるようだね』

『.....』

『.....』

『これから念話が全員に聞こえることがないように作り直すから、もうちょっとだけ我慢しててね』

『.....うん.....』

『.....了解.....』

「はい」

「たのむよー」

「はい」

「わかったわ」

『以上、劉奏からでした。寝てた子にはごめんね』

とはいったものの、どう作り直そうか。

うーん…まずは、念話の受信を自由にオンオフできるようにするか。

で、送信の相手を自由に選べるようにする。

あとは俺だけの権限で強制的に送受信できるようにして完成…と。

え？

どうやって能力を改造しているかって？

俺の改造能力に制限は無いんだから、当然能力も改造できるんだよ。

っと、同時に俺の選んだ知識も送り込めるようにして、と。

だ。

大人気だし暇にならないのは良いんだけど……つかれた。

……。
……。
……。

3年後、正妻が子を成すと必ず女兒になるという噂が広まり、慌て割合を設定したのは言うまでもない。

条件に合う胎児は100%俺の女になる設定だったからな。

70%に変えて、残り30%は男に生まれるように設定しておいた。

これで良いだろう……たぶん。

問題があればまた変えることにしよう。

加速する原作ブレイク（前書き）

気がつけば14件です。

読んでくれる人がいることは、書くことの励みになる。

そんなよく聞く言葉も、実感することで全く違って聞こえるものですね。

上手く言い表せませんが、共感の具合がモノクロとカラーくらいに違うとも言えば伝わるでしょうか？

何にしても実感させてくれた方たちには感謝です。

さて、早速第4話です。

劉奏は駒を作ったつもりでも、彼女らは思い思いに生きています。

主といえども、その全てを知ることにはできません。

できませんが、それらは確実に世界や劉奏に影響を及ぼします。

そんな中で劉奏は何に悩み、どう変わっていくのか。

臆病者の新たな一歩、ぜひご覧あれ。

加速する原作ブレイク

劉奏は4歳。

この時に流れていた噂は”正妻が子を成すと必ず女兒になる”以外にもう2つあった。

”益州大発展”

”各地に神童現る”

この2つである。

まず益州大発展だが、これは何かに目覚めた母の功績がついに形になって現れた結果である。

大規模な人事異動、軍備増強、盗賊や猛獣の討伐、街道整備、南蛮や五胡との融和、他州への支援、などなど。

元々劉恵は無能だが前任の劉焉のような悪政は行わなかった。

そして、その美貌と人柄で民達からの人気を一身に集めていた。

そんな人間が積極的に動き出し、結果が形になって現れると、更なる人気を獲得。

一部純真さが失われたと嘆く声があるものの、州民の大半はこの変化を好意的に受け止めていた。

しかし、面白くないのが他州の有力者たちである。

州民の流出。

膨大な赤字。

それに伴う軍の弱体化。

さらに劉恵の発言力が高まったことによる相対的な発言力低下。

しかし益州からの関税と支援で膨大な利益を得ているから文句も言えなかった。

そして…。

「後漢の時代は終わり、戦乱の世がやってくる……そう思っとなが……」

「持ち直しそうじゃのう。劉恵様のおかげじゃ」

「彼女を見出したのは曹騰様じゃなかったか？ 正直初めて見たときは美しいだけの箱入り娘と思っていたが」

「いや、天の御遣い様のおかげかもしれん」

「管路とかいう胡散臭い奴の予言か？ あー…なんだっけ？」

「天の御遣い、現われども威光を見せず。各地の救世主を裏で束ねて泰平をもたらす」

「それじゃあ、今各地で神童が続出しているっていうのは……」

「おそらく彼女らが救世主じゃろう。劉恵様もおそらく……」

「ま、それもこれも胡散臭い管路の占いを真に受けたら、だけどな

「じゃがそれで救われるのなら、信じるのも悪くはなかるう？」

「違うない」

世界各地の有力者達の間で、こんなことが話されていた。

この神童の続出こそが、劉恵の1人勝ちを阻止する希望だからである。

そして天の御遣いは誰かと話を繋げる人も居るが、それよりも……。

「何にせよ、大長秋は凄いのう。噂では彼の孫も神童の1人のようじゃし」

「ぐぬぬ……なぜ、なぜ俺の妻は神童を産まんだ!」

「産む妻がないじゃろうが30歳童貞」

「童貞言つな、悲しくなる」

「事実じゃろうが」

「ぐぬぬ……ならじいさんは産まないのか？」

「ワシは男じゃ」

「違って、妻が居るんだろ？ 神童を期待して生ませないのかわつてことだ」

「もう子を産める歳じゃないわい」

「お互いに神童は期待できないってか……うちも没落かな。次期当主の袁紹がアレだし」

「袁逢が居るじゃろ。夫とも仲良くやっているらしいのう」

「同じ袁家でも仲が悪いんだよ……はぁ……ままならない」

このような話に繋がることの方が多い。

そのため子供を作れる有力者たちの間では空前のベビーブームが起きていた。

例えば話に出てきた袁逢は既に子供の名前を袁術に決めているとか。

それで既に神童として有名な4歳児が、原作の主要人物だけでも、曹操、荀？、許緒、典韋、呈立、孫尚香、周泰、董卓、賈？、馬岱、張宝、張梁、と12人にも及ぶ。

……結構多いな。

原作の曹操陣営とか特に。

しかも何か早すぎるのが混ざっている気がするけど、俺が居る影響だろうか。

……まあいい。

彼女達はさすがに能力値オール120という感じで、政務に軍務に大活躍。

まあ、念話ネットワークもあるんだ。

当然といえば当然だな。

しかも俺のことは黙ってくれているから、安全が脅かされることもない。

俺は男だし、表向きは何もしていないからな。

ん？

神童とはいえ彼女らがどうやって政治の場に潜り込んだのだったの？

色々あるけど、一番多いのが劉焉の娘である劉璋のやり方かな。

新しい任地で相変わらず悪政をしていた前益州刺史の劉焉に、劉璋は進言を繰り返す。

部下や州民の前で……だ。

劉焉はことごとく却下するも、それでもしつこく進言してくる娘に……。

「おのれえ…… 娘といえどもう我慢ならん！ 切り捨ててくれる！」

と切りかかった。

が、彼女も神童の1人であり、これを返り討ち。

一部始終を民の前で行ったことで非難どころか賞賛され、大した混乱も無く劉璋が実権を握ったのだった。

と、こんな感じ。

もちろん娘の有能さに気づいて進言を受け入れる親も居て、そんな親を持つ子は親の参謀として政務に介入している。

他にも原作の呂布のように1人で盗賊団を壊滅させて武功を立てた許緒や典韋、周泰みたいなものもいる。

が、わずか3歳で姉の孫策を片手間で倒し、周瑜を軽く論破した孫尚香にはさすがに笑ってしまった。

仲良く一つの部屋引きこもってしまった2人には同情を禁じえない。

今は慌てた孫尚香が涙ながらに2人の機嫌を取っている頃だろう。

それに、あー何だっけ？

左慈と于吉？

原作や二次創作でよく悪役になる管理者とか言っつアレも、何か普通に殺された。

原作に無い益州の神童が襲われたけど返り討ちにしたとのこと。

何かイレギュラーを排除とか言っていたらしい。

.....
.....
.....
.....
.....
.....

何か順調に進みすぎて逆に怖い。

五胡との融和も進んでいるし、あと残っているのは十常侍と太平要

術の書だけだ。

他に何か……筋肉たるまの管理者が2匹居たっけ？

でもあいつ等は管理者の中でも外史容認派だろ？

多少趣味が入っているとはいえ、原作より多くの人が幸せになる道だからな。

俺が天の御遣いだから北郷一刀も来ないだろうし、大丈夫だろ。

姿を見せないのは、俺の行動に文句は無いけど漢女として魅力を感じないってことだろう。

………という楽観論が当てはまればいいなあ。

十常侍………というか宦官の制度は劉協が廃止すると言っていたし、最大の問題は太平要術の書かな。

見つけたら消すように皆に頼んでおいたけど、未だに見つかる気配は無い。

原作通りなら張三姉妹が手に入れるが、既に原作なんて影も形もないからな。

一応彼女らは歌手も目指しているみたいだけど、書なんて無くても普通に大成しそうだ。

んー……どうやって太平要術の書の問題を解決しようか。

人海戦術はもうやっているから良いとして、他には…。

と、もはや俺が考える必要も無いな。

皆俺より頭が良いんだ。

率直に話してどうするか決めてもらおう。

……。

で、結論。

俺が太平要術の書を召喚して燃やす能力を作ってしまった方がいい。

盲点だったが、これほど確実な方法は無い。

さっそく実行して解決した。

いいのか？　こんな簡単で。

あれほど頭を悩ませていたのが馬鹿みたいな終わりだった。

しかも筋肉だるまの件についても、無力化してしまえば良いのと。

皆して俺に殺させないように気遣ってくれた所が嬉しい。

本当、俺にはもったいなさすぎる。

で、筋肉だるまのヒミコとチョウセンのステータスを全て1（固定）にして特殊技能も無し（固定）にした。

洗脳という手もあっただろうが、いくら無力化してもあんなのに関わり続けたくはない。

え？

なんでアレと言ったりカタカナで名前を呼んでいるのかって？

アレが卑弥呼たちだとは認めたくないだけだ。

だってリアルで遠目に見たらかなり気持ち悪かったし。

まあ、原作の描写から悪い奴じゃないとは予想できるけどね。

野垂れ死にか猥褻物陳列罪で処刑されるだろう。

最低な所業だが俺は気にしない。

俺の幸福な人生のためである。

それで、最後に十常侍の件だけど、それは劉協たちが自分で何とかしたいと言っていた。

任せるとしよう。

で、劉奏11歳の7年後。

各県にいる神童たちの活躍により、中国大陸は繁栄の一途を辿っていた。

え？

展開早い？

いやだつて、この7年の間にあったことつて、大陸中の発展と宦官の制度廃止だけだよ？

ああ、その前に何太后の失脚かな。

筋肉だるま×2の死亡とかどうでも良いし、霊帝の死後は普通に献帝だつたし。

能力も神童たちの進言を受けて少し変更しただけだし。

変更したのは2つ。

まず神童たちの状態”魅了（劉奏・永続）”を”幸福を追求（劉奏・永続）”に変更。

魅了のままだと俺の奪い合いになるつて言つてたっけ？

おかげで一部の神童にはちゃんと俺以外の婚約者ができた。

……ほとんどが彼女ら自身による政略結婚だったけど。

俺の幸福を追求するために彼女らが犠牲になったのかと心配になったけど、そうではないらしい。

俺とあまり接点の無い彼女ら自身が万を越えるライバルと俺を奪い合っても勝てる見込みは少ない。

ここは身を引いて、綿密に調査して安心できる1人と結婚したほうが、俺も彼女ら自身も幸せになれるだろう。

その上で政治的なメリットまであれば言うことなしだ。

と、そんな打算があつてのことだそうだ。

本当、たくましいなあ。

そしてもう一つは生まれる子供について。

男女比を1:1にして、神童の生まれる確率も順次減らしていくことにした。

俺が死んだ後の混乱を極力小さくするためだそうだ。

で、今の俺がどんな立場かというところ…。

「のわああーっつ！　ちょ、何で俺が剣なんて持たなきゃならんのだっ！」

「お前が軟弱では私達の夫として世間が認めんからだ！」

「ちよっ、今の本気！？　それに真剣だぞそれっ！」

「当たり前だっ！」

「戦争阻止して訓練で殺されるってどんだけえええーっ！」

「防御力999の心眼を殺せるわけ無いだろ！」

「それでも怖いものは怖いって！」

「ええい、大人しくまともに訓練せんかーっ！！！」

「戦うのが嫌で戦争阻止したのにーっ！！！！！」

とまあ、こんな感じで神童たちにしごかれています。

あ、心眼ってのは俺の真名のことね。

7年の間で現実で顔を合わせた神童とは真名を交換したんだ。

でもおかしいなあ……ちゃんと俺に対する永続状態を“魅了”から“幸福を追求”に変えたのに……。

そう思ってもう一度神童たちの状態を覗いてみたら、数千人もの神童に永続じゃない魅了がありました。

あれえ、何時の間に？

そう思って再び魅了を消しても、しばらくしたらまた復活。

いや、一部の神童は消した傍から復活していました。

このことを率直に念話で聞いてみたら…。

『あなたが与えてくれたものが大きすぎるんです』

『その記憶が残ってるんだ、当然だよ』

『でも俺は君達の心を縛ってるんだよ？』

『大したことないのですー』

『そうそう』

『え！？』

『それでオレたちが不幸になるわけじゃないからな』

『心眼はあまり理不尽な要求とかしないしね！』

『それどころか感謝してるんだ。みんなな』

『でも…』

『心を縛るのは自由になった私達が怖いから…ですよね？』

『気持ちはわかる』

『そこまでわかるのならなんで！？ 君達を信用してないってことだよー！』

『あわわ、お、落ち着いてください』

『そんなのいらん』

『ウチは欲しいなあ』

『でもあたしらの団結を壊してまで欲しいとは思わんでしょ』

『まあ確かに』

『え、それってどういっ…』

『あんな、みんなで同じものに縛られてるから団結できるってこともあるんよ?』

『心眼の幸せは共通の目標になっていたからね』

『主様も幸せで、妾たちも蜂蜜水をたんまり飲めて幸せなら言つことなしなのじゃ』

『蜂蜜水はアンタだけでしょー!』

『くすっ』

『みんな…』

『魅了だけだった時は、裏でギスギスしてたけどね』

『風がアナタに進言しなかったら全員が成都に集結してたわよ』

『風は心眼のことを考えた進言で抜け駆けしたかっただけなんですけどねー』

『何いーっ、ちょっとアンタ顔貸しなさい!』

『嫌なですよー』

『アハハ』

とまあ、こんな感じで思っていたより皆が俺に好意的でビックリした。

あと話が脱線したけど、魅了状態がすぐ復活したのにも納得できた。だから……。

「!?!? ようやくやる気になったな」

「ああ」

剣を握り締め、目の前の神童の目を見据える。

怖い。

怖いけど、でも。

” お前が軟弱では私達の夫として世間が認めんからだ！”

俺を幸せにしてくれる彼女たちの幸せに、俺の強さが必要だというのなら。

「いくぞ」

「ああ」

勇気を出して、少しは頑張らないとな。

「.....」

「.....」

沈黙。

そして.....。

「.....
「あああああ.....」
「.....」

俺は剣を構え、初めの一步を大きく踏み出した。

NO・1：恋姫無双の世界編 完。

と、そこで終われば少しは格好がついたんだろっけど、ねえ。

「ぎゃああああああーっっっ！……！」

「ええい、私達のために勇気を出してくれるんじゃないのかっ
！……！」

「ギブギブギブツ、俺にしては頑張ったんだよーっっっ！……！」

「まだ30分しか経ってないじゃないかっ！……！」

「サンドバッグになるのはもう嫌だああーっっっ！……！」

「お前は私達でハーレムを作りたいかっただらっ！　もう目の前な
んだぞっ！……！」

「でも怖いものは怖いんだああーっっっ！……！」

「ええい、この軟弱者おーっっっ！……！」

……はあ、締まらないなあ。

.....。

ちなみに彼女ら神童の鍛錬に30分も付き合った時点で劉奏は周りから認められていた。

まあ、神童は揃って12歳未満なのに、単騎で盗賊団を殲滅するよ
うな武の持ち主だからな。

30分頑張っただけでも認められるのは当然と言って良い。

しかし、神童の鍛錬は神童同士でやるのが通例だったため……。

熱くなった劉奏の武艺担当が周りの評価に気付くのはそれから1ヶ
月後のことだった。

いや、劉奏を育てるために、あえて気づいていないフリをしていた
のか？

………ありうる。

何にしても、劉奏が地獄の鍛錬を1ヶ月も続ける破目になったこと
だけは事実である。

合掌。

幸せ（前書き）

いよいよ第5話、恋姫無双の世界編、最終話です。

幸せを追求。

それは風の意見で生まれ、皆が歓迎した心の縛り。

そして誰もが望む、人生の大目標。

劉奏は、彼女たちは、それを実現することができるのか。

恋姫無双の世界編 最終話。

臆病者の新たな幸せ、ぜひご覧あれ。

幸せ

俺が小さな勇気を出して、30分で折れた地獄の訓練の始まりから1カ月後。

成都では天の御遣いの正体が既に暗黙の事実になっていた。

これには凄く驚いたが、よく考えてみればバレバレだった気がする。

そもそも俺や神童の誕生と母の覚醒が同時期に起きていたから、普通に予想をつけられるはずだし。

母は俺の目が治った奇跡を皆に知らせていて、その後に益州だけが先に大発展していったし。

神童たちと当たり前のように使っていたカタカナ言葉は元々この世界にはなかった言葉だし。

さらには俺だけが多くの神童の人気を集めていて、しかも最初から神童の訓練に30分もついていく始末。

神童は女だけだったしな。

極めつけは、俺が訓練中に「戦うのが嫌で戦争阻止したのにーっつっ！ー！」とか口走っていたことだ。

.....。

全然隠してないじゃないか！

というか今まで隠し通せていると思っていた俺は、どんだけ世間知らずなんだ。

えーと俺は常に母と共に居て、視察とか宴で外に出ることがあっても大抵は城の中だったな。

俺が（能力値70だから）多少は使える奴とわかった後は、書類仕事も手伝わされるようになったっけ。

で、その後は母と一緒に外に出ることも少なくなって、毎日が城の中で食って寝て遊んで仕事しての繰り返し。

あれ？

社会人生活とニート状態が両立してる？

その結果、俺の交友範囲は母の関係者と念話ネットワークの神童だけになっていたのだ。

……世間知らずになるのも当然である。

ちなみに俺が天の御遣いであることは神童たちも隠す気が無いみたいだ。

『もう敵対する勢力も無いし、良いんじゃないかしら』

『むしろ公表しちゃいましょう』

『何？ 管路の占いは事実であつたつて？』

『念話ネットワークの存在がばれるのは困りますわよ？』

『私達以外の一般人にも人気が出ちゃうのは嫌だなあ』

『もう手遅れだ』

『そこはこの献帝が手を打とうじゃないか』

『！..?』

『そついうことかよ！』

『横暴よ！』

『職権乱用にも程がありますわ！』

『え？ どういうこと？』

『つまり劉協が心眼を婚約者に指名するってこと』

『劉奏は名誉なことだから断れない』

『一人占めするんですか？』

『違う。心眼との時間はお前たちへの褒美になるのだ』

『はわわ、頑張ればご主人様と二人きりになれるなんて...』

『劉協の案と組み合わせれば問題ないわ』

『なら心眼が天の御遣いという事実と献帝との婚約を同時に発表して…』

『王宮内で心眼に分身してもらってことで良いわね？』

『ちょっと待』

『益州の人間に反対する権利はないぞ？』

『そうそう、今まで散々良い思いをしてきたんでしょ？』

『いや、まだキスすら』

『ご愁傷様。で、益州以外の出身で反対意見は無い？』

『軽く流されたし…』

『……………』

『よし、無いみたい。けってーいっ！！…！』

『いや待て待て！ 本人の意思は確認しようなっ！』

『あ、それもそーだね』

『心眼が許可したら実行』

『今度こそ、けってーいっ！！…！』

と、こんな念話が交わされていたみたいで。

むしろ俺が天の御遣いだと公表したいと言って来た。

って、俺が分裂って何っ！

何か当たり前のように俺ができるみたいなこと言ってんだけどっ！

………まあ、できるんだけど。

そりゃあね、能力作成で分身能力作ってハイ終わりって、口で言う
だけなら簡単なんだけどね。

詳細を煮詰めなきゃいけないから大変なんだよ。

んー…。

でもいつか。

俺が献帝の夫になれば、俺は献帝のたった一人の側室になる。

そんな建前の下で、実際には王宮そのものが俺の側室になる。

そして俺自身が神童たちのご褒美だから、俺は毎日真昼間から淫蕩
生活。

しかも分身は他の神童に同時並行で同じことをやっている。

彼女たち1人ひとりと真剣に向き合ったためにも、分身の記憶は俺のものにせねばなるまい。

ということとは……。

よっしゃー！ーっ！ー！！！！

俺は毎日何十人分のラブイチャ生活だっ！

なんて、なんて素晴らしい提案をしてくれたんだ俺の彼女たちっ！

男のロマン、究極の幸せ、まさに楽園っ！

生まれた直後に死に掛けたことも。

能力改造に失敗した経験も。

自分のやってきたことに自己嫌悪したことも。

世間に認められるために彼女らとしてきた地獄の特訓も。

全ては、全ては、王宮でのハーレム生活のためにあっただーっ！
！！

ふっふっふっふ。

さようなら、気苦労の絶えない殺伐とした生活！

いらっしやい、怠惰極まる気楽な酒池肉林生活！

ここで一区切りだから読者にも予告をせねばなるまい。

よし、こんな感じはどうだ？

ようこそ読者たち、ここからは18禁だ

これは”そのあと”の話だけど

俺らが君に見せるのは、たとえばこんな官能小説。

No.1：恋姫無双の世界編 もいっこ完。

『そんなわけ無いでしょう』

『パクリだし』

『作品が違うのですー』

『俺つばとか咲・s a k i・とかやめて』

『カンの字も違っぜ!』

『ごめんなさい。ってか何で知ってんの!?!』

『禁則事項です』

そんなわけで、実際には気楽とか怠惰とかとは無縁の生活になってしまった。

本体の俺は世界各地の外交に引っ張りまわされてばかりだし。

神童には政務に集中してもらったため、王宮内の家事は主に俺の分身が担当していたし。

にも関わらず各部署にも1人ずつ分身を配置して、政務に参加させられていたし。

踏んだり蹴ったりである。

唯一の救いは、毎日何十人も分身が真昼間からラブイチャ生活を楽しんでいて、その記憶を寝る度に継承していることか。

でもそのおかげで本体の俺はまだ誰ともイチャイチャしてないんだよなあ。

あと3ヶ月したら俺の子が毎日生まれてくるってのに。

「はあ……」

ため息をついていると、どうしたのか念話で聞かれてしまった。

どうして溜め息をついたのかわかるのかという質問は愚問だ。

後で知ったのだが、彼女らの1人が独力で妖術を習得したらしい。

その知識が念話ネットワークを介して広がり、今では俺以外の全員が使えるようになったとのこと。

なぜ俺にも教えてくれないのかと聞いたが、俺なら欲しい能力は自分で作れば良いのではと返されて納得。

どおりで俺に対する反応が早いわけである。

他にも地和と人和が何時の間にか華陀から五斗米道を習っていて、巡業の目的に重病患者の治療が加わっている。

歌って踊れて治療もできるアイドルグループとか斬新すぎる。

彼女たちの成長は俺の予想の斜め上を疾走していた。

と、それよりもうすぐ子供が生まれるのに本体の俺がイチャイチャできていないことだったな。

どうせ隠してもバレるんだし、率直に話した。

…いや、隠そうと思えば隠せるんだけど、彼女らには心を読まれていた方が良く気がするから放っているんだ。

と、また脱線しそうになったけど、本体のイチャイチャについては既に答えが準備してあった。

いわく本体の奪い合いを避けるために皆で共有。

誰のものにもならないようにしていたとのこと。

しかし俺が望むのなら本体の初めては正式な妻である献帝様に、とのことだった。

あ、あぶねえ…。

俺が言い出さなかったら何百人の子を持つ童貞のお父さんの出来上がりだったじゃねえか。

でも献帝…いや、妻だから真名の創はじめでいいか。

創のお腹は妊娠7ヶ月である。

俺がイチャイチャしたいからって無理をさせるわけにはいかないからな。

3ヶ月はおあずけか……。

『別に他の者としても構わんだぞ?』

『ほんとーっ? ならシャオが』

『という子が続出するからダメよ』

『ぶーぶー』

『ご主人様の本体に愛されたいのは鈴々も同じなのだ!』

『それに我慢した方が初めての感動もひとしおよ』

『しかし心眼は……』

『いや子供が生まれるまで我慢するよ』

『…いいのか?』

『いいよ。キスくらいは出来るんだろ?』

『も、もちろんだ。触ったりお腹の音も聞いたりしてくれ』

『あわわ、わ、わたしにもお願いしましゅ！ あう、かんじやった
……』

『あ、兄ちゃんボクもー！』

『私もー！』

『璃々もー！』

『『『『『 璃々は違う！』』』』』

……あはは、気楽とか怠惰とかとは無縁でも良い気がしてきた。
思ったよりラブリチャの密度が薄くて大変だけど、これはこれで充
分幸せだ。

楽しいし、安全だし、それでいてやりがい……も……ある……し……。

……。

やりがい？

そつえば、考えたこともなかったな。

もしかして彼女らはそこまで考えて俺に色々なことを要求してきた
のだろうか。

『そうですねー』

『え？』

『何でも望み通りだとお兄さんは腑抜けになるのですよー』

『？』

『怠惰極まる気楽な酒池肉林生活…でしたっけ？ それを実現してしまうと…』

『酔ってばかりでボーっとしかできない毎日だわさ』

『麻薬中毒みたいです』

『そんな人生、幸せじゃねえだろ』

『な…なるほど…言われてみれば…』

『アナタの場合、自分でも気付かずに自分を不幸にしてしまう可能性があった』

『献帝の提案を聞いたアナタが危ないのはすぐにわかったわ』

『あれは焦ったよなー』

『はわわ、怖かったでしゅ』

『魅了だけのときは風しか気付かなかったけどね』

『今考えるとゾツとするわ』

『憶えておいて。過ぎた薬は毒となる。それは能力も同じ』

『うん……。肝に銘じておくよ』

『薬を怖がって死んじゃったら元も子もないんだけどね』

『そうそう、戦争を阻止できたのはご主人様の能力のおかげだし！』

『だから一人で抱え込まないでね』

『うん。みんなありがとう』

本当、俺にはもったいない子ばかりだよな。

臆病者で、変態で、どこか抜けている俺には、ほんともったいない。

それでもこんな俺を好いてくれるんだから、大切にしていかなきゃな。

.....
.....。

「威光を見せず」じゃなくて「威光は在らず」じゃね？」

そんな笑い話が広がっているが、事実だからそれで良い。

実際に威光を持っているのは、天下泰平のために頑張ってきた彼女たちなのだから。

そんな彼女たちの何度でも復活する魅了。

その対象が俺であることを、本当に光栄に思う。

.....
.....
.....
.....。

あれから80年間。

かつて神童と呼ばれた彼女たちの頼みで自分の子も彼女らと同じにしたものの、それ以外の能力はほとんど使わなかった。

おかげで子や孫までもがラブライチャイチャの相手になったりしたが、平穩で生活が変わることもなかった。

40歳の時に大地震が起きて、その時に顔を変えた分身体を五斗米道を使えるようにして大量に送り込んだくらいかな。

もちろん失敗したり諭されたりは多く何度も試行錯誤を繰り返したが、基本的に臆病な性格は直らなかつたように思う。

あと展開早いとか思っているかもしれないが、そこは置いて、なぜ今更こんな独白をしているのかを聞いてくれ。

といつても、一言で済む。

もうすぐ寿命で死ぬからだ。

別に生きようと思えば生きれるし、若返ろうとすれば若返られるんだけど…。

あの戦争直前の世界と一緒に立て直した彼女たちが、昨日でみんな亡くなってしまったんだ。

俺はみんなの下に行きたい。

No. 1: 恋姫無双の世界編 今度こそ完。

幸せ者の死後（前書き）

いよいよ新章、Angel Beats! の世界編、開幕です。

幸せな最期を迎えたはずの劉奏が、死後の世界に送り込まれます。

劉奏の望みは、彼女らの下に逝くことだから…。

いきなり成仏？

新章、まさかの1話完結か!？

臆病者の新たな歩み、ぜひご覧あれ。

幸せ者の死後

「おつかれさまじゃ」

「は？」

俺、彼女たちの下に行きたくて自然死したはずだよな？

「その通りじゃ」

あ、お疲れ様の座談会的なものか

「違うぞい」

え、何、続くの？

「うむ」

.....。

はああああーっっ???

「え、なんで？ これ以上無い、文字通りのハッピーエンドだったよね！」

「うむ。戦うのを嫌がるし、最初はどうなるかと思っと思ったが、たまにはあんなのも悪くないのう」

「何！？ てことはずっと見てたの！？ 90年間！？ 一部始終を！？」

「もちろんじゃ、世紀のロリコンハーレム野郎」

「うわああああーっっ！！ 監視の対策忘れてたああああああああーっっ！！！！！！」

俺は頭を抱えて天を仰いだ。

「83歳も年下の女の子は美味しかったかのう？」

「いやああああーっっ！！！！！！ 具体的に言わないでええええええーっっ！！！！！！」

頭を抱えたままうずくまる。

「年上はたった一人、母親だけで……」

「ぬおおおおーっっ！！！！！！ その先を言っなあああああああーっっ！！！！！！」

ガバツと顔を上げて掴みかかろうとしたが…。

「初めては母親だったのう、このマザコン」

「ぎゃああああああーっっっ」

再び頭を抱えて床を転げまわった。

「まあお主を弄るのはこの辺にしておいて、よくやった。また転生してもらうぞい」

「え、ちょ、ご褒美なら逝かせてくれよっ！ せっかくのハッピーエンドが台無しじゃないかっ！」

「もう手遅れじゃ、尻に敷かれてばかりの変態」

「うぐっ…。な、ならせめて次に転生する世界を教えて欲しい」

「ふむ…いいじゃろう。次に転生する世界は…」

「世界は…？」

「銃撃戦が当たり前の世界じゃ」

「じゅ、銃撃戦…っ」

「じゃが一番強い奴は、生身で振るう剣の攻撃力が爆撃機並みで…」

「ただの剣で爆撃機っ！？」

「銃弾も剣で弾いて防ぐし、生身で効かんようにもできる」

「う、うわぁ……」

「かと思いきや、催眠術で人を消す力を持つ奴もいる」

「えっ！　そもそも催眠術で人って消せるのっ!?!」

「そんな世界じゃ」

ガクガクブルブルガクガクブルブル…。

「ワシも忙しいが鬼じゃない。行く前に準備させてやるから、終わったらこのボタンを押すのじゃ」

「えーと、転生先を変えることってできないのか？」

「ダメじゃ、ホイ」

「っつ」

「じゃあの!」

瞬間、自称神の姿が消えた。

一面真っ白の世界に残されたのは俺とボタンだけ。

ボタンは手のひらサイズの四角い箱に、円形の赤いスイッチが付いているシンプルなものだ。

赤という色が何かを暗示していそうで怖いが、変な仕掛けが施された様子は無い。

「はぁ…しかし…」

つ、次の世界はやばすぎる。

特に一番強い奴。

何せ銃弾に対応できるほど素早く剣を動かせて、それが爆撃機並みの攻撃力を持つているってことだろ！

催眠術で人を消すつてのはよくわかんないけど、両方とも先に殺しとかないと危険かもしれん。

……いや、一番強いのがそれっただけで、同じくらいの力を持っている奴がどれだけ居てもおかしくないし…。

……………。

やっぱり自分の身を守ることを考えた方が良さそうだな。

前回は防御力MAXで攻撃を無効にしたけど、これは特殊技能での無効もした方が良さそうだな。

完全殺傷無効化と完全神秘無効化でどうだ？

例外に俺が使う能力を設定して…と。

準備完了だ。

俺は自称神に渡されたボタンに手を乗せる。

「……………」

行くぞっ！！！！

ポチッ。

準備終了を知らせるボタンを押すと、目の前が真っ暗になった。

そして目を覚ますと、そこには……………。

「目が覚めた？」

狙撃銃を持った女性がいた。

そしてここは…。

「ようこそ、死んでたまるか世界戦線へ」

「Angel Beats! かよっ!」

消えたもん勝ちの、死後の世界だった。

orz

俺は何のために必死に準備してきたんだよ。

一番強い奴って天使ちゃんマジ天使こと立花奏のことだし、催眠術は直井だし!

全然危なくねえじゃねーかっ!

完全なんとか能力って、4つも作ったのにほとんど無意味じゃねえかっ!

あんにやるつ、こうなるのがわかって準備期間与えやがったな。

なーにが、「ワシも忙しいが鬼じゃない」だっ！

俺が怯えて必死になってるのを影から見て笑ってたな、どちくしょー！っつっ！っ！っ！

それに……。

「なによ、エンジェルビーツって」

「え？ ああ、こつちの話。それよりここは死後の世界ってことで合ってるよな？」

「そうよ。あなたは順応性が高いのね、驚いたわ」

「死んだことは憶えてるからな。それじゃ！」

「ええ、それじゃ」

ここは消えたもん勝ちの世界だからな。

「ってちつがあああー！っ！っ！っ！っ！っ！」

「何だよ、用があんのか？」

「そうよ。あなた、見所があるわ……入隊してくれないかしら？」

「断る」

「そう。なら早速うちの制服を…って、はあああーっつっつ？」

「用はそれだけだな。それじゃ」

「ちょっと待つて！ あなた神が憎くないの！？ 人生を呪わないの！？ うちに入れば復讐できるわよっ！」

「……確かにぶん殴りたいが必要ない。俺は幸せな人生だったからな」

「なっ……」

「用はそれだけか？ …じゃあな」

俺は狙撃銃女の所から立ち去った。

さて、さっさと成仏するか。

自称神に一部始終を見られてたのはシャクだけど、それでも幸せな90年だったからなあ…。

みんなとの事は今でも鮮明に思い出せる。

そして、俺がみんなのおかげで得られた幸せも、手に取るように実感できる。

人生には満足しているから、みんなの下へは簡単に逝けるはずだ。

俺以外のイレギュラーが居ないんだから、俺が関わらなかつたらハッピーエンドだし……。

一部納得行かないこともあるが、介入するほどのことでもない。

だから…。

来ていきなりだけど、もうお別れだ。

さようなら、死後の学園、Angel Beats!の世界。

人生に満足すれば卒業できる、消えたもん勝ちの世界。

前世の幸せな記憶でも思い出していけば、確実に消えるだろう。

俺は天の御遣いとして生きた、前世の記憶を回想し始めた。

つとと、いけないいけない。

殺傷・神秘・遠隔監視に対する完全無効化能力（固定）があったんだっただな。

遠隔監視以外のは解除して、と。

俺は再び幸せな記憶を回想し始めた。

幸せというより、幸せすぎる人生だったなあ…。

だから当然…。

No.2:Angel Beats!の世界編 完。

となるはずなのに…。

「なぜ、なぜだ…」

Orz の格好で震える。

そして…。

「なぜ俺は成仏できないんだああああー！！！！」

死後の学園に、俺の絶叫が響き渡った。

その後、俺は各種の完全無効化能力を元に戻し、学校へと歩いていった。

よく考えるとAngel Beats!の世界は、まともな青春を送れなかった人たちが集まる救済の場だったはずである。

俺は異世界人だが、まともな青春じゃない点に限っては、彼らと同じだ。

……皆が小学校に通う年代には城で仕事していたし。

それに周りは女ばかりだったから、男友達というものを知らない。
だから、ここで男友達を作って青春を送れば俺は成仏できるだろう。
自分がここに送られた理由に当たりを付けた俺は、意気揚々と歩いていくのだった。

成仏を目指して（前書き）

活動報告でも書きましたが、タイトルを一時的に変更していました。

“早すぎる転生物語”から“臆病者の転生物語”にです。

アクセス数が激減したので、この物語を見ようとしても見つからなかったのだと思います。

予告無しで変更してしまい、本当にごめんなさい。

そして、この物語を見てくれているあなたにありがとう。

36人もお気に入り登録してくれて、とても嬉しいです！

さて、Angel Beats!の世界編は、第2話を迎えました。

第1話完結はありませんでしたね。

なぜか成仏できない劉奏は、男友達と青春を送れば成仏できると考えました。

殺される恐怖から逃れたので劉奏は何気に気が大きくなっています。

意気揚々と歩いていった先に、どんな出来事が待っているのか！

臆病者の新たな活動、ぜひご覧あれ。

成仏を目指して

意気揚々と歩いていった先には誰も居なかった。

o r z

夜の学校なのだから、当たり前である。

俺は世界を股にかける自分の間抜けっぷりに辟易しながら、朝まで仮眠しようと保健室を探し始めた。

っと、その前にトイレトイレ。

目の前にある男子トイレの電気をつけて個室に向かう。

その前に通った水道。

その上の壁にある鏡。

そこに映る男の姿。

それは俺が死ぬ直前だった90歳の爺さんではなく…。

15歳くらいの幼い少年だった。

驚いた俺はすぐに個室に入って普通の手鏡を”創造”する。

そこに映るのは同じく15歳くらいの少年。

なぜだ？

俺は便座に腰掛けて踏ん張りながら考えてみる。

死後の世界には若者ばかりが来るから、俺もそれに合わせられたのだと思う。

でも誰が？

あの神を自称する爺さんの仕業か？

それともこの世界の仕業か？

それとも作者？

『私を選択肢に入れないでください。by作者』

うおっ！

作者から返答が帰ってきやがった！

しかも念話！？

完全監視無効化能力はどうした！？

『私に効くわけじゃないじゃないですか。もし効いたら物語終了ですよ？ by作者』

…まあ、確かに。

とりあえず作者の事まで考えるのは危険だから置いとこう。

気を取り直して、どうして俺が15歳の姿なのかだな。

作者の仕業という選択肢を抜くと、可能性は3つだと思う。

1・俺をここに送り込んだ自称神の仕業

2・この世界の仕業

3・第2コンピュータ室にあるソフト
Angel Player
の仕業

2と3が同じに見えるかもしれないが、違う。

3は後付けで用意された物だからな。

確か愛を感知したらNPCを影に変えてリセットだったけ？

…俺に対する神秘と遠隔監視を無効化しなかったら、原作ブレイク
どころの話じゃないな。

成仏できないのに愛だけは感知されるとか嫌過ぎる。

っと、終わったから改めて保健室で仮眠を取ろう。

俺は個室を出て水道で手を洗う。

そしてポケットからハンカチを取ろうとして、ふと固い感触の何か
が手に当たった。

とりあえず先にハンカチだけを出して手を拭いた後、改めて固い感
触の何かを取り出す。

それは劉奏の名前が書かれた、この学園の学生手帳だった。

学年やクラスも書いてある。

寮の部屋の番号も書いてある。

ご丁寧に教室の座席も書いてある。

え？

生徒手帳って、座席まで書かれているものなの？

俺は疑問に思いながらも、自分の机で仮眠するために教室へと歩い
ていった。

保健室に行かないのは、寝過ぎしても問題ないようにするためだ。

自分の部屋なら目覚まし時計があるだろうけど、そもそも寮がどこ
にあるか知らない。

.....。

3階の教室に向かいながら、手帳には座席より寮の場所が書いて欲しいと思う劉秦だった。

.....。

あ、しまった。

トイレの水を流し忘れてたっ！

教室へ入った瞬間に気付いた俺は、また1階のトイレに戻る破目になった。

間抜けすぎる。

その後再び3階の教室に戻り、今度こそ自分の席で眠りについた。

おやすみ。

はっ！

殺気ッ！？

考えるより先に体が動く。

前世では朝っぱらからタツクルかます子も居たからな。

その時の経験が役立つたらしい。

そんな事を考えながら目を覚ますと、俺は違う制服を着た男を組み敷いていた。

「ゲッ……何もんだテメエ……」

「劉奏だ。先ほどの殺気はお前だな？」

「ッ、そうだ」

「なぜ俺を襲った？」

「ゆりっぺの誘いを断って侮辱しやがったからに決まってるだろうがっ！」

「俺は断ったが侮辱はしていない」

「同じ事だ。なぜ断りやがった」

「神への復讐とかどうでも良いからだ。俺は幸せな前世だったからな」

「な、なにっ」

「わかったらもう襲わないと誓えるか？」

「あ、ああ、誓う。だから離せ」

「よし」

俺は手を離してやったが、そいつはすぐに襲ってきた。

もちろん俺に効くはずも無く、窓の外に投げ飛ばした。

「どうわーーーーっっ！……！」

窓を割って落ちていったが、自業自得だ。

それに、ここは死なない世界だから大丈夫だろう。

「相変わらず劉奏はすげえなっ！」

「あの乱暴者の野田を軽くあしらうんだもん！」

「素敵っ！」

「え？」

気が付くと、俺は自分と同じ制服を着た一般生徒に囲まれていた。

相変わらずとか言うけど、俺は初めて見せたはずなんだが……あ、そうか。

この一般生徒は、俺が元からここに居たかのように振舞うんだっ
たか。

しかし、それは都合が悪いな……。

……よし。

「なあ、相変わらずってことは俺は以前も何かやってたのか？」

「何言ってるの？ 昨日も教室の喧嘩を止めたじゃない」

「いや、俺、昨日何かあったみたいでな。記憶喪失なんだわ」

「え、本当！？ それじゃ僕のこと覚えてないのっ！」

「誰だ？」

「黒川だよ、黒川。十年來の親友の黒川だよっ！」

「すまん……」

「うー…同じお風呂にも入った仲なのに……」

「なら俺はどうだ!？」

「何も思い出せない……」

「初対面だから当然だろ。ってかお前はクラスに帰れ！」

「……」
「アハハハハハ！」「……」

「忘れてても僕たちは親友だからね！何か困ったら頼ってよ?」

「ああ、その時は頼むな」

「早く思い出せたらいいな！」

「いいからお前はクラスに帰れって!」

「アハハハハハ！」「」

キーンコーンカーンコーン

「あ、やべ」

「先生来ちゃう！」

チャイムが鳴り、俺を取り囲んでいた一般生徒は自分の席に戻っていった。

よし、これで良い。

これで俺が以前の学校生活を憶えていなくても不自然じゃなくなるはずだ。

その上で友達を一から作れば、問題は無いだろう。

と思いきや、授業が始まる前だというのに、近づいてくる人が居た。

普通の制服を着た背の低い女生徒。

そいつは、立花奏！？

「ウン…」

「マジかよ……」

普通じゃない制服を着た戦線メンバーらしきクラスメイトが啞然と
している。

そりゃそうだ。

あの模範通りに生活して模範を促す行動パターンの生徒会長が、教
師が来ていないとはいえ、だ。

朝のチャイムの後に席を立って、俺の方に向かってきたのだから。

俺も驚いている。

原作ではそんな描写は無かったからだ。

にも関わらず来た。

そこまでして俺に接触しようとする用とは、何だろうか。

「幸せな人生を送ってきたのは本当？」

「あ、ああ。90歳で自然死だ」

「……お爺ちゃん」

「お爺ちゃん言うなっ！ それより用件はそれだけか？」

「違う。昨日成仏できないって叫んだ」

「げっ、聞かれてたのかっ！」

「うん」

「う、うわああああーっっ！」

俺は頭を抱えて転げまわる。

何か「落ち着いて」とか言ってきたような気がするけど、そんなんで治まるもんじゃない。

恥ずかしすぎる。

ひとしきり転げまわった後、俺が落ち着いたのを確認してから立花は話しかけてきた。

「成仏したいの？」

「当然！」

「……協力する」

ガラララララッ！！！！！

扉を開く音が教室に響く。

「先生来たな」

「また後で」

立花は急いで自分の席に戻った。

そんな俺たちを、クラスの皆が啞然とした様子で見っていた。

え？

皆？

違う制服を着ている人だけじゃなくて？

.....。

し、しまった、さっきの会話は一般生徒にとってもおかしいっ！

しかも成仏できないって叫んでたって...。

思わず床を転げまわっちまったし...。

その後は「成仏したいの？」「当然」って問答...。

やばい。

どう見たってただの変人だ。

ということは、このクラスで男友達を作るのは絶望的？

「し、しまったあああああ————っっっ！……！！！」

俺は再び床を転げまわった。

「劉奏、床を転がってないで席に着くっ！」

「う、ごめんなさい」

教室に入ってきた先生に即行で注意されたのは言うまでもない。

それにしても……。

「はあ……」

このクラスで友達を作るのは絶望的かあ……。

俺は軽く鬱になって机に伏せた。

しかし後になって知ったのだが、これらの奇行は「いつもの病気が」で流されていたらしい。

お、俺のキャラって…。

別の意味で軽く鬱になったのは言うまでもない。

.....
.....
.....
.....
.....
.....

あの子の昼飯時、立花奏と名前を交換して事情を説明。

とは言っても、ハーレムとか18禁な事とかについては微妙にぼかしてだが。

その上で俺の予想を話すと、彼女は俺の考えを肯定してくれた。

まあ、俺の事情についてはビックリしたみたいだがな。

最初は信じなかったけど、奏を認識阻害の例外にして能力を見せたら納得してくれた。

代わりに誰にも話せない…というか、話す気すら起きないように”改造”したけどな。

え、外道？

何を今更。

俺は自分の安全のためなら何だってやるよ？

それより俺の考えってのは、男友達とまともな青春を送れば成仏できるといって考えた。

で、俺の考えを肯定した彼女は、俺に部活を作ることを勧めてくれた。

確かに男の青春といえば部活！ 1から作って目指せ全国！ みたいなノリだろう。

……この世界に全国はないけど。

それで特に希望が無いのなら野球がオススメとも言っていた。

単純に甲子園のイメージからではなく、4カ月後には学内で野球大会もあるかららしい。

というかこんなマンモス校で野球部が無いってどんだけ？

あれ？

野球部って原作に登場してなかったっけ？

そう思って聞いてみると、やはり野球部というのはあるらしい。

いやあつたというべきか。

麻薬で死んでこの世界に来た人間が居て、そいつが野球部に所属しながら麻薬を開発。

他の部員にも麻薬を広めてしまったらしい。

で、最近その不祥事が発覚して、生徒会主導で再編しようと考えていたところらしい。

ちなみにこの迷惑な奴は、麻薬トリップで既に成仏してしまったとのこと。

だから今、野球がオススメなのだそうだ。

そんな細かい事情なんて全く知らなかった。

ありがたい。

さすがは天使ちゃんマジ天使である。

というわけで、さっそく俺の親友を自称する黒川に相談し、新生野

球部のメンバーを集め始めた。

「おっ、記憶喪失なのに新部結成か!? 入る入る!」

「ありがとう」

「いいからお前は隣のクラスに帰れ! あ、俺も入部な!」

「オレもー!」

「ワイもや!」

「あ、あのう、私も良いでしょうか…」

「「「アンタ女じゃん!」」」

「へう…マネージャー…ですけど…」

「おおおっ、助かる!」

何か前の世界の月ゆえ(董卓)みたいな子が混ざっていた気がするけど、幸先の良いスタートだ。

何せ、集め始めたばかりなのに、もう部員6人でマネージャーまで出来たんだからな。

よーし、頑張るぞー!

.....
.....
.....
.....

その後、昼食の時間が終わるまでクラスメイトを勧誘し続けたが、誰も入部してくれなかった。

どうやらクラス内で入部してくれる人は、あの時に全員が入ってくれていたらしい。

運200に魅力90といえど、そんなに甘くは無いか。

俺は気を取り直して、他の学年やクラスからも勧誘することにした。

「劉奏ちゃん席について。今から授業よ」

「あ、はい。でも先生、ちゃん付けは止めて」

「ウフフ」

「や、ウフフじゃなくて」

「今日は教科書21ページの例文からよ。奏ちゃん読んでちょうだい」

「はい」

「スルーされたし」

放課後に、勧誘することにした。

想定外の放課後（前書き）

Angel Beats!の世界編、第3話です。

成仏を目指す劉奏は、野田を退けて立花奏の協力を得る。

成仏のために青春、青春のために新生野球部、新生野球部のために部員集め。

具体的な活動は順調に滑り出し、新生野球部は既に6人+マネージャー1人だった。

しかし授業で一時中断してしまい、希望を託すは放課後の勧誘。

そして授業が終わり、待ちかねた放課後が始まる。

臆病者の新たな想定外、ぜひご覧あれ。

想定外の放課後

放課後。

さっそく新生野球部の勧誘活動をしようと席を立ったが、ふと名案を思いつく。

そつだ、既に入部が決まっている6人に協力してもらおう！

名案でもなんでもない普通のことだろというツッコミが来そつだが気にしない。

6人を集めた俺は、さっそく皆に勧誘活動をお願いした。

「うん、がんばるよ」

「もちろん、やるやる!」

「オレも!」

「ワイもや!」

「悪い、俺はダチと遊ぶ約束がある」

「へう…ごめんなさい。図書委員のお手伝いがあった…」

結果、4人が快諾。

2人は今日は先約を優先してもらうことにした。

それで勧誘の方法だけど、初日の今日は、それぞれの友達に声をかけてもらうように頼んだ。

で、その友達にも友達の勧誘を頼む。

だから今日用事がある2人にも、その用事の際に声をかけて欲しいと頼んだ。

「ああ、それなら俺も大丈夫だ」

「あの…女の人でも…良いんですか…？」

「あー、マネージャーとしてならな。男友達とかは居ない？」

「へう…ごめんなさい…」

「気にするな」

これで初日から7人がかりでの勧誘である。

終わったら知らない人にも声をかけるのだが、記憶喪失扱いの俺は最初から無差別勧誘だ。

「というわけで、目標は部員18人！既に6人居るから残り12

人だな」

「最低でも3人集めて9人にはしたいよね」

「ワイ1人で4人は固いで」

「俺は2人だ」

「おーっ！ 頼もしいな！」

「それなら今日は解散！ 明日の放課後に報告会な」

俺はカバンを背負って早々に教室を出ることにした。

と、廊下に出てすぐに教室に戻り、近くに居た森原に声をかける。

「悪い、寮の場所がわかんないんだけど…」

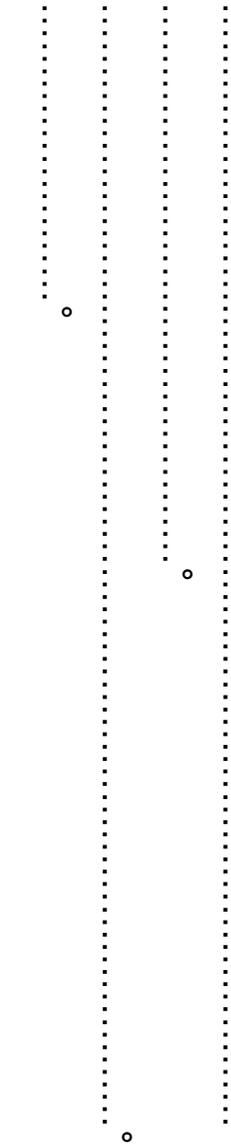
「なんや、そんなコトも忘れとったんかい！」

「ああ。おかげで昨日は教室で不貞寝だった」

「あー、そらしゃーないわ！ なら一緒に行こか」

俺は一度寮の場所を確認してから勧誘活動を始めることにした。

「えー！ 野球部って薬やってたアレだろ？」



「違う違う、その人たちを省いて、新しい野球部を作ろうとしてるんだ」

「まあ、どっちにしてもウチらは入るつもりないからなー」

「いえ、私は入ります」

「え？ マジ？」

「ありがとう！ 明日、放課後に3・Dで集まるから、ぜひ来てくれ！」

「はい、わかりました」

「あ、名前を聞いていいか？ 俺は3・Dの劉奏だ。あと敬語はいいらないよ」

「1・Aの東条健吾です。すみません、敬語は性分なもので…」

「ああ、それなら無理に治さなくてもいいよ。それじゃ、明日よろしくな」

「はい！」

「それにしても、中国人みたいな名前だよなー！」

「みたいじゃなくて中国人だよ」

「うわ、マジ!?!」

「うん、マジマジ」

と、こんな感じで名前を冷やかされながら、2人目の新入部員を確保した頃。

目の前には違う制服……いや、もう戦線の制服でいつか。

戦線の制服を着た女性が2人居て、その片方が目を見開いていた。

1人はこの世界に来て最初に会った人間で、狙撃銃の女である。

そして目を見開いているのもう1人の方は、すごく懐かしい女性だった。

いやいやいや、初めて見る人のはずである。

一応、原作には通信役として登場していたキャラだけど、そういう意味での懐かしさではない。

何だろう。

こみ上げるような、この感覚は……。

何だろう。

締め付けられるような、この感覚は……。

この感覚、どこかで…。

「奏人^{そうと}っ！ 奏人っ！」

気がつくとも懐かしい女は涙をポロポロ流しながら懐かしい名前を呼んでいた。

隣の狙撃銃女がその様子に目を見開いている。

周りの生徒達も注目している。

でもそんな事はどうだっていい。

懐かしくて、何かがこみ上げてきて、締め付けられる。

苦しい。

でも、その感覚も懐かしい。

おかしいぞ、俺は防御力999で各種無効化能力を設定したはずだっ！

物理も効かん、神秘も効かん、そもそも殺傷できんはずだっ！

なのに、なのに何なんだ、この感覚はっ！

怖い、怖い、こわい、こわい、コワイ、コワイ。

怖い怖い怖いこわいこわいこわいコワイコワイコワイッ！

「来るなっ！ 近づくなっ！ 近づいたら」

正面から肩を掴まれる。

「ひうっ！」

「落ち着いて！ 落ち着いてください奏人っ！ 大丈夫です、大丈夫ですから！」

「!?!」

” 大丈夫です、大丈夫ですから！”

彼女のその言葉にかぶって、遙か昔の光景が頭をよぎる。

遙か昔。

それは、90歳で自然死するよりも前。

孫を見るよりも、娘を見るよりも前。

創^{はじめ}(献帝)と結ばれるよりも、王宮に来るよりも前。

生まれるよりも、自称神に会うよりも前の……あれ？

そういえば、エロゲーやってた15歳という記憶しかなかったけれど……。

名前さえも覚えていないけれど……。

俺は確かに、劉奏になる前に一度生きていた経験があったんだ……。

という事は、劉奏になる前の名前は……。

「大丈夫です奏人っ！ この世界では近づいても死にませんからっ
！」

おそらく、この女の関係者で、奏人という男なんだろう……。

しかし……。

「？ どうしたんですか、奏人……」

「……………」

俺は黙り込み、どうするべきか考える。

まず俺は劉奏になる前の人生を憶えていない。

おそらく奏人という名前だったんだろうが、その場合、目の前の奴は俺のことをよく知っていることになる。

「奏人っ、覚えてますよね！」

「……………」

無視して考え続ける。

だとしたら、劉奏の前の人生を思い出すことでコイツとの話が噛み合うはずだ。

それに俺が成仏できない原因は、男友達云々よりこっちが本命な気がする。

だから…。

「遊佐です！ 狭霧遊佐です！」

「……………」

思い出すために、一度仕切り直さなければ…。

あと関係ない奴には入り込んでほしくないな、その狙撃銃の女とか。

それなら……。

「そ、奏人お……何か……何か言ってください……」

「……俺はあなたの事を憶えてないし、奏人じゃくて劉奏だ」

「そ、そんな、何で偽名なんか……」

「本名だ、学生手帳にもそう書いてある」

俺は学生手帳を取り出して見せてやる。

「え、うそ……なんで……」

「……」

「で、でもそれなら、さっき取り乱したのは何ですか!」

「懐かしい感じがして混乱したからだ」

「えっ!?!」

「奏人というのは、おそらく劉奏の前なんだろう」

「え、あれ、え?」

「……………」

「え、えと、えええーっつ！！？??？」

「…お互い混乱してるみたいだし、少し時間を置かないか？」

「あ、はい…」

「俺も劉奏の前を思い出してみるから…」

「はい…」

「そしたら2人で話そうか」

俺は空気になっている狙撃銃の女に目を向けた。

少しだけ眉をしかめた半眼で、だ。

それを見て、俺を奏人と呼ぶ彼女は頷いた。

確か、アニメでは遊佐とよばれていたか？

原作ではどうか知らないが、目の前にいる遊佐は聡明らしい。

「それで、どうやって連絡を取ればいいんだ？」

「え、あ、それでしたら…」

遊佐が狙撃銃の女に目を向けると、女は頷いた。

それを見て遊佐はバッグから通信機を出して、それを俺に渡す。

「ありがとう。念のために聞くが、発信機とかは入ってないよな？」

「あ、はい。盗聴機が入ってない方を渡しました」

狙撃銃の女がギロリと遊佐を睨んだが、遊佐はどこ吹く風。

この女、盗聴機入りの通信機を俺に渡させようとしてたな。

遊佐も相手が俺じゃなかったら、盗聴機入りの方を何気なく渡すつもりだったんだろう。

原作の時も思っていたが、相変わらず気に入らない外道組織だ。

「お前も大変そうだな」

「恐れ入ります」

「ちょっと、どういふことよー」

「お前がそれを言うか？」

「ゆりっぺさんがそれを言いますか？」

俺たちはジト目で睨んだ。

「うぐっ」

気を取り直して遊佐に振り向く。

遊佐もこちらに振り向く。

「それじゃあな」

「はい、また」

俺は2人と別れ、寮への帰途についた。

というか、忘れてたけど今まで注目されっぱなしだったんだな…。

周りの一般生徒からの視線が痛い。

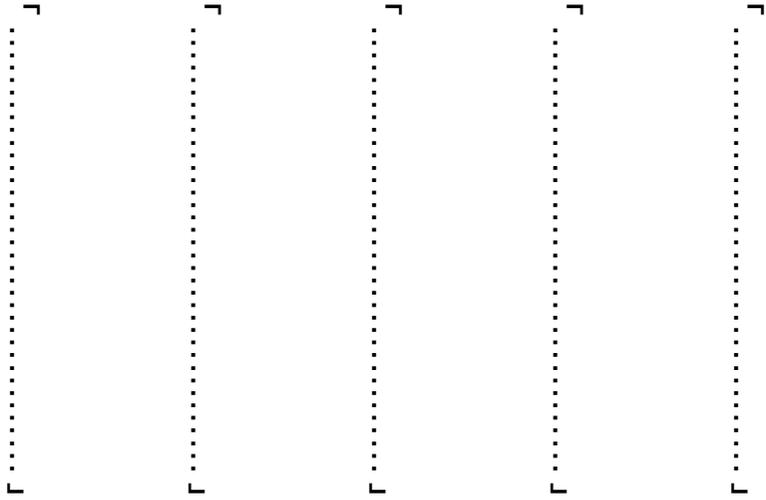
o r z

奏人と呼ばれたり、取り乱したり、劉奏の前（の人生）とか言ってみたり…。

一般生徒から見たら完全に変人じゃねえかよ…。

寮にたどり着いた後、苦勞して自分の部屋を探し出し、一息。

扉を開けると、そこには全裸でボディビルのポーズを取る眼鏡男が居た。



「……………」

「……………」

「……………」

扉を閉める。

そして一度階段を降り、部屋の番号を確認。

さっきの部屋で間違いことに首をひねりながら、同じ部屋の前へ。

同じ失敗を繰り返さないため、今度はちゃんとノックをする。

「どつぞー」

その声を聞いてから扉を開ける。

そこに居たのは、上半身裸でボディビルのポーズを取る男。

ガチャン。

もちろん即行で扉を閉め、全力でダッシュした。寮を出てきた所に立花奏。

「ちょうど良かった」

急ブレーキをかけて止まる。

「あなたの部屋の鍵。高松君と同室だから」

瞬間、世界の音が止まった。

高松とは、先ほど俺の部屋にいた筋肉眼鏡男のことである。確か原作にも登場している戦線メンバーだ。

「し、知ってる…」

「え？」

「手続きって、どのくらい時間がかかるの？」

「1ヶ月」

再び俺の精神が限界を迎えた。

「どうしたの？」

全裸ポディービルの件を説明すると、同情してくれた立花は自分の部屋に誘ってくれた。

「え、でも、まずいんじゃない？」

「1階だから、窓から入れれば大丈夫」

あの生徒会長が規則をガン無視とかビックリだけど、俺は気にしない。

天使ちゃんマジ天使である。

途端に精神が回復した俺は、立花の後をついていった。

そしてその夜。

立花の部屋のソファアの上で、俺はこっそり能力を作り、そして発動した。

発動したのは”自称神に出会う前の記憶を、全て思い出す能力”である。

俺は夢の代わりに、長い記憶を回想することになった。

劉奏の最初の人生（前書き）

Angel Beats!の世界編、第4話です。

新生野球部の勧誘活動中に狭霧遊佐と会った劉奏は、訳のわからない懐かしさと苦しさに襲われた。

それと遊佐の態度から、劉奏は自称神に会う前の自分が彼女の関係者なのだと当たりをつける。

図らずも成仏できない原因の新たな心当たりを見つけた劉奏は、自分の能力を使って奏人であった時の記憶を取り戻そうとするのだった。

劉奏が奏人であった時、遊佐との間で何があったのか。

臆病者の新たな記憶、ぜひご覧あれ。

劉奏の最初の人生

奏人に父は無く、母と兄だけがいた。

しかし2人は奏人を親戚のしずなさんに預け、旅に出ていってしまった。

奏人が”力”を受け継がなかったから。

奏人が病弱だったから。

だから、残されたのは病弱な自分の身が一つだけ。

そして…。

母が残した、別れの言葉だけだった。

……………。

ある日。

そう、その日は珍しく俺と兄が別々に呼ばれて話をしたんだ。

兄が先、弟の俺が後。

思えばこれが、母と兄を最後に見た時だった。

.....。

母に呼び出された俺は、兄とは別に俺だけを親戚の家に預けると言われたんだ。

親戚はあの有名な麻帆良市に住んでいて、最初はまた遊びに行けるのだと喜んだ。

俺は以前に麻帆良祭が催された時に来たつきりだったから、親戚の家を遊園地か何かと勘違いしていたんだ。

だから、母が自分に語り聞かせたお話は静かに聞いていて、内容もよく覚えている。

それは、母が悲しい運命を背負った女の子との間で経験した出来事だった。

静かに、聞こえやすいように、ゆっくりと語り始める。

「二人の心が近づけば、二人とも病んでしまう。二人とも助からない」

「そんな運命に囚われた子がいてね、私は助けたいと思ったの」

「だけど…」

そこで話を一度止め、母が顔をゆがめた。

しかし気を取り直したのか、また静かに語り出す。

「…海に行きたいって、その子は言ったの。でも、連れて行ってあげられなかった」

また顔をゆがめる。

でも話は止めず、語り続ける。

「やりたいことがたくさんあったの。でも、なにひとつ、してあげ

られなかった」

ゆがめた顔はそのままに、涙を浮かべる。

それでも話は止めず、語り続ける。

「夏はまだ、はじまったばかりなのに……。知っていたのに、わたしはなにもできなかったっ！」

もはや感情が抑えられないのか、涙しながら声を高ぶらせた。

何か、怖い。

「誰よりも！ 誰よりもその子の側にいたのに！ 救えなかったのっ！……！」

仕舞いには叫び出す母の姿を見て、俺は震えていた。

初めて見る母の姿に、俺は怯えていた。

「……………」

しばらくして正気を取り戻した母は、俺の怯えように気付いたのか。

「ごめんね、取り乱したりして」

そう謝って、抱きしめられた。

思えばこれが最後の親の温もりだった気がする。

そして再び静かな口調で、話を続けた。

「私は、今もどこかに居る、そんな子を助けたいの。私達は、それだけのために旅をする」

「たち？」

「ええ、お兄ちゃんも一緒よ。でも……」

ここで俺は、嫌な予感がした。

でも話はそんな俺に構わずに続けられる。

「奏人。力を受け継がなかったあなたには、幸せになってほしいから」

「……………」

「私たちのことを忘れて、幸せに生きて行ってね」

おぼえていたのはその言葉までで…。

気がついたら、いつの間にか母と兄はいなくなっていた。

.....。

しかし運命とは残酷なもので、俺はそうとは知らずに出会っていたのである。

いや、出会っていたという表現はおかしいか。なぜなら…。

俺は女じゃないし、行きたかったのも海じゃなくて近くのライブハウスだったけど…。

でも運命に囚われていたのは、確かに俺自身だったんだから。

そして、自分の運命に巻き込んでしまったのが、狭霧遊佐（なせりゆうさ）という女の子だった。

……。

姓が源になり、仕事に忙しいしずなさんの世話になりつつづけて、も

う中学3年の春。

奏人はほとんどの時間を自室で過ごす日々を送っていた。

ただ病気がちで、たまに全身が震える発作が起きて、友達を作れな
いだけ。

調子の良い日が無いわけではなく、虐められているわけでもなく、
単に不登校になっただけ。

毎日ゲームばかりして、時おり二次創作の小説を読んで、ただただ
漫然と消化する日々だった。

隣の家に引っ越してきた遊佐と出会ったのは、学校のプリントを持
つてきてくれた4月のことである。

.....。

ピンポーン

「誰？」

「狭霧です。学校のプリントを持ってきました」

「ありがとう。ポストに入れといてくれればいいよ」

「いえ、直接手渡すように頼まれましたので」

「…わかったよ」

最初は事務的なやり取りだけだった。

……。

次の日。

ピンポン

「…誰？」

「狭霧です。学校のプリントを持ってきました」

この日も事務的なやりとりだけ。

……。

さらに数日後。

ピンポン

「狭霧さん？」

「はい、狭霧です。学校のプリントを持ってきました」

俺の方から名指しで確認していた。

.....。

1週間後。

ピンポン

「はい」

「はい、学校のプリントです。今日は調子良さそうですね」

「ッ」

そう言われて大きな声を出したのを恥ずかしく思った。

.....。

3週間後。

ピンポーン

「.....」

ピンポーン

「.....あい」

「あれ？ 調子悪いですか？」

「うん.....」

「それなら勝手にあがりますね」

「...え...？」

この日、初めて家に上がられたっけ？

この時はどうやって家の鍵をあけたのか疑問に思ったものだが、しずなさんが合鍵を渡していたのを後で知った。

「熱が39度もあるじゃないですか……」

「大丈夫、珍しいことじゃないから」

「珍しくないって、入院しないんですか？」

「昔はしてたけど、原因不明なのに必ず治るから……」

この時は納得しなかったけれど、高熱の翌日に普通に普段に対応を何度も繰り返したら、信じてくれるようになった。

……………。

そして3カ月後。

最近合鍵を使って入ってこられるのが当たり前になっていた。

この短期間に何十回も顔を合わせていれば、俺が体調の良い日も休んでいることに気付くのは時間の問題だった。

案の定、聞かれる。

「どうして学校に行かないんですか？」

「病気だから…」

「調子の良い日でも行かないですよね」

「いつ発作が起きるかわからないし…」

「発作なんて見たことありませんが？」

「最近は起きてないから」

「どれくらい起きてないんですか？」

「中学生になってから…かな」

「もう2年じゃないですか。大丈夫です、学校に行きましょう」

「で、でも…」

「大丈夫です、発作が起きてもフォローしますから」

「こ、怖くて、学校とか………」

.....。

あの日は何とか断ることができた。

でも…。

「諦めませんかからね」

この宣言通り、あの日を境に彼女は俺を学校に行かせようとはしはじめた。

まあ、調子の良い日に限っただけ。

彼女の印象は、無表情で事務的な喋り方をする、生活指導員みたいな女の子だった。

でもしずなさんの仕事がひと段落して、毎朝家に居るようになる少し印象が変わった。

あれは調子の良かったある日。

リビングで話している遊佐としずなさんを、俺は壁の裏に隠れて見ていたんだ。

「遊佐さん、いつもありがとうね」

「いえ」

「最近の奏人の様子はどう？」

と、しずなさんが尋ねたとき、遊佐と目が合った気がした。

そして…。

「調子が良いようです。昨日はパジャマのまま外に出ようとしてましたし」

「ちよ、そんなことしてないよっ！」

思わず突っ込んでしまった瞬間だった。

それから何度も人聞きの悪いことをあたかも事実のように話したりするの突っ込んでただけ…。

学校の先生が家庭訪問に来たあの日も、俺は壁に隠れて覗いていた

んだ。

.....。

ピンポーン

「はい」

「あれ、狭霧君じゃないか。ここは奏人君の家だよな？」

「はい、おばさんに合鍵を貰ってますので」

「源さんは？」

「仕事で学園長に呼び出されたとかで、今は……」

「そうか……。君は奏人君の看病のために？」

「いえ、同棲してるんです」

「ぶっ！ してないよ!？」

思わず勢い良く飛び出してしまっ、俺も学校に行ける日がある」とを教師に知られた瞬間だった。

そして遊佐さんがニヤリとした笑みを浮かべていた。

心なしか担任の教師もニヤリとしていた気がする。

「昨日脅されて初めてを奪われました」

「奏人君、キミは……」

「脅してないし奪ってもないよっ！」

「先生、もう首吊ってもいいですよね」

「ちよっ、人聞きの悪い冗談もうやめてえええーっっっ！！
！」

決定的な瞬間だった。

そしてその数日後から、調子の良い日に限って俺は学校に通うようになった。

学校は怖かったが、来ないと人聞きの悪いことを言いふらすと脅されていて、通うしかなかったんだ。

でも学校というのは、思ったよりも怖いところではなかった。

久々に起きてしまった発作も。

「先生っ！ 奏人を保健室に運ぶのを手伝ってください」

「う、うむ」

「落ち着いて！ 落ち着いてください奏人っ！ 大丈夫です、大丈夫ですから！」

遊佐と担任のフォローで大事には至らなかったしね。

気がついたら、俺にとって学校は楽しい場所になっていたんだ。

俺は遊佐にすごく感謝した。

.....。

11年ぶりに麻帆良祭にも参加した。

「あれ乗りませんか？」

「え、っ」

射的とか喫茶店とかサーカスとかパレードとかを楽しもうと思って
いた俺は、遊佐の指差したそれに顔を引きつらせた。

長いレールの敷かれた絶叫マシン。

いわゆるジェットコースターである。

「いや、俺は」

「あれ、怖いんですかー？」

「こ、怖くないぞっ！」

俺の様子を見て、遊佐はニヤリとしたんだ。

「た、ただあつちの射的をやりたいと思ってだな……」

「それでは射的の次に行きましょう」

「えっ」

ジェットコースターで悲鳴をあげまくって気絶してしまったのは言うまでもない。

だから俺は目を覚ました後、威厳を取り戻すためにある提案した。

「よし、あそこに行こう！」

「お化け屋敷ですよ。大丈夫ですか？」

「大丈夫！ 本物じゃなくて作り物ってわかってるから！」

その見通しが甘かったのは言うまでもない。

というか本物の幽霊が出てた気がするし、ポルターガイストなんて初めて見たし。

後で目を覚ますと、意識を乗っ取られていたと聞かされて体中が震えまくった。

そして最後には……観覧車。

「えっ」

「どうしたんですか？」

「い、いや、何でもない」

観覧車の頂上であまりの高さに震える破目になったのは言うまでもない。

遊佐はそんな俺を見て笑っていたが。

もう絶対に行きたくないけど、遊佐が楽しそうだったことは唯一の救いだった。

帰り際には最近2人ではまっている音楽を今度ライブで見に行く約束をして別れたんだけど…。

その約束は、果たされることはなかった。

.....。

麻帆良祭の次の日から、調子の悪い日が続くようになった。

「大丈夫です。きっとまた良くなります」

その時は俺も良くなることを疑ってなかった。

でも1週間が経ち…。

「今回は長く続きますね」

「うん」

「今まで一番長かったときは、どれくらい続いたんですか？」

「2週間、かな」

その2週間が経ち…。

「治らないね」

「うん、それに…」

「どうしました？」

「…いや、何でもない」

学園祭の後から変な夢を見るけど大したことでは無いだろう。

「治ったらライブ、見に行きましょう」

「そうだね」

そして、3週間。

訳のわからない遙か昔の時代の夢を見るようになってから、だんだん体が動かなくなっ…。

俺は少し体を動かすのもつらくなってきていた。

「…」

「遊佐…さん？ ……どう…したの？」

「い、いえ、何でもありません」

最初は気のせいかと思ったけど、看病してくれる遊佐までもが何度も苦しんでいた。

その姿が、今の状況が、何だか母が話していた経験にそっくりな気がして…。

「なあ…俺は…遊佐…好き…だけど…遊佐…俺のこと…どう…思
つて…るんだ？」

聞いてみた。そしたら…。

「好きですよ。最初は成長が楽しみな弟みたいに思っていましたけど…」

”二人の心が近づけば”

「勇気を出して、頑張る姿を見ていたら…あぐっ」

”二人とも病んでしまう”

「いつの間にか、好きになっちゃってましたっ」

”二人とも助からない”

「そんな…そんな、ことって…」

”そんな運命に囚われた子がいてね、私は助けたいと思ったの”

その瞬間、いままでの出来事が走馬灯のように頭をよぎった。

そういえば、俺の担当だった看護婦さんが、次々に居なくなっていた。

お医者さんが、何回も代わった。

幼稚園でたった1人の友達が死んだ時、俺も病気に苦しんでいた。

しずなさんは子供好きなのに、俺とは一緒の時間を作ろうとしなかった。

それに、教職の人なのに、学校に行けと言わなかった。

考えてみれば、すべてが繋がっている。

そして…。

「あぐっ、だからね」

「……………」

「頑張って治して、一緒に、ライブを見に行きましょう」

「……………」

今、俺だけじゃなくて、遊佐までもが、苦しんでいることも。

全てが繋がっていた。

「……………」
「どうしたんですか？」

「ッ、理由が……わかった」

「え！」

「二人の……心が……近づけば、二人……とも……病んで……しまう。二人とも……助からない」

「え、縁起でもないこと言わないでください！」

「母は……そんな……運命……に……囚われた……子を……助ける……ために……旅……立ったって……言ってた」

「あえ……？」

「まさか……俺がその……運命に……囚われた子……だった……なんて……」

「そ、そんなの気のせいです！　大丈夫です、大丈夫ですから！　気を大きく持ってください！」

「だから……」

だから、俺は言ったんだ。

「遊佐は……俺……から……離れて……」

「いや、嫌です！」

「離れ……て……」

.....。

あの後、俺から離れようとしないう佐は、頑張って俺を近くのライブハウスに連れて行こうとした。

気分が塞ぎこんでいるから、そんなことを考えるんだ、と。

俺の母の話に出てきた海じゃなくてライブハウスだけど、行きたいところにはちゃんといけるんだから、と。

俺も体中が痛みで辛かったが、遊佐の話に希望を持って頑張ってみた。

「はぁ……はぁ……グッ」

でも、途中で体中が震えてしまった。

「そんな…こんな時に、発作だなんて…」

「…めん…俺…置いて…て…ひとりで…」

「ひとりで行ったって意味がないんです！」

でも辿り着けなかった。

「どうして！ どうしてですか！ すぐそこなのに！ 家からさえ見えてる場所なのに！」

30メートルも無い、すぐ近くにあるライブハウスに、辿り着けなかったんだ。

だからその後、俺は遊佐が離れやすくなるように、言葉を突きつけたんだ。

“俺にはゲームがあるから遊佐も音楽もいららない”

その後、いつの間にか遊佐は居なくなってたんだけど……。

しばらく日が経つと少し体調が回復して、現実逃避で残っていたゲームの大半を消化し終えた頃。

いきなり目の前が真っ暗になったんだ。

そして気が付いたら記憶を失った状態で真っ白な部屋に居て、目の前に神を名乗る爺さんが居たんだ。

早朝の女子寮騒動（前書き）

Angel Beats!の世界編、第5話です。

奏人だった頃の記憶。

それは恋姫無双の世界で体験した幸せとは対照的で。

どうしようも無いほど過酷で、理不尽で、悲しみに満ちていて。

運命に押し潰された無力な少年の、神を恨んでもおかしくない人生だった。

全ての記憶を思い出した劉奏は、今何を思うのか。

……早朝の女子寮で。

臆病者の新たな騒動、ぜひご覧あれ。

早朝の女子寮騒動

目を覚ますと明るくて、視界がぼやけていた。

涙だ。

頬には濡れたような違和感があつて、
瞬まはたきすると涙がそこを伝つて
いく。

「遊佐…ごめん…ごめん…っ！」

俺は再び、泣き出してしまった。

……。

視界が晴れると、立花がじーっと黙って俺を見つめていた。

「」
「」

「」
「」

無言。

そういえば周りが見慣れない部屋だ。

装飾が女の子の子供の部屋で、俺が寝ていたソファもピンク色。

俺はなぜ……あ。

そういえば筋肉眼鏡との同室が嫌で立花に泊めてもらったんだっけ。

「」
「」

「」
「」

無言。

そういえば何時から見られてたんだろ。

聞いてみた。

「1時間くらい前」

瞬間、俺の時間が止まった。

「？」

ごてん、と首をかしげる立花。

「うわああああああーっっっ！……見られてたああああ
あああーっっっ！……」

別の意味で、泣き出してしまった。

.....。

再び落ち着いてきた俺は、今までの事を立花に話した。

立花は俺の成仏の協力者だからな。

俺が話している間、立花は俺の目を見て静かに聞いてくれていた。

戦線メンバーの遊佐に会って、ひと悶着あったこと。

そして俺には憶えていないもう一つの人生がある事実を思い出した
こと。

昨日の寝る時にもう一つの人生の記憶を取り戻す能力を作って、そ
れを自分にかけたこと。

最後に、どうしようも無い理不尽な運命に遊佐を巻き込んだ、最初の人生の記憶のこと。

「……………」
「そう……………」

「……………」

全てを話し終えた後、しばらくの間、沈黙が場を支配した。

「……………」

「……………」

どれくらいの時間が経ったのか。

立花は1つだけ、俺に聞いたんだ。

「成仏を目指すの、やめるの?」

たった、それだけのことを。

神を恨んだのかとか戦線に入るのかとかではなくて、それだけのことをだ。

俺の答えは決まっていた。

そう、俺は…。

「やめないよ」

2度目の人生で共に生きた彼女たちの元に行きたい。

たしかに最初の人生の記憶には衝撃を受けたけど、それが全てじゃないんだ。

むしろ2度目の方が90年と長くて、密度も濃い人生だった。

だから成仏したい気持ちは変わっていなかった。

でも…。

「でも、その前にやることができた」

「……………そう…」

「未練ができたからな」

「狭霧さん？」

「ああ。それと立花への恩返しもな」

「……………え？」

立花が目を見開く。

何だか初めて大きく表情が変わった気がする。

それくらい驚いている様子だった。

「何驚いてるんだ、今まで色々お手伝ってくれただろ？」

「見返りは期待してない」

「何言ってるんだ、貰えるものは貰っとけ。幸い俺には何でもできる力があるからな」

「ッ!？」

あ、今ビクって反応した。

何か叶えたいことがあるみたいだな。

なんだっけか？

もうかなり昔に見たアニメのことだから、原作の知識が曖昧なんだよなあ…。

「でも…」

「おいおい、俺に未練残して何時までも居させるつもりか？」

「……………それなら、1つだけ……………」

遠慮しようとしたみただけど、俺の成仏を持ち出したら言つ氣になつたみたいだ。

何だろう。

俺はゴクリと唾を飲み込む。

「音無弓弦おとなしゆずるつて人を、ここに連れてきて欲しい」

それは、たしか原作の主人公の名前だったような気がする。

まさかの原作ブレイクだった。

でもまあ、今更か。

そう思って死んだ音無を召喚。

彼で合っているのを確認すると、今度は立花が涙を流した。

俺はさっきの仕返しですつと見ていることに……………しないで、そつと

部屋を後にした。

.....。

「えっ……どうして奏人が女子寮に居るんですか？」

部屋から出た瞬間、狭霧遊佐と鉢合わせしてしまった。

しまった、何俺は普通に扉から部屋を出てるんだ！

窓から外に出るべきだったのに。

「それにそこは天使工むぐっ」

即行で口を塞いで部屋に引き込んだのは言つまでもない。

……相変わらず、締まらないなあ。

泣いている立花と目が合つて、せっかくの気遣いが台無しだった。

……。

「おい、あんたら誰だっ！　ここはどこなんだよっ！」

「どうして奏人はこんな朝早くに天使エリアに居るんですか！　それにその人誰ですかっ！」

「おまえこそ誰なんだっ！」

「お、おい、ちょっとは落ち着けてっ！」

「説明してくれよ（ください）っ！……！」

何だこのカオス？

いやまあ、俺のせいなんだけど、まさかこんな事になるとは思わなかった。

2人に詰め寄られながらもう1人の方に目を向けると、彼女はコテンと首をかしげる。

いやコテンじゃなくて、この状況を何とかしてほしいんだけど。

「無理」

うわ、即行で匙^{さじ}投げやがった。

まあ気持ちはわかるけど…。

いくら天使ちゃんマジ天使でも、この状況には対応できないらしい。
とりあえず俺は遊佐を落ち着かせて後回しにし、音無の方から対処
することにした。

……。

1時間後。

「どうしてこうなった…」

俺は orz の格好でうなだれる。

隣では遊佐が何も無い空間を見て目を見開いていた。

そこはただの何も無い空間ではない。

先ほどまで音無と立花の2人が居て、今は誰も居ない空間である。

「……………」

そう。

2人は俺たちを置いて、先に成仏してしまったのだった。

.....。

話は数十分前にさかのぼる。

俺はまず、俺が立花の部屋にいた理由は後で説明するからと遊佐を黙らせた。

その後、音無にここが死後の世界であることを説明したが、理解が遅い。

疑問に思っただけで生前のことを聞いてみると、記憶を失っていることが発覚。

だから俺が能力を使って音無の記憶を全て取り戻させた。

原作の直井のような中途半端ではなく、全てを。

列車事故に巻き込まれて、同じ境遇の人達を救って死んだ、音無の記憶全てを、である。

そうしたら音無がいきなり成仏しそうになって慌てたが、そこは俺が阻止した。

まだ立花の用が終わっていない。

で、音無にここが死後の世界であることを納得させた後は展開が早かった。

おそらく先ほどの成仏未遂を見て、さすがの立花も慌てたんだろう。

さっさと自分が音無の心臓で生きながらえたことを告白。

で、音無に「ありがとう」を言うためだけにここで生きながらえてきたことも白状。

遊佐は驚いていたが、空気を読んで黙っていた。

とというか、俺と遊佐自体が空気だった。

そして…。

「音無くん、命をくれてありがとう」

「どういたしまして。俺も役に立ったのがわかって嬉しいよ」

「うん。劉奏君も、機会を与えてくれてありがとう」

「え？ あ、ああ」

いきなり話を振られてビックリしていると、いつの間にか立花が消えていた。

そして、元々未練が無かった音無も消えていた。

まあ、成仏阻止の時には立花が消えるまで成仏できないようにしただけだからな。

立花は他の人も成仏させたいとか全く言わなかったから、音無も他の人を成仏させようとは考えない。

最初から人生に満足している彼が居なくなるのも当然だ。

当然…では、あるのだが…。

「……………」

「……………」

原作開始前のこの時期に音無と立花が成仏なんて、原作ブレイクどころの話じゃない。

副会長の直井は音無に救われていないし、戦線は立花を神の手先と誤解したままで和解の機会も無くなった。

……………。

もしかして、改悪し過ぎちゃった？

もしこの状況で遊佐によって立花への誤解が解かれたら、戦線メンバーたちは物凄い罪悪感に囚われることに…………

……………うん、そうなくても良い気がするな。

自業自得だし。

まあ、おそらくは神にでも責任転嫁するのがオチだろうが、俺の知ったことではない。

平然と俺に盗聴機を仕込もうとする奴の組織を助けてやる義理もないしな。

だからとりあえず、俺がやるべきことは……………。

「 」

「 」

未だに呆然としている遊佐への説明だな。

はあ…。

本当に、どうしてこうなったんだろ。

.....。

あの後。

再び混乱した遊佐を落ち着かせ、午前の授業時間をめいいっぱい使って、今までのことをひとつずつ説明していった。

まずは、俺が2つの人生の経験があることと、立花が遊佐たちと同じ人間であったことの確認を。

次に、成仏したいのになぜか成仏できない俺に、立花が協力を申し出てくれたこと。

幸せな人生とはいっても、男友達や学校での青春を知らなかったから、そこに成仏への道を見出したこと。

「え？ それなら奏人は……あの、何て名前でしたか……」

「劉奏」

「そう、その劉奏の時は何をやっていたんですか？」

「んー、三国志の時代だったからね。皆が小学1年生の時にはもう働いてたよ」

という感じで話を一時中断し、話は劉奏の頃の記憶へ。

自称神の爺さんに能力を貰って忠実な神童と念話ネットワークを生み出して戦争を止めたことを話した。

勿論、18禁な事とかハーレムの事をぼかしてである。

その上で天の御遣いとして王宮で幸せな人生を送ったことを話した。

「……………(ジーン)」

「な、なに？」

「別になんでもありません。さぞ沢山の女性に囲まれてたのでしょ
うねー!」

「う、うぐっ、な、なんで…」

即行でばれたけど。

というか、戦争を止めた事よりもそっちに注目されるとは思わなかった。

「忠実な神童には女性も多く居たのでしょっし…」

「うぐっ」

「男友達を知らないと言っていましたし」

「げっ」

「その時代なら血を引き入れたがる家も多かったでしょうっし、それに…」

「そ、それに…?」

「それに幸せと言いながら、何かを誤魔化していますから」

「ぐはっ」

結果、全てを白状させられて、白い目で見られてしまった。

まあ、さすがに初めてが母だったとか実の子や孫とも18禁なことをした事とかは隠し通したけどな。

神童を全員女性にしたとか、物凄い人数だったとか、分身能力を使ったとか、神童全員の尻に敷かれていたとか。

そっついう事は全てばれてしまったんだ。

.....。

で、話を元に戻して、今までの出来事の説明を再開する。

確か立花の協力を得て、男友達や学校での青春を送れば成仏できる

と考えた次だったな。

立花の助言に従って新生野球部を作ることになって、勧誘活動の最中に遊佐と出会ったこと。

遊佐に訳のわからない懐かしさを感じて、俺が憶えていない最初の人生の存在に気付けたこと。

初めて自分の寮の部屋を開けたら、筋肉ムキムキの眼鏡男が全裸でポディービルのポーズをとっていたこと。

「くすっ」

2度目はちゃんと確認してから入ったけど、上半身裸のままでもポディービルのポーズをとっていたこと。

「ぶっ、くくく」

全力で逃げ出した先に居た立花に事情を話したら、同情されて部屋に誘われたこと。

「なっ…」

何か言いたげな遊佐を無視して、俺は立花には手を出さずにソファ

―で寝たことを強調する。

続けて創造能力で自分の過去を思い出す能力を作り、それを使って最初の人生の記憶を取り戻したこと。

「お、思い出していたんですかっ！」

「あ、ああ」

「何ですぐに言ってくれなかったんですかっ！」

「いやまあ、後で落ち着いてから2人で話そうと思って……」

「……そう、ですか」

「話を続けるぞ」

「あ、はい」

今まで協力してきてくれたお礼に、立花に頼まれて俺が音無をこの世界に召喚したこと。

そして、2人きりにしてあげようと部屋を出たら、遊佐にばったり出くわしたこと。

その後は遊佐の覚えている通りということで、ようやく遊佐に全てを説明し終えた。

時計を見れば、いつの間にかもう昼の11時。

本当に、もう……。

今日は説明ばかりで、疲れた。

……。

そして俺が一息ついていると、今度は遊佐の方から話しかけてきた。

「奏人も、色々大変だったんですね」

「ああ」

「今度は私の方から、いいですか？」

「え？」

ま、まだ続くのか……？

「生前の、一緒にライブハウスに行こうとして、辿りつけなかった後……」

”俺にはゲームがあるから遊佐も音楽もいららない”

そう伝えて、俺が遊佐を突き放した後のことだよな。

何時の間にか遊佐が居なくなつて、俺が現実逃避でゲームに没頭していた時のことだろうか？

「諦めなかった私の想いを、最期を、奏人に知ってもらいたいんです」

「なっ!?!」

諦めなかった……だって？

「聞いて……くれますか？」

「あ、ああ」

俺は、彼女の言葉に頷く事しかできなかった。

遊佐の想いと最期（前書き）

Angel Beats!の世界編、第6話です。

遊佐から明かされた衝撃の事実。

劉奏の最初の記憶にある、奏人が遊佐を突き放した、あの後。

遊佐は突き放されてもなお、諦めていなかったのだという。

驚く劉奏は、遊佐の話をただただ聴くしかない。

臆病者の新たな未知、ぜひご覧あれ。

遊佐の想いと最期

「あの日は、私にとって衝撃的な1日でした。

奏人は何か新しいことをするたびに怖がり、嫌がっていましたけど…。

私自身を拒絶したことは、あの日まで1度もありませんでしたよね。

” 気を強く持つてください！”

” 行きたいところにはちゃんといけるんですから！”

家から30メートルも離れていない、部屋の窓からさえも見える場所にあるライブハウス。

まるで私の言葉を否定されたかのように、そんな場所にさえ辿り着けなかった、次の日のことでしたね。

あの日も奏人は寝込んでいて、私も調子が悪くて、それでも看病だけはしていました。

背中がズキズキと痛んでいましたが、それよりも心の痛みが酷い、そんな朝でした。

いつの間にか目を覚ましていた奏人が、思いつめた顔をしてましたよね。

私が尋ねると、奏人は意を決したような顔をして、言葉を発しました。

<遊佐…俺には……ゲームが……あるから……>

嫌な予感がしました。

<遊佐…も……音楽…も……いら…ない……>

初めて、奏人に拒絶されました。

好きだと言ってくれたのに、私も好きなのに、まるで物みたいに言われました。

あんまりな宣告に、足元が崩れ落ちる気分でした。

もう、立ち直れないかと思いました。

泣きながら、おぼつかない足取りで、部屋を出るしかありませんでした。

でも…。

動かない体で、いつもの何倍もの時間をかけて階段を下り、いつもより重い玄関の扉を開けた、その時。

<ぐすっ……うっ……うっ……うわあああああああー！ー！
ー！っっっ！ー！ー！ー！ー！>

泣き叫ぶ声が、聞こえてきました。

……。

諦められるわけ、ないじゃないですか。

皆が高校受験の勉強に必死な時期に転校してきて、クラスメイトの誰よりも早く仲良くなれた、最初の友達だったんですよ。

出会った時には固くて暗かった表情が、会うごとに柔らかくなって、満面の笑顔を見せてくれるようになったんですよ。

怖がりなのに私のために勇気を出してくれて、私が初めて恋をした相手で……。

”……俺は……遊佐……好き……”

”二人の……心が……近づけば、二人……とも……病んで……しまう。二人とも……助からない”

”だから……遊佐は……俺……から……離れて……”

”遊佐……俺には……ゲームが……あるから……、遊佐……も……音楽

…も……いら…ない…”

”ぐすっ、うっ、うっ、うわあああああああー！
ー！っっっ！……！”

私を巻き込まないために、つきたくも無い嘘をつく、かけがえのない奏人なんですよっ！

諦められるわけ……。

諦められるわけ、ないじゃないですかっ！

その時、ちょうどおばさんが帰ってきたんです。

泣き叫び続ける奏人の声が響く中、私は涙を流しながら玄関で拳を握り締めていました。

それを見て状況を理解したおばさんは、奏人が苦しんでいる症状について、知っていること全てを教えてくれました。

そしてそれは、私に一筋の希望を見出すことになりました。

.....。

おばさんが今まで家を留守にしがちだったのは、教職の仕事とは別に奏人を救う手立てを探していたからでした。

そしてその中でわかったことを、おばさんの経験を交えて話してくれました。

く奏人の症状は平安時代から多くの前例が確認されているけど、—

つとして治った例が見つからないわ>

<そのことがわかってから私は手を尽くして、医療からオカルトまで幅広く手を出しけど、結果は…>

おばさんは言葉を濁して首を振りました。

<でも治った前例がなくても、症状の進行を遅らせた前例なら存在するの>

<その全てが奏人の家系に伝わるオカルト的な”力”によるものだった。けど奏人は”力”を持ってないわ>

<母と兄が”力”を受け継いだんだけど、肝心の2人は行方不明。7年も捜しているけど見つからないのよ>

私はその母と兄に怒りを感じました。

確か2人は奏人のような症状の子を助けるために旅立ったと言ってたはずです。

自分の家族がそうになっているのに、どうして2人は助けに来ないんですか！

相手が知らないことを怒るのは理不尽かもしれませんが、そう怒らずにはいられませんでした。

その間にも話は進んでいて、おばさんは症状の特徴を教えてくださいました。

<海が多いんだけど、症状が進行した後にどこかに行きたいって言うことが多いの>

”…行きたい…所に…行ける……うん…辛い…けど…ライブ……”

<でも叶えられなかった例ばかりで、叶えられた例が一つもないわ>

”そんな…こんな時に、発作だなんて…”

<海辺の町で、目の前に海があるのに辿りつけなかった。そんな例もあるの>

”どうして！ どうしてですか！　すぐそこなのに！　家からさえ見えてる場所なのに！”

おばさんの話してくれた前例は、怖いくらいに今の奏人にそっくりでした。

でも、私はそこに一筋の希望を見出したんです。

”症状が進行した後にどこかに行きたいって言う”

”叶えられなかった例ばかりで、叶えられた例が一つもない”

どこかに行きたい望みを叶える。

その最初の前例になれば、奏人も助かるのではないか。

穴だらけの、何の根拠もない希望だけど。

奏人をライブに連れて行ければ、奏人は助かるかもしれない。

私にはそれに縋るしかありませんでした。

.....。

一緒に30メートル先のライブハウスに行く。

一見簡単そうに見えるそれがとても難しいことは、もうわかっています。

ですから奏人が極力歩かなくて済むように、ライブハウスまでの足を用意しなければなりません。

さすがに私が奏人をおぶることはできませんので、奏人を車椅子に乗せて、私が押するのが良いでしょう。

そう思っつて車椅子を購入しようと思いつつも、どこに行けば買えるのかがわかりません。

一緒に見たいと言っていたグループのライブが再び行われるのは1週間後ですから、麻帆良中を探し回るわけにもいきません。

おばさんに相談してみたら、知り合いの伝手で借りられるようでした。

これで一安心ですが、しかし……。

まだ不安は残ります。

車椅子で行くには一度1階まで降りる必要がありますが、1週間後の奏人が1階まで降りられる保証がありません。

それに、もしライブ中に発作が起きて大事になってしまったら、たどり着けないより酷い結果になるかもしれない。

考えたくないですが、1週間持たない可能性も……。

……………。

1週間後のライブを悠長に待っていただけません。

誰かライブをやっている人で、私達の好きなあのサッドマシンの曲を演奏できる人に来て貰わなければ……。

でも私は転校生で、毎週ライブハウスに行っていたわけでもないですし、どうしたら……。

と、そこで思いついたのは、麻帆良郊外のシャッター通りで路上ライブをやっている他校の女性。

3日に1回は演奏していて、演目の中に私達が好きなサッドマシンの曲もあるので、何度か聞きに行っていました。

最近はその奏人の看病で行っていませんでしたが、彼女なら事情を話せば家でライブをやってくれるかもしれない。

お金なら財布の中身全部あげてもいい。

足りないなら両親から前借りしよう。

思い立った時にはもう行動していました。

まだ昼の3時で昼食も食べてなかったのに、商店街で待ち伏せを始めました。

.....。

しかし、その日に路上ライブの女性は来ませんでした。

私と同じように1つのシャッターの方を見て首をかしげている人がちらほら居ました。

話を聞いてみると、3日前には例の路上ライブの女子中学生がいて、昨日と一昨日はいなかったらしいです。

だから今日は来ていると思って期待して来たのに来なかった、とそう言っていました。

.....。

次の日。

この日も私は商店街に待ち伏せしていました。

本当は奏人に会いたくて仕方ありませんが、ここは我慢です。

”二人の心が近づけば、二人とも病んでしまう”

肝心な時に病んでいるのは嫌なので、我慢しなければいけませんで
した。

奏人……。

この日も路上ライブの女性は来ませんでした。

……………。

3日目。

この日も商店街で待ち伏せです。

奏人の様子はおばさんから聞いていて、部屋からゲームの音が聞こ
えるようになったとか。

調子がよくなったみたいで嬉しいです。

でも、寂しいです。

そして、この日も路上ライブの女性は来ませんでした。

おかしい。

そう思って私と同じく首をひねってシャッターを見ていたサラリー
マンに話しかけました。

やはり同じことを考えていたみたいでして…。

<本当あの子どもどうしたんだろ。ついこの前まであんなにキラキラした目で演奏してたのに…>

と、首をひねり続けていました。

何か、あったのでしょうか。

……。

4日目。

学校でも待ち伏せをしましたが、路上ライブの女性は現れませんでした。

商店街にも来ませんでした。

しかし、路上ライブの常連さんの人が良いことを教えてくれました。なんと彼女は岩沢まさみという名前で、近くの定食屋でバイトしていたらしいのです。

1週間ほど前に見かけたとのことなので、さっそく次の日の朝に行ってみることにしました。

.....。

え……そんな……。

5日目、私は昨日の常連さんに教えられた定食屋に行つたのですが、岩沢さんは6日前のバイト中に倒れたらしいのです。

私は搬送された病院を教えてもらい、急いで岩沢さんの所に駆けつけました。

<岩沢さん、岩沢まさみさんの病室はどこですかっ！>

<え？ えっとあなた、岩沢さんのとも >

<どこですか！>

<び、B塔の301 >

<ありがとうございます！>

後ろから走らないように注意する声を見殺して全速力で岩沢さんの病室へ。

岩沢さんは6人部屋の右側中央のベッド。

そこには……。

<なんで……どうして……>

記憶にある、輝くような目をした同級生ではなく。

<そんな……一体なにが……>

頭に包帯を巻いた姿で眠っている、岩沢まさみという名の患者がいただけだった。

そして私の眩きが聞こえたのか、看護師が彼女のことを教えてくれた。

<頭部打撲、脳梗塞による失語症。原因は、両親の喧嘩のとばっちりですって>

その瞬間、希望は失われました。

失語症。

もう、彼女は歌えないのです。

たった2日、たった2日、遅かったただけなのに……。

私は運命を呪い、おぼつかない足取りで家に帰りました。

.....。

家に帰ると、ちょうどおばさんも家に着いたところでした。

いつもの小型車ではなく、ワンボックスカーからおばさんが降りてきます。

私はボーっとそれを眺めていましたが、おばさんがバックドアを開けた所で目を見張りました。

車椅子が載っていたのです。

そうでした。

岩沢さんがダメだったからといっても、まだ希望は失われていません。

明後日にはライブハウスでサッドマシンの曲が演奏されるんです。

私は居ても立ってもいられず、車椅子を下ろすのを手伝いました。

明後日。

あと1日我慢すれば一緒にバンドを見に行けて、奏人も助かる。

私はそう、疑っていませんでした。

だから次の日は、ライブハウスに行って事情を説明し、協力をお願いしました。

当日、すぐ近くの家の2階にいる奏人を車椅子に乗せて、ライブハウスマで連れて来る手伝いを頼みました。

お金なら払いますからお願いします、と頭も下げました。

私の熱意が通じたのか

<お金はライブ代だけで良いよ。4時くらいに行けばいいかい？>

<はい、それをお願いします！　ありがとうございます！>

<あの青い屋根の家だね？>

<はい！>

大人の男性の協力まで、取り付けられました。

おばさんにもこのことを伝えると、一緒に喜んでくれました。

.....。

ですが、その当日を迎えることはありませんでした。

ライブハウスの人の協力をおばさんが喜んでくれた後。

私は上の階から聞こえてくるBGMで奏人が元気だと安心しながら、おばさんとライブ当日の打ち合わせをしました。

ここ数日は私も調子が良いし背中痛みも無いので、それが奏人の元気を示しているのだと安心していました。

しかし夕日が落ちて外が真っ暗になった頃、ふとBGMのメロディが気になりました。

確かにBGMは流れて続けていますが、そのメロディが昼から変わってないのです。

おばさんはおそらく寝たのだと言いましたが、何か嫌な予感がしました。

念のためと言って確認すると、部屋には机に突っ伏している奏人の姿がありました。

髪がボサボサで、パソコンの横にはDVDと食器が積まれている、部屋も暗くて臭いが酷かったです。

あまりの変わり果てた様子に心が痛みながらもどこか安心し、部屋の窓を開けました。

そして奏人の肩に手を触れ

<ひゃっ!!-->

あまりの冷たさに引っ込めてしまいました。

.....。

はっ！

と正気に戻った私は、
すぐさま奏人を仰向けに寝かせ、
心臓マッサージを
始めました。

<奏人、奏人、奏人、奏人……>

一向に冷たいままの奏人の顎を持ち上げ、にわか知識の人工呼吸。

これが私のファーストキスだったと思います。

ですが、あの時はそんな事を気にする余裕もなく、必死に心臓マッサージと人工呼吸を繰り返していました。

<戻って！ 戻ってきて！ 奏人っ、奏人おーっつ！！！！>

私の声が聞こえたのか、おばさんも1階から駆けつけてきて、すぐさま病院に連絡してくれました。

でも、既にもう、手遅れで…。

搬送された病院で、死亡が確認されただけでした。

.....。

その後のことはよく覚えていませんが、ボーっとしたまま道路を歩いていたんだと思います。

視界が真っ白になっても、クラクションが盛大に鳴っていても、何もかもがどうでも良くて…。

次の瞬間には、この世界に居たんです。

景色が様変わりしているのも、服が変わっているのも、何もかもが
どうでも良くて…。

この世界にきた後も、私はボーっとしたままでした。」

ふたりの再始動（前書き）

Angel Beats!の世界編、第7話です。

遊佐を拒絶し、ゲームに逃げていた6日間。

その間、遊佐は奏人を助けるために頑張り続けていた。

そして親戚のしずなも、劉奏を助けるために長年苦勞し続けてきた。

そこから透けて見える、自分が思っていたより愛されていた事実。

過去を語った遊佐の話は、もう少し続く。

話が終わったとき、劉奏は遊佐とどんな関係を築くのだろうか。

臆病者の新たな関係、ぜひご覧あれ。

ふたりの再始動

遊佐の話を聴いて、俺は驚いていた。

俺が全てを諦めて、拒絶して、ゲームの世界に逃げ込んでいる、その短い間に様々なことが起きていたことに。

邪魔に思っただけ避けられていたとばかり思っていた親戚のしずなさんが、俺を助けるために頑張っていたことに。

そして……。

遊佐の想い。

当時は両思いだと内心喜びながらも、母の経験と状況が似ていたから素直に喜べない状態だった。

ここで記憶を取り戻してからは、実は遊佐は病気の俺を気づかって好きと言ったのではないかと……。

俺を元氣付けるための、優しい嘘だった可能性があると思っていたんだ。

俺にとっては、俺が拒絶したら遊佐が居なくなっただけという事実が全てだったからな。

それが、まさか……。

何のとりえもない、創造能力も、改造能力も、まだ持っていないかつ

た、あの時の俺が…。

あんなにも本気で想われていて、そんな俺を本気で救おうと頑張ってくれていたなんて……。

そう思っていると、遊佐は息を落ち着けて、意を決したように再び声を発した。

「奏人」

「な、なに…？」

遊佐は俺の両肩を掴み、まっすぐに俺の目を見据えた。

顔が真っ赤で、でもその瞳はとても力強く、俺がたじろいでしまうくらい真剣で…。

思わず目を逸らすと、逸らした方の頬に手を添えられて…。

再び目が合うと、遊佐は静かに話し始めた。

「私は今でも後悔しています。どうしてあの後、無理をしてもずっと傍に居なかったのかと」

「いや、それは……」

ダメだと否定しようと思ってもできなかった。

結局、遊佐はあの後に亡くなったのだから。

そのような事を考える俺を、遊佐は変わらずに真剣な目で見つめていて…。

俺が添えられた手と反対の方に目を逸らすと、そちら側の頬にも手を添えられて。

再び目が合うと、遊佐は俺の両頬を手で挟んだまま声を発する。

「私は、今でも奏人が好きです。たとえ名前が違ってても、90歳を超えてても、他に大切な人がいたとしても」

「なっ………!!」

まさか、そんなことを言われるとは思わなかった。

昔にどれだけ思われてても、俺は恋姫無双の世界でのことをほとんど話したんだ。

確かに自分の母や子や孫とまで18禁な関係だったことは話していないが、それでも他のことは話したんだ。

俺が人の心や体を弄くっていたことも、筋肉漢女を間接的に殺したことも、とんでもないハーレムを作っていたことも。

現に全てを白状させられた後、遊佐は俺を白い目で見ていたはずだ。

「なっ、なんで？ 俺は……」

「奏人がしてきた事は知ってますし、他にも何か隠していることはわかります」

「え、うそ……」

「わかりますよ、奏人のことです。何があっても奏人は奏人です」

「こんなロクデナシなのか？ 前の世界じゃ近親相姦もしてた、孫ともしてた。それでもか？」

「ッ!!」

隠してきたことを明かすと、遊佐は声を詰まらせ、頬から手を離れた。

当然だ。

合意の上とはいえ、現代を生きてきた人間に受け入れられるものではない。

いや、当時でも孫はないか。

やはり、俺みたいに変態は…。

「それでもです!」

「え……」

まさか、そう返ってくるとは思わなかった。

「びっくりしましたけど、よく考えれば当然です。子や孫も同じ神童ですよね」

「んなつ!」

どうしてわかった!?

「あ、やっぱりそうだったんですね」

あ、鎌をかけてただけか…。

「何でもできる力をもらって、危険な世界に送られて…。むしろそれだけで済んでいるのは、逆に凄いです」

「え……」

どういうことだ？

「美味しいものも食べ放題で、服も好きなデザインを楽しめて、遊園地も作れて、音楽も聴き放題ですよね？」

「まあ、確かに……」

「私なら自分だけ安全な娯楽だらけの世界を作って、そこに奏人を連れて、死ぬまで遊んでしまいます」

「は、ははは」

世界の創造。

そういえば、やろつと思えば簡単にできたんだよな。

やらなかったけど。

そう考えると、俺は戦争を止めて、その後も王宮で働いていただけマシなのかもしれないな。

全部、彼女たちのおかげなんだけど。

「だから、私は奏人が好きです。奏人は……私のこと、今でも好きですか？」

俺？

俺は遊佐を……。

どう思っているんだろう。

「……………」

遊佐は俺の返答を待っている。

俺が奏人の時に好きだった女性……それは間違いない。

好きか嫌いか……間違いなく好きだ。

大切か否か……間違いなく大切だ。

それは一人の女性としてか……勿論だ。

人間として大切、という部分も大きくはあるが…。

まだ能力も持っていなかった頃に、唯一俺を男として好きになってくれた女性だ。

記憶を思い出す前の、この世界で出会ったときから、遊佐は特別な感じがしてたしな。

意識して、大切に思わずにはいられない。

なら他を捨てて彼女だけを選ぶか……ノーだ。

確かに人間としても一人の女性としても、とても大切で、かけがえが無い。

でも、それは恋姫無双の世界の彼女たちも同じだ。

分身とはいえ一人ひとりと真剣に向き合ってきたから、遊佐もその一人としか感じられない。

では見捨てられるか……当然ノーだ。

分身で真剣に向き合ってきた彼女たちにだって、誰一人として見捨てた事はなかった。

人数は多いが、その全てが俺にとってかけがえの無い存在だったんだ。

遊佐も同じである。

「……………」

その遊佐は黙って俺の返答を待っていて、不安そうな顔で緊張している。

か、かわいい…。

涙を溜めて瞳を揺らしているのが、なんともまた……

じゃなくて！

待っていているんだから応えてあげきな。

俺はさっき考えたことをそのまま遊佐に話した。

そして…。

「ぐすっ、嬉しいっ…ですっ」

「むぐっ」

満面の笑顔でキスされた。

そしてソファーに押し倒される。

「ゆ、遊佐っ、何をっ」

「奏人、今なら女子寮、誰もいないから……」

「え、でもここは…んぶっ」

「んっ、ちゅくっ、もう誰の部屋でもないです…んっ」

今どんな体勢かと言うと、ソファから背中がずり落ちた状態で寝ている俺の腰に、遊佐が正面から跨いで座っている体勢だ。

首の後ろにソファの縁、ふち両頬に遊佐の手、そして唇に遊佐の唇だから、動くに動けない。

そして頬から離れた遊佐の手が…。

「んっ、ぶはっ、ちよっ、こんな真昼間から…」

「大丈夫です。恥ずかしいですけど我慢します」

「いや我慢しなんぶっ、んぶっ、んーっ!…」

その後、あまりにも積極的すぎる遊佐の様子を疑問に感じながらも、俺は遊佐の求めに応えることにした。

まあ、その後はほとんど俺がリードする感じになっちゃっただけど。

前の世界では尻に敷かれてばかりだったとはいえ、80年間の経験は伊達じゃない。

しかも分身とはいえ毎日誰かのご褒美になっていたんだから、ねえ。

今日が初めての遊佐が攻めから受けに変わるのは時間の問題だった。

.....。

で、事が終わった後に、遊佐が積極的すぎる件について聞いてみる
と…。

「はあ……はあ……ふう……んっ……んあ……」

答えられる状態ではなかった。

時間を置いて再度聞いてみると…。

「奏人は成仏したいようですから、その前にできるだけ……」

そう答えられました。

確かにその通りだが、しかし……。

「わかっています。私がお願いすれば奏人が迷ってくれることは」

「え、なら何で……」

「満足したら成仏するんですよね？ おそらく私の方が先に成仏し
てしまいますから」

「もう満足……ということか？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

ま、まあ、恥ずかしそうに真っ赤に顔を染めた遊佐が可愛かったと言っておこう。

俺たちは無言のまま食堂へと歩いていった。

はあ…。

…相変わらず、締まらないなあ。

.....。

しかし、俺たちは食堂に辿りつくことができなかった。

「あっ、やっと見つけた！ もーっ、放課後に報告会なのに授業サボらないでよーっ！ もうすぐ6時間目はじまるよー！」

放課後、俺は空腹を耐えながら新入部員たちを待った。

と、そこに…。

「こんにちは、生徒会副会長の直井です」

「……あ、い、りゅーぞーでう」

「…大丈夫ですか？」

「……た、め……」

「あー、しゃーない、ワイが変わりにやったるわ。森原や、よろし
ゆうー!」

「よろしく。会長から話は聞いています。新生野球部の設立許可書
です」

「おー、おおきに! 部長の所にサインやな。劉奏、ワイでええ?」

「……たゝのゝむ」

「よっしゃ、さらさらさら〜っと、これでええか?」

「はい。あと劉奏さん」

そう言っつて直井は赤い目で俺を見て…。

「僕に従え」

「?」

何を言っつてるんだろつ、コイツは。

「?」

「?」

「「「「「 ???? ???? 「「「「

俺も直井も他の野球部員たちも頭にクエスチョンマークを浮かべていた。

つて直井も？

何かあったっけ？

んー……。

空腹が酷くて頭が回らない。

「ツー!!」

次の瞬間、直井はいきなり全速力で走り去っていった。

なんだっただらう。

まあ何にしても、その後は順調に新入部員がやってきて、野球部は部員が30人、マネージャー18人の大所帯となった。

……………。

いや、マネージャー多すぎないか？

話し合いの結果、なんと女子野球部も設立することになったらしい。
で、今日は新生野球部の結成を祝って即席チームで記念試合をするらしい。

「えっ」

食堂は遠かった。

.....。

で、結成試合。

俺は空腹で倒れ……ることなく、遊佐の隣で思いつきり声を張り上げていた。

「おおおおおお、さすが剛力の黒川だ。回れまわれえええー」
「っっ」

で、どうして俺が空腹で倒れていないのかというと、それは結成試合が決定した後のことだった。

これからチーム決めを始めようとする時に足元のおぼつかない遊佐が教室に入ってきて……。

「奏人お……食べ物……創ってえ……」

その瞬間、俺は固まった。

が、すぐに創造能力でサンドイッチを大量に作り、遊佐にあげた。

もちろん自分も一緒に食べた。

2人でむさぼるように食いまくった。

そんな俺たちを野球部員たちが呆然と見ていたけど、お互いに気にする余裕もなかった。

まあ、お腹がいっぱいになった後で、あまりの恥ずかしさに気付いて俺は床を転げまわったけどね。

遊佐も顔が真っ赤だった。

それでも食べないよりは良かったと思う。

というも……。

「9回裏2アウト、1点差で満塁、バッターは劉奏やな」

「あの……大丈夫ですか……？」

「大丈夫、大丈夫っ！ 心配ありがとな！」

「へう…」

「奏人、がんばってください！」

「おう！」

「決めるよ劉奏！」

「俺が代わってもいいぜ！」

「お前は全部三振だろっ！ 自分のクラスに帰れ！」

「ちよっ、放課後にクラスに帰れって酷^{ひで}ええ！」

「……」 帰れ、帰れ！！！（か、帰ってください…） 「……」

「んなっ、チームのベンチで何でアウエーなんだあああああっつ
！！！！」

こういう場面で、体調が万全なんだから。

俺はバッターボックスに入り、構える。

ピッチャーが前を見据える。

首を3回横に振り、ようやく1回縦に振る。

左足を上げ…。

こちらに倒れながら振りかぶり…

左足で地面を踏み込むと共に、振りかぶっていた右腕を前に下ろして…。

ボールがストライクゾーンの真ん中低めの位置に飛んできて…。

そして…。

カキイイーンッ!!!!!!

よし、ジャストミートだ！

バットの芯に当たった打球は、高く、高く、どこまでも高く飛んでいくのだった。

.....。

「アウトッ！ ゲームセット！」

結果はセカンドフライだった。

どこまでも高く飛んだら、そうなるのは当然である。

…本当、締まらないなあ。

最初で最後のラブラブデート（前編）（前書き）

Angel Beats!の世界編、第8話です。

劉奏は遊佐と恋人関係になったが、成仏したい気持ちは変わらない。

そして遊佐の方も心残りは1つしかない。

それは、生前見に行けなかったライブを、一緒に見に行くこと。

そして野球部の結成試合により、男友達との青春が劉奏の心残りになる可能性がなくなった。

もう劉奏の心残りは遊佐しかない。

臆病者の新たな期間、ぜひご覧あれ。

最初で最後のラブラブデート（前編）

目を覚ます。

昨日と同じ天井。

でも見慣れない部屋。

昨日とは違ってシンプルで、黄色と白で統一された部屋だった。

「んっ……」

右腕に触れる頭の重み。

右脇腹に触れる小さな柔らかさ。

そして右足を挟む汗ばんだ柔肌の感触。

「すう…すう…」

遊佐だ。

昨日は新生野球部の結成記念試合をやって、その後一度別れたんだ
っけ。

確か遊佐は戦線の会議があるって言った。

で、俺は自室こと筋肉眼鏡との相部屋には帰りたくなくて校門で遊佐を待っていたんだ。

そして俺を見つけた遊佐が、俺を真剣な目で見つめて、こういったんだ。

「この世界でのライブ、明日が最後になるかもしれませんが」

何でも戦線の敵である”天使”は模範の象徴であるはずなのに、丸一日学校に来なかった。

戦線は天使が神の所に行っているからだと考え、おびき出して神の居る方角を探る作戦として明日ライブをやるらしい。

しかし、実際には天使こと立花は普通の人間で、既に成仏しているため来ることはありえない。

ライブは戦線の陽動作戦という扱いだから、天使が消えて陽動する必要がなくなったらライブが催されなくなるかもしれない。

だから事情を知っている遊佐と岩沢は、立花の成仏の事を黙っていることにしたのだと。

「岩沢？」

「はい。岩沢さんには私から話しました。親友ですので」

「そうなんだ」

「おかげで明日一日は時間がとれました」

そして、こう続けた。

「ですから、明日が私達の成仏する日です」

「……………」

「やりたいことが沢山あります。一つと言わず、全部しちゃいまし
よう」

”やりたいことがたくさんあったの。でも、なにひとつ、してあげ
られなかった”

母の経験と今の状況がかぶる。

でもあの時がソックリだったのに対して、今はどこまでも対照的だ。

「ああ」

「ずっとライブと一緒に見に行きたかったです。奏人も同じですよ
ね」

そうだな。

この世界に来たときはともかく、だ。

最初の人生の記憶を思い出して、遊佐からライブを見に行くことへの想いを聴かされた、今なら…。

「ああ、遊佐と一緒に見に行きたい」

「はい。明日こそは、連れて行ってあげます」

”海に行きたいって、その子は言ったの。でも、連れて行ってあげられなかった”

”ここでもかぶる。

遊佐の言葉は、どこまでもあの時とは正反対の結果を予感させる。

おそらくは、遊佐もそれを意識して言ってるのだろう。

「私達の心はもうこんなに近づいたんです。それでもこんなに元気なんだと、見せ付けてしまいましたよ」

”二人の心が近づけば、二人とも病んでしまう”

「ああ」

もう遊佐に近づいても、お互いに病むことはないんだ。

「そして一緒に満足して、成仏しちゃいましょう」

”二人とも助からない”

「ぶっ」

最後の一言だけが同じ結果を予感させることを、少しおかしく思うのだった。

まあ同じ結果とはいっても、体は、という意味だ。

俺は元々成仏したかったんだし、心は救われるんだからそれで良い。

そう思った事まで思い出した所で、瞼が落ちて目の前が真っ暗になった。

先ほど同じ天井、同じ部屋。

でもさつきとは違って、隣の感触がない。

代わりにキッチンの方から何かを切る音が聞こえてきていた。

「ん、んっ、んっ」

布団を肌蹴ていると、その音が止まる。

そして近寄ってくる足音がすぐ近くで止まった。

遊佐だ。

「おはようございます、あ・な・た」

ちゅっ。

その瞬間、一気に目が醒めた。

そして…。

「ブッ！ ゆ、遊佐、その格好…」

「ふふっ、好きなんですよね？」「うーん、うーん、この雑誌、ベッドの下に隠してましたし」

遊佐はエプロンしかつけていなかった。

.....。

それは、まあ、つまりはそういうことだろう。

前世でもそうだったが、朝からそんな姿を見せられたら……。

「ゆ、遊佐っ！」

「んっ、だめです」

ペチンッ。

思わず手を伸ばしたが、その手を叩かれてしまった。

なぜ？

「今日はやりたいことが沢山あります。もしされたらその、全部で
きなくなってしまうから……」

「あ、そっか」

素直に手を離す。

単純に俺のためについてことだったんだな。

部屋でイチヤイチャも良いけど、そういうのは昨日の夜に風呂やベツドでやったんだ。

だから今日は、そういうのを控えよう。

と俺が納得している所で、遊佐はきびすを返して台所に向かう。

…背筋をピンと張って、後ろを手で隠しながら、ちょこちょこ歩きで。

台所についた所でこちらを振り返り、固まって、手を震わせて…。

「み、見ないでください」

そう言った。

か、かわいすぎる…。

俺はその様子に目を離せないでいた。

が、遊佐は逆に俺が目を逸らすのを待っていたみたいだ。

しかし俺が何時まで経っても目を離さないことから、観念したのか後ろを隠していた手を外す。

そして両手を使って、再び野菜を刻み始める。

ズツ……トン……ストンツ……トンツ……トンツ……

遊佐はこちらをチラチラ見ながら全身を震わせ、ぎこちなく包丁を扱う。

うわぁ……、も、もう、限界が……。

あまりの可愛さに、理性を押し留めるのが大変だった。

その壮絶な戦いを心の中で続けること数分。

「イタツ」

瞬間、理性が勝利した。

一気に冷静になった俺は、大丈夫かと声をかけながら遊佐に駆け寄った。

指先に血。

よかった、大したこと無さそうだ。

「だ、大丈夫です、舐めておけば治りますから」

「そうだな、あむ」

遊佐の指先を口に含む。

それで真っ赤になる遊佐を見て、また理性を留めるのに苦労する破目になった。

.....。

あの後。

色々あったが一応予定通りに進み、今は商店街。

俺の右手は遊佐の左手に絡められている。

指を交互に絡ませて握り合う、いわゆる恋人繋ぎだ。

遊佐の右手は俺の右腕の前に添えられて、彼女自身の胸に押し付けている。

残念ながらあまり大きくないので特別柔らかい訳ではないが、それでも女の子の感触だ。

歩きづらさも気にならなかった。

「あ、あの店です」

「ええと、何々、洋服から和服、男物から女物、水着からウエディングドレスまで何でも取り揃えております？」

「はい、ここなら色々なファッションを楽しめます」

「へえ」

「今は授業中ですから空いてますが、放課後や休みの日は凄いですよ」

「人気あるんだな」

「それは本当に、なんでも揃ってますから」

遊佐は俺から離れ、服を物色し始めた。

「あれ良いですね……」

「これ見せたい」

「あ、新作です！」

「着てみたいですね……よし、これも！」

「あ、これ奏人に似合いそう」

初めて見る遊佐の姿だった。

音楽の時のように、目が輝いていた。

遊佐は何枚もの服を広い試着室に持ち込み、その中から何枚か渡された。

「奏人はこれを着てくださいね」

遊佐がカーテンを閉めると、俺も隣の試着室に入った。

こうして二人だけのファッションショーが始まったのである。

が、男の俺よりも女の遊佐の方が着替える服が多いわけで、だ。

ほとんど遊佐だけのファッションショーと化していた。

「まずはシンプルにブラウスとスカートです」

「お次はキュロット！ トップスは中に入れるのが好みです」

「ふふふっ、チャイナ服もベッドの下に載ってましたよね。ここのスリットが気になりますか？」

「これは……あんまり趣味じゃないんですけどね。総レースにして

みました」

「このワンピース、裾が短すぎる気がするんですけど……奏人はどう思いますか？」

「すみません、お待たせしました。和服って一人で着るのは難しいですね。どうですか？」

「うわあ…！ 鏡で見ると、お似合いですよね私達っ！ 奏人のタキシードも似合ってます」

「この水着もあの雑誌に載ってましたけど……ずれて見えちゃいそうですし、海に出るなんつ、きゃあっ！」

こんな感じである。

遊佐が着た服は3桁に達しているのでは？

そう思えるほど、沢山の服を見て、感想を求められた。

しかし、これだけ見ても結局買ったのは…。

「本当にこれだけで良いのか？」

「はい、荷物になるだけですから」

「まあ確かに。あとこれ着て街歩くの、すっごく恥ずかしいんだけど」

「ハート型に英字がロゴされたパールックTシャツですよ？ 素敵じゃないですか！」

「てかワンピースの時とか裾短いのを恥ずかしがってた割りに、遊佐のスカート短くね？」

「が、頑張ってみました」

と上下一式と下着だけだったりする。

そして元々着ていた服は店のゴミ箱に捨てたんだ。

と、腕を引っ張られる感覚で止められた。

いや、遊佐は立ち止まったただけだ。

「……………(ジーツ)」

宝飾店。

装飾品を扱う店の中でも、金額の高い物を取り扱う店。

遊佐が見ていたのは、ガラスケースの中に入った一対の指輪。

ワンポイントにダイヤが入った、お揃いのプラチナリング。

いわゆる結婚指輪だった。

「はああ…」

そして溜め息。

俺は遊佐が呆けている間にと、ちょうど近くにあった質屋に入り、創造能力で創った金の延べ棒や宝石を売った。

札束を手に戻った時には、遊佐はまだ呆けたままだった。

「買ってやるのか？」

「え、でも…って何ですかその札束はっ！ さすがにお金の偽造はダメですよ！」

「違う違う、金の延べ棒と宝石を作ってそこの質屋に売ったんだ」

「あえ…？」

「それでこの指輪で良いのか？」

「は、はいっ！」

遊佐は少し物憂げな表情だったが、一気に満面の笑顔になった。

その後、指輪にどのような刻印を入れるか聞かれたが、2週間かかると言われて却下。

代わりに俺が能力を使って1分で終わらせた。

で、勿論お互いの左手薬指に指輪を嵌めるのを忘れない。

再び恋人繋ぎで街に出た時には、右手に遊佐のリングの感触があった。

最初で最後のラブラブデート（後編）（前書き）

Angel Beats!の世界編、第9話です。

成仏の日は、おそらく今日。

そして夜のライブが終わる時。

だからそれまでの時間を、遊佐と大事に過ごしていく。

最初で最後のラブラブデートは、まだ終わらない。

臆病者の新たな時間、ぜひご覧あれ。

最初で最後のラブラブデート（後編）

5、4、3、2、1…。

「んむっ」

パシヤッ！

これで何十枚目の撮影だろうか。

俺たちは立ち寄ったゲームセンターで何十回もプリクラを撮っていた。

最初は二人のペアルックや結婚指輪と一緒に写っているプリクラを、記念に撮りたくて入ったんだ。

そして捏造で画面に”私たち結婚しました”と書いて照れくさくなつた次の撮影で、遊佐に悪戯されたんだ。

たしか最初はくすぐられたんだっけか。

その後俺も仕返しをして、仕返しの仕返しをされて、どんどん悪戯の応酬がエスカレートしていった…。

先ほどの撮影はご想像の通りで、撮影の瞬間にキスされたんだが…。

俺の視線を意識したのか、遊佐も同じ広告を見て目を輝かす。

「噂だけは聞いてましたけど、こんな場所にあったんですね。行きましよう！」

「おう」

渡りに船なので、もちろん即行で頷いた。

こうしてラヴァーズ・カフェの存在を知った俺たちは、さっそくプリクラを止めてゲームセンターを出るのだった。

時刻は既に13時10分。

少し遅い昼食になりそうだった。

.....。

ようやく着いたラヴァーズ・カフェの入り口には、なぜかプロレス技を掛け合っている男女が居た。

確か原作に出ていた戦線メンバーだったような気もするが、普通に無視して中に入った。

そして店内に入るなり

「う、うわぁ…(汗)」「

2人揃って思いつきりドン引きしていた。

見渡す限り、丸テーブルに椅子2つのセット。

そこに座るカップル、カップル、カップル、カップル。

一部、罰ゲームっぽい雰囲気ホモカップル？ もいるが、それでも大半はラブラブな雰囲気。

ここで18禁な事が始まらないのが不思議なくらいに甘ったるい雰囲気満ちていた。

「もしペッティング以上の事をされたくありませんたら、お手数ですが2階にお越し下さい。別料金になりますが防音性抜群の個室をご用意しております」

「……………」

「だ、ダメですからね！ 他にも予定がありますからね！ ライブもあるんですからね！」

「わ、わかつてる」

思いつきり誘惑に乗りかけていたが、遊佐の言葉で我に返る。

そんな事も思ったが、それでも俺たちは案内されるがままに席に着いたんだ。

そして……。

「そ、奏人、あ、あーん……」

「あむ。んぐんぐ…スプーン貸して？」

「あ、はい」

「遊佐、はいあーん」

「っ！ あ、あーん……」

まあ俺は王宮で慣れたものだったが、遊佐はそうでもないようだ…。

俺の慣れた感じに少し眉をしかめながらも、一つ一つのこと当真赤になり、照れまくっていた。

「い、いきますよー」

「おっ」

「せ、せーのっー」

ちゅーーううっ！！！！！！

そして…。

「よし、ご飯も食べたしデザートと行くか」

「そ、それならケー…」

「いやいや、ここはパフェだろ」

「ーっっっ！！！！　だ、ダメです。だってパフェには」

「スティック菓子？」

「そ、そうです！　りよ、両端から食べるなんて」

「でもせつかくだからやりたくない？」

「そ、それは…あの…やりたいですけど…でも…」

「あ、店員さん、チョコレートパフェ1つで」

「え、そ、奏人おっ！！？？？？」

店員さんがチョコレートパフェを運んで来てくれて…。

「最後にスティック菓子だけ6本も残ったわけだが」

「~~~~~つつつ!!!!!!」

「はい、観念して食べような?」

「や、やっぱり割引無くてもいいから止め」

「だーめっ」

「~~~~~つつつ!!!!!!」

「はい、口に啜えて?」

「そ、奏人お……せめて、目をつぶって下さい」

「だめだつて。折れないように気をつけなきゃ」

「そ、そんなあ……」

「最後はディープキスで終わろうな」

「~~~~~つつつ!!!!!!」

結果、6回ものディープキスをし終えた頃には遊佐はもうへろへろだった。

その姿があまりにも色っぽ過ぎて、個室に連れ込みたくなる衝動に駆られたが、そこはぐっと我慢した。

代わりに無料で借りられる長椅子に遊佐を寝かせて膝枕をしてあげたんだ。

運ぶときに俺がお姫様抱っこをしてあげたら、遊佐にずいぶんと驚かれた。

そりゃそうか。

奏人だった頃は病弱で、俺が逆に支えられてばかりだったもんな。

「90年って長いなあ……私にはたったの2ヶ月だったのに……」

今更ながら俺と遊佐の経験の差を実感したようだった。

.....。

その後、遊佐は俺を遊園地に連れて行くつもりだったらしいのだが、店を出た時刻は2時半だった。

そのため時間的に厳しいということで急遽きんぐんデートプランを変更。

ちょうど良い時間帯に人気の映画が上映していて、時間までウィンドゥショッピングを楽しむことにした。

というか、あ、あぶねえ……。

遊佐は俺を遊園地に連れて行くつもりだったのかよ。

俺が嫌だというのもあるけど、もしかたぞろ気絶でもしたらどうするつもりだったんだ。

それでライブの時間に間に合わなかったら目も当てられないぞ。

そう思って聞いてみると、遊園地にはいくけど絶叫系や観覧車は乗るつもりがなかったそうだ。

「麻帆良祭の時は怖がらせてばかりで失敗しちゃったから、今度は上手くやるうと思っただんです」

「え、でも遊佐は楽しそうだったよね」

「はい。調子に乗っちゃって、後で気付いて後悔していたんです」

「俺は怖かったけど遊佐が楽しそうだったから良かったと納得してただけだな」

「そ、そうだったんですか!?!」

「ああ」

「え、えーと、そのこともあって、ライブでは絶対に一緒に楽しみたいと、そう思ってたんですけど...」

「そうだったんだ...なら」

「はい」

「今日のライブは一緒に楽しもうな（楽しましょね）！！」

と、話がまとまった所で目に留まったのは路上で似顔絵書きをしている人。

似顔絵書きとしては珍しく、2頭身だけど体の部分まで書いてくれる店だった。

何も言わずに2人セットで似顔絵を描いてもらうと、何とも不細工な顔に仕上がっていて、何だか涙が…。

それでも特徴はよく捕らえていて、ラブラブな所はこれ以上無いほど強調されていたからか、遊佐は気に入ったみたいである。

まあ遊佐が気に入ったのなら良いかと納得して、ウィンドウショッピングを続けることにした。

似顔絵の他にもペットショップや本屋さんなどに冷やかして入って上映までの時間を潰した。

そして映画。

タイトルは『70年分の1年間』

余命1年を宣告された15歳の女性が、恋人を巻き込んでボランティア団体に入り、活動していく1年を描いた物語である。

そして闘病生活の中で、文句一つ言わずに自分についてきてくれた恋人のことを考えて、不安になる。

自分が恋人の貴重な時間を台無しにしてしまったのではないかと。

そう心配になって話してみると、不安になることはないと逆に怒られてしまった。

確かに恋人らしいことはあまりできなかったけど、それでもこの1年は充実していたのだから、と。

最期の1年は、平均寿命までの約70年に匹敵するぐらい価値のあるものだったんだから、と。

一緒に頑張ってきた1年を選んだことは、決して間違っていないのだから、と

そして、恋人同士としての時間は、これから大切に過ごしていけば良いのだから、と。

だから、余計な心配はせずに、今まで通り、いや今まで以上に2人の時間を大切に使う、と。

その後、主人公は残りの1ヶ月を周りが呆れるほどに恋人とイチャイチャして過ごし、満足の中でこの世を去った。

|||||

色々と違う部分もあるけれど、何だか今の自分たちみたいに思えて

きて、涙がこみ上げてきた。

それは遊佐も同じだったみたいで、静かに涙を流していた。

そして、もう自分達にも時間が無いけれど、成仏までの時間を大切に過ごそう、と誓い合ったんだ。

だから、ライブを見に行くために学校へ戻る道中も、話が尽きることはなかった。

お互いの知らない、お互いの過去を。

もし生まれ変わったら、どんな未来が良いと思うかを。

そして、俺達が持つ、お互いや自分、人生、ライブに対する、その想いを。

尽きることなく、語り合ったんだ。

語り合っているうちに、学校に着き、会場となる食堂に着き、もうすぐ開演という時間になったんだ。

そして……。

俺たちにとっては一緒に見に行くことが悲願だった、そのライブが…

遊佐の唯一の心残りの解消が…

ついに、始まったんだ。

念願のライブ（前書き）

Angel Beats!の世界編、第10話です。

やりたい事を沢山したラブラブデート。

その終着点は、ガルデモが送る夜のライブ。

それを一緒に見に行けなかった事が、遊佐に残された唯一の心残りだ。

だからライブが終われば遊佐は成仏するだろう。

そして遊佐だけが心残りの劉奏も、おそらく成仏できるだろう。

そして、その夜のライブが……。

ついに始まる。

臆病者の新たなライブ、ぜひご覧あれ。

念願のライブ

ガタンッ

その音と共に、全ての照明が落ちた。

「「「「「 あっ！ 「「「「「

そして、既に食堂に集まってきた一般生徒たちから驚きの声が漏れる。

遊佐の話によると、彼らはゲリラライブの開催を戦線による準備や警備などから推測して集まっているそうだ。

彼らは食堂の照明が落ちたことでライブへの期待が高まり、ざわめいていた。

そして暗闇の中、ドラムの音が聞こえてくる。

タンタンッタンタンッ、ダダダッダララララッ

そして大階段の中央に作られた、特別ステージ。

その後ろから当てられた光が、バンドメンバー4人の後光になる。

そして伴奏が始まり、歓声が起こる。

その時ふと、遊佐と繋いでいる右手が、ぎゅっと握られた。

柔らかい手と、金属質な指輪の感触。

見ると真剣な、それでいて満面の笑顔で、舞台の上を凝視していた。

俺も顔を向ける。

伴奏が終わり、特設ステージにあらゆる角度からの照明が集まっていた。

そして、歌が始まる。

<< 背後にはシャッターの壁 >>

「おい、ガルデモだ」

「ライブ始まったよっ」

食堂でのん気にご飯を食べていた一般生徒が、仲間に声をかけられ立ち上がる。

<< 指先は鉄の匂い >>

「フウフウフオーツ！」「」「」「」

観客から合いの手が入る。

遊佐も繋いでいない右手を上げて叫んでいた。

観客の人数も増え始めている。

<< 進め、弾け、どの道こむでしょ >>

観客は声を抑え、続く歌を待つ。

俺もあらかじめ遊佐に教えて貰っていた通りに待ち構えていた。

そして……。

<< find way ここから >>

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」
find way ここから
「」「」「」「」

声を張り上げて同じ歌詞を歌う。

俺と遊佐、周りの一般生徒、戦線メンバー、問わずにだ。

<< f o u n d o u t 見つける >>

「「「「「 f o u n d o u t 見つける」」」」」

集まってきた一般生徒も、合いの手を歌いながら食堂に入る。

そろそろ人口密度が凄いことになってきていた。

<< r o c k を 奏でろ >>

「「「「「 r o c k を 奏でろ」」」」」

食堂の人数に比例して大きくなる合いの手の歌声。

それに遅れをとることなく響き渡る、ボーカル岩沢の声。

<< 遠くを 見据える >>

「「「「「
遠くを 見据えるっ。
「「「「「

<< 息継ぎさえできない街の中 >>

そして少しの伴奏に入り、観客たちは静かに声を抑えた。

続く岩沢の歌声を聞くためだ。

<< 星空が最高の舞台 カラスたちカーカーと鳴くよ >>

観客が時おり合いの手を入れながら歌が進む。

凄い人口密度だったのに、さらに人が集まってきた。

岩沢は新たな観客たちに構わず、歌い続ける。

そしてまたサビの部分に入り…。

<< find a way あたしも >>

「「「「「 find a way あたしも」」」」」

一緒に歌って…。

サビの部分が終わり…。

2番の歌詞にも入り…。

それでも止まらずに人が増え続ける。

既に遊佐は肩抱き状態で、隣の知らない人にも腕が当たっている状態なのだ。

さらに歌は続いていき、満員御礼の中…。

<< rockを 奏でろ >>

「「「「「 rockを 奏でろ」」」」」

<< Luckを 歌うよ >>

「「「「「 Luckを 歌うよ。」」」」」

最後のサビが終わると、最高潮の中で観客が静かになる。

そしてクライマックス。

ここからは岩沢の独断場だ。

<< いつまでだってここに居るよ 通り過ぎてく人の中 >>

ここで息を吸うだけの間があり、すぐに続く。

<< 闇に閉ざされたステージで 今希望の詩歌^{うた}うよ！ >>

一区切りだが、ここでも息を吸う以外の間を空けることなく歌が続く。

<< あなただって疲れてるでしょ その背中にも届けたいよ >>

分行われる。

トークを挟みながら20曲もの歌が演奏される予定なんだ。

そして、成仏した”天使”は絶対に来ない。

2時間30分をかけた俺たちの長い夜は、まだまだ始まったばかりだった。

1曲目が終わった後は間を置かず2曲目。

その後ボーカル岩沢のトークが始まり、3曲目は俺たちが見たかったサッドマシンのカバー曲であることが告げられる。

そのトークの中。

『さて。今日は観客の中に、長年ライブを見に来ることが夢だったある人が来てるんだ』

言われた瞬間、心臓が跳ね上がった。

『彼は私の親友の大切な人なんだけどね。家で闘病生活をしていて、窓から見える30メートル先のライブハウスにさえ行けなかったと聞いている』

『.....』

『そんな人が今日は元気な姿で、人生初めてのライブを見に来てくれているんだ。そしてサッドマシーンという私も大好きなバンドの曲をリクエストしてくれた』

そう言った途端、食堂内が少し騒がしくなった。

「サッドマシーン？」

「何それ？」

「俺聞いたことある」

「通な奴らには有名なバンドなんだぜ？」

「すぐにチェックしなきゃ」

しかし岩沢が黙って騒ぎが収まるのを待っていると観客も気付き、再び静寂が訪れる。

そして再び岩沢が話し出す。

『サッドマシーンというバンドは、世の中の理不尽に耐えながらも頑張って生きていく私達に、活力や共感を与えてくれるバンドなんだ』

『かく言う私もそれに救われた一人だね。その活力を、共感を、そ

して感動を。皆さんや今日初めて来てくれた彼にも伝えたいと思う』

『そういうわけでリクエストに応じて、さっそくサッドマシンのカバー曲の第一弾。記念すべき最初の曲は…』

岩沢が曲名を告げるまでの間、静かといっても少しは聞こえていた声が全く聞こえなくなる。

そして…。

『サッドマシンのデビュー曲でもあるこの曲！ ”小さな願い”
だ。さあ、始めるよ！』

エレキギターの音と共に、3曲目が始まった。

改造能力を発動。

「ああ、わかった」

「よく見ると生徒全員が来てますしね。帰りましょう」

「……え？」「」「」「」

「私は見て行きます。監視の名目で」

「理央先生、名目ってぶっちゃけ過ぎ。気持ちはわかりますが……」

「僕も監視していくよ」

「俺もだ」

「……（ポカーン）」「」「」「」

即手で手のひらを返した教師たちに、この場にいる全員が呆然としていた。

って、ガルデモまで呆然としちゃダメじゃん！

そう思っていると遊佐に裾を引っ張られた。

「もしかして奏人の仕業ですか？」

.....
.....
.....
.....

その後に新メンバーとして、ラヴァーズカフェの前で彼氏とプロレス技を掛け合っていた少女が紹介されてビックリした。

ユイという名前らしい。

デビューのための新曲を1曲だけ歌った彼女の歌声は、岩沢さんほどでなくとも本当に上手だった。

現に、彼女が歌い終わった後、そこかしこから退場を惜しむ声が聞こえていた。

その後はガルデモの持ち曲とサッドマシンのカバー曲を中心にライブが進んで行った。

そしてガルデモの代表曲”Alchemy”で盛り上がり…。

最後にガルデモでは恒例らしい”Last song”で20曲全ての演目を締めくくったんだ。

でも…。

「~~~~~ アンコール！ アンコール！ アンコール！ アンコール！
~~~~~」

収まらないアンコールの嵐。

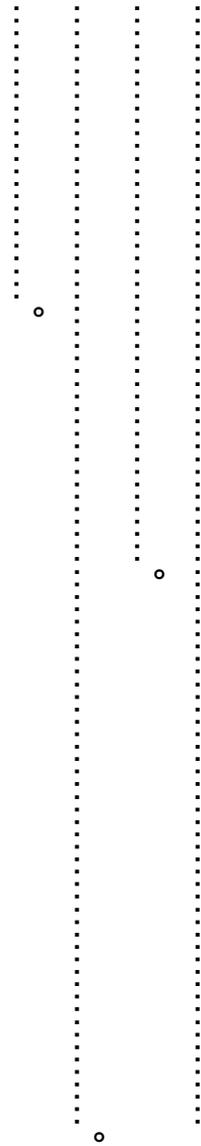
彼女らは最後に一曲だけとアンコールに応え、一曲目と同じcrow songを歌って舞台を去ったんだ。

こうして、2時間半を超える計21曲の、俺たちにとっては念願のライブが、幕を閉じたのだった。

そして、ガルデモのライブが幕を閉じたことで…。

遊佐の心残りは無くなるんだ。

だから……。



ガルデモのライブが終わり、照明や音響が撤収された後。

眩しいほどに明るかった照明もなく、今や真つ暗で…。

騒がしいほどに大音量のスピーカーもなく、今や静寂に満ちていて…。

満員電車のようにひしめいていた観客もなく、食堂には誰もいなかった。

……俺と遊佐以外は。

そう。

遊佐はまだ、成仏していなかったのである。

「凄かったよなあ……」

「はい、凄かったです」

「満足できたか？」

「はい、満足です」

遊佐は本当に満足そうな顔をしながらも、まだ成仏していなかった。

遊佐が成仏していないから、俺は今も踏みとどまっているんだが…。

何が遊佐をここに踏みとどまらせているのだろうか。

「今にも成仏しちやいそうです」

「でも……しないんだな」

「はい。」まだ” しません」

「えっ、まだ……？」

「はい、まだです」

どういふことだろう？

もしかしてこの短期間に、他の未練が出来たということだろうか。

…わからない。

「だって、まだ……」

「まだ……？」

まだ……なんだろう？

「まだ……」

「私のライブは、終わってないんだからな」

「なっ…！」

「そういうことです」

突如、階段の影から現われた岩沢さんの爆弾発言。

驚く俺に対して、遊佐は当然とばかりに頷いていた。

「上手くいきましたね」

「ああ」

そしてハイタッチ。

どうやら、あらかじめ2人で示し合わせていたらしい。

遊佐と岩沢は、呆然とする俺を見て笑い合っていた。

俺たちの長い夜は、まだ終わらない。

念願のライブ（後書き）

この作品は二次創作です。

Angel Beats!に関するものは元々KEY、ANIPL  
EX、電撃G's magazine、P.A.WORKSが共同  
で製作したものであり、キャラクターや世界観、楽曲においてAn  
gel Beats!のものを使用させて頂いております。

## 満足（前書き）

Angel Beats!の世界編、最終話です。

ガルデモが送った夜のライブ。

それは大盛況のうちに幕を閉じた。

しかし遊佐は成仏せず、そこに岩沢が登場。

ライブはまだ終わっていないと告げられる。

劉奏と、遊佐と、そして岩沢。

3人だけの第2幕が、もうすぐ始まるうとしていた。

臆病者の新たな満足、ぜひご覧あれ。

満足

食堂の明かりを一つだけ付けた後、俺たちは別れを惜しむように雑談をしていた。

「そういえば、会ったのは初めてだったな」

「ああ」

「岩沢まさみだ。半年前からここでロックバンドをやっている」

「劉奏だ」

「は？」

改めて自己紹介。

しかし俺が自分の名前を言った途端、岩沢に目を見開かれた。

そして眉をしかめられる。

どういうことだ？

「そ、奏人……岩沢さんには、奏人って教えてたから……」

「ああ、そういうことか。1度目は源奏人、2度目は劉奏だったん

だ。」

「あ、2回人生やって来てるんだっけ。ビックリしたよ。」

「悪い悪い」

そりゃあ、遊佐から聞かされていたのと違う名前以自己紹介されたら驚くよな。

疑問に思つのも当然だ。

その後、簡単にお互いのことを聞いた後、ライブの感想を伝えることにした。

「それより、ガルデモのライブ凄かったな」

「今までの何倍も良かったですよ！」

「今日が最後つて覚悟してたからね。アンタが教師を止めてくれて助かったよ」

「どういたしまして」

礼を言われる。

あれは自分達のためにしたことだけど、それで他の誰かが喜んでくれるのなら万々歳だ。

「それにしても……」

「ん？」

「？」

「……………」

な、なんだ？

何か俺をじーつと見てるみたいだが…。

「良い男じゃないか。私とも付き合わないか？」

「ぶっ」

「い、岩沢さん、何を言ってるんですか!？」

「前の人生でハーレム作ってたんなら、私一人くらい良いだろう？」

「まあ、確かに来る者は拒まずだったが……」

「だ、ダメです！ ダメですからね！ この世界では私一人なんですから！」

「ハハハッ、冗談だよ。遊佐のノロケは散々聞かされてるし、横取

りしないから安心しな」

「うーっ……」

からかう岩沢と俺の腕を掴んで涙目で睨む遊佐。

本当に親友なんだな…。

遊佐から聞かされていたけど、今初めて実感できた気がする。

「そういえば、2人は何がきっかけで親友になったんだ？」

「え、それは……」

「まあ、出会ったときの遊佐は酷かったからな…」

「う……」

あ、そういえば何もかもどうでも良い状態だったって聞いたっけ。

「人形のような子が居るって聞いて見に行ったら……」

「そ、それ以上言わないで下さい！」

「いや俺が抑えてるから言ってくれ」

「そ、奏人おっ！?? やめ、はなっ、むっ、んーっ！っ！  
！」

岩沢がニヤリと笑う。

よし、言う気みたいだ。

「私を見た途端に怒り出してね。私のせいで奏人が死んだだの、もう2日元気だったらだの、最初は訳がわからなかったよ」

「う、うっう」

「それで落ち着いてから話を聞いてみたら謝られてね。事情もその時に聞かせて貰ったんだ」

遊佐はテーブルの上に突っ伏して耳を塞いでいる。

もはや第一印象で感じていた無表情で事務的な雰囲気は欠片もなかった。

いや、今更だな。

ずいぶん前にその印象は崩れてたんだし。

「事情を聞いて色んな意味で驚いたけど、気持ちはわかるからね。不謹慎かもしれないけど、そこまで私の音楽が求められていて、少

し嬉しかったし」

「そうだったのか……」

「その後、遊佐に死後の世界だと教えた時も……」

その瞬間、遊佐が体を強張らせて耳を塞ぐ手に力をこめた。

いや、まあ、さすがにこれ以上は可哀想だな。

岩沢もそう思ったのか、話を途中で中断した。

「……まあ、色々あっただ。何だかんだで話は合つし、それで仲良くなつたつてわけさ」

「なるほどなあ」

「2人とも酷いです」

「「悪い悪い」」

耳を塞いでいても普通に聞こえていたようだ。

薄暗くても顔が赤いのがよくわかった。

と、その時、入り口の影に誰かがいるのが見えた。

えーと、あの子は……よく見えないけど、月<sup>ゆえ</sup>みたいなマナージャー  
だったよな。

扉の間からちょこん、とこちらを覗き込んでいる

何か用があるのかと思ったら、彼女は走り去って行ってしまった。

ん？

何だったんだろう。

その後しばらく話し込んでいたらだんだんと話題が無くなっていき、  
何も話さない沈黙の時間が増えていった。

みんな、まだ別れの時を始める決心が付かないんだ。

そんな中で、岩沢がふと腕の時計を明かりにかざした。

「……11時か。別れが惜しくて話し込んだけど、そろそろ  
第2幕を始めなきゃな」

「……そうだな」

「……そうですね……」

そしてライブの第2幕。

観客は2人、演奏者は1人、たった2曲しかないライブが……。

静かに、始まった。

.....。

1曲目。

それは何と戦線が敵視していた天使こと立花奏の作った曲だった。

立花は音楽室で一人ピアノを弾いていることがあって、岩沢は自分の知らないメロディを聞いてからずっと気になっていたらしい。

一応敵対している立場から今まで聞くこともできなかったが、今日の昼に彼女の部屋を探して楽譜を見つけたとのことだ。

「今日見つけたばかりで大丈夫なのか？」

「ああ。学校サボって1日中練習してたしな」

「天使が聞いてたら注意されてましたね」

「ハハッ、違うない」

そして演奏が始まる。

本来はピアノの曲だけど、岩沢はギターで演奏する。

そういえば、今日の舞台で使っていたエレキギターとは違って、今使っているのは年季の入った木製のギターだな。

<< 目覚めては繰り返す 眠い朝は 襟のタイをきつく締め  
>>

ギターの音は控えめで、代わりに岩沢自身が大きな声を出して歌っていた。

この世界での日常を象徴する言葉から始まる歌。

その中でも印象的な、長いサビの締め文句。

<< 見送った >>

<< 手を振った >>

<< よかったね、と >>

おそらく天使と勘違いされるほど、戦線の誰よりも前からここに居て…。

音無に「ありがとう」の一言を言うためだけに待ち続けて…。

その間にも、俺にしたみたいは何人も人の成仏を手助けして…。

自分を置いて”卒業”して行く人たちを、彼女は祝福していたのだ  
ろう。

そんな彼女の、去り行く者への想いが感じられる詩<sup>うた</sup>だった。

.....。

1曲目が終わった後。

俺はいつの間にか食堂に入ってきていた野球部の仲間に話しかけられた。

「全くよー、特別ライブをやるのに黙っているなんて水臭いだろ」

「そうだよ、十年來の親友にまで黙ってるなんて」

「そうやで。香奈ちゃんが言わんかったらよう知らんで見逃すところだったわ」

「へう…」

あ、あの時の…。

まさか他の人を呼ぶために去っていったとは思わなかった。

「俺だけにでも言ってくればよかったのに、なぜ言わなかった!」

「いや、お前だけはクラスに」

「……帰れ（か、帰ってください）！！！！」「」「」「」

「ちょ、夜にまでクラスに帰って酷くないっ！！？？？？」

「オレの台詞取られた……」

「ハハハッ」

相変わらず愉快な一般生徒だった。

そして食堂に来ていたのは彼らだけじゃない。

「全く、何してんのよ。戦線のリーダーである私に黙って」

「水臭いよ、同じガルデモなのに」

「浅はかなり」

「椎名さんが音に気付かなかつたら僕たち誰も来れなかつたよっ」

戦線のメンバーもいたらしい。

その後ろからも、歌を聞きつけた一般生徒がちらほらと入ってきていた。

そんな彼らを尻目に、岩沢が小さな声で俺に話しかけてくる。

「少し声が大きすぎたかな」

「いや、問題にはならないように手は打ってある」

「いつの間に…」

「さっきのライブでやったのが残っているだけだよ」

「そういうことですか」

「なら、思いっきり歌ってもいいんだな？」

「ああ」

次は2曲目。

3人だけじゃなくて、思わぬ観客が増えてしまったけど…。

遊佐と岩沢は、それも良いかと思いついたようだ。

そして、最後の曲が始まった。

.....。

最後の曲『一番の宝物』

それはまさに卒業していく僕らにふさわしい歌だった。

遊佐と岩沢にとっては、ガルデモの仲間や戦線メンバーとの日常。

俺と遊佐にとっては、2人で過ごした短い時間。

そして俺にとっては、恋姫無双の世界で生きてきた90年間。

そんな幸せな日々の記憶を胸に、次のステップへ進む曲なのだから。

そしてギターのリズムと共に、3人で始めた特別ライブが再開した。

<< 裾が濡れたなら 乾くの待てばいい 水音を立てて跳ね  
>> た

静かな歌い出し。

それが…。

<< 握っていてくれた この手を離さなきゃだめだ >>

次のサビへ続くために少し強くなって終わる。

マイクもない。

スピーカーもない。

それでも食堂中に岩沢の音が響き渡っていた。

<< ひとりでも行くよ たとえつらくても >>  
<< みんなで見た夢は 必ず持っていくよ >>  
<< みんながいいな みんながよかった >>  
<< でも目覚めた朝 誰もいないんだね >>

たった2人の観客から始まったライブ。

それに野球部の仲間が加わって。

戦線メンバーが加わって。

2曲目の演奏が始まる頃には、他の一般生徒も入り始めていて。

<< もう振り返っても 誰の影もない 水溜まりだけが光っ  
>> た >>

再び静かなメロディ。

それも再び…。

<< それが見つかったなら　あとは踏み出す　勇気だけ　>>

次のサビへ続くために少し強くなって響く。

夜も11時を軽く過ぎているのに。

明かりもたった1つしかないのに。

元々2人だけのためのライブだったのに。

演奏が進むにつれて食堂に皆が集まってきて、そして…。

<< どこまでも行くよ　ここで知ったこと　>>

<< 幸せという夢を　叶えてみせるよ　>>

<< みんなと離れても　どんなに遠くなくても　>>

<< 新しい朝に　この僕は生きるよ　>>

今はもう、食堂を埋め尽くさんばかりに人が入ってきていた。

岩沢は観客が増え続ける様子を見て、感動に全身を震わせている。

震わせながらも、歌い続ける。

そんな岩沢と、観客である俺と遊佐。

その3人を半円で囲むかのように、俺と遊佐から少し間を空けて人がひしめいている。

それでも静かなのは……。

<< ひとりでも行くよ 死にたくなっても >>

<< 声が聞こえるよ 死んではいけないと >>

<< たとえつらくても 闇に閉ざされても >>

<< 心の奥には あかりがともってるよ >>

岩沢の演奏に聞き入っているからだ。

俺も。

遊佐も。

野球部員も。

戦線メンバーも。

一般生徒も。

皆が静かに聞き入っているんだ。

そんな空間を作り出す人が、俺と遊佐のためだけに開いてくれたワ  
ンマンライブ。

俺が知らなかった6日間の、遊佐の努力の結晶。

それが、人がひしめく食堂の中で……。

< 巡って流れて 時はうつろいだ >

< もうなにかあったか 思い出せないけど >

< 目を閉じてみれば みんなの笑い声 >

< なぜかそれが今 一番の宝物 >

ギターが奏でた最後の余韻が聞こえなくなり…。

静かな感動と共に、終わりを告げた。

俺と遊佐、そして岩沢の目から涙が零れ落ちる。

これで、今度こそ遊佐の心残りは無くなったんだ。

そしておそらくは岩沢も…。

だから……。

カタンッ

ギターが何も無い床に落ちた。

俺と遊佐は見つめあう。

「やりたいこと、全部できちゃいました」

「そうだな」

「奏人、愛してます」

「俺も愛してる」

お互いに唇を近づけて…。

重ねて…。

その感覚が消えた、次の瞬間……。

岩沢と、遊佐と、俺が居た空間には……。

誰も、いなくなっていた。

N  
o  
·  
2  
:  
A  
n  
g  
e  
l  
B  
e  
a  
t  
s  
!  
の  
世  
界  
編  
完。

## 満足（後書き）

この作品は二次創作です。

Angel Beats!に関するものは元々KEY、ANIPL  
EX、電撃G's magazine、P.A.WORKSが共同  
で製作したものであり、キャラクターや世界観、楽曲においてAn  
gel Beats!のものを使用させて頂いております。

## 人生（前書き）

最終章、魔法先生ネギま！？ の世界編です。

魔法先生ネギま！？ の世界…。

劉奏の人生は、ここから始まりました。

そして…。

劉奏の人生は、ここで終わります。

第一話にて最終話。

最終章にてエピローグ。

早すぎる転生物語の最後、その終わりを…。

ぜひご覧あれ。

## 人生

眩しい。

そう思っで手で目を塞ぐ。

すると今まで聞こえ続けていた音に気付く。

ズアアアアアアアアアアアア……。

それは、何か大量の水が落ち続けている音。

滝の音。

俺は湿気に満ちた空気を感じながら、体を起こした。

そして目を塞いだ手をどかし、辺りを見回す。

そこは……。

見渡す限り滝の風景。

その中にあるテラス。

音からすると、滝はテラスの遥か下にまで落ちているようだ。

テラスから細い道が伸びた先は、滝の合間にある石造りの大扉。

上を見ると広大すぎるドーム型の天井が、まるまる光源となっていた。

光が水や水蒸気で乱反射して、至るところに虹が見える。

幻想的な世界。

それはまるで、楽園のようだった。

「おや、こんな所に出てきましたか」

振り返ると、そこには全身ローブ姿の美しい人。

顔は中世的で男か女かわからないが、美しいことだけはわかる。

もしかしたら人じゃなくて、この方が本当に……。

「ええ、神ですよ」

次の瞬間、美人が自称神の老人に変わった。

俺はずっこける。

あの白い空間で死ぬたびに会う自称神が、姿を変えていただけだったのだ。

こ、こいつ、口調まで変えて俺をもてあそびやがって……。

「いえいえ、こちらが素ですよ？」

自称神は言いながら美人の姿に戻る。

ま、まさか、出会った時から演技してたとでも言っのか…？

「ええ、そういうことです」

「なお悪いわっ！」

俺は自称神をはたいた。

スルッ

それは自称神と着ているローブをすり抜けた。

「!？」

俺は創造能力で”絶対に当たるボール”を作って投げる。

消えるボール。

「私が与えた能力ですよ？ 効くわけないでしょう」

呆然とする。

ま、まさか、こいつ本当に神…。

「違います。神はただのネタですよ。私はクウネル・サンダースと言います」

またずっこける。

こ、こいつ……。

どこまで俺をおちよくれば気が済むんだ。

名前もどこのケンタッキーのパクリだし…。

「まあ確かに他の名前もありますが、私はこれが気に入ってますので」

「……人の趣味にとやかく言う気はないから良いけど、俺は成仏」

「わかっています。後で成仏させてあげますから、今は私の話を聞いてください」

「……………」

俺は自称神ことクウネルの言葉で押し黙った。

”成仏させる”とはつきり言われたからだ。

クウネルは基本的に、やると言ったことは全てやってきた。

最初、好きな能力を3つ与えると言ったが、普通は限度があるだろう。

俺が求めた能力は、もはや”何でもできる能力”ともいえる無茶な代物だった。

それでも構わずに与えてくれた。

俺以外のイレギュラーを無くして欲しいという約束も守ってくれた。

Angel Beats!はうる覚えだが、確かに俺みたいな能力者は他に居なかったしな。

悪戯好きなのが玉に瑕だが、こいつの言葉は信じられる気がする。

「では信じてくれた所で、改めて自己紹介と行きましょうか」

そしてクウネルは話し出す。

俺が最初に住んでいたこの世界には元々魔法が存在していて、それが秘匿されていたこと。

クウネルは麻帆良の図書館島の司書であること。

「あの地下が巨大迷路で有名な？」

「はい。ここはその最深部になります」

俺は驚く。

辺りを見渡して疑問に思い、上を見てここが地下だと納得した。

まあ魔法だし、と。

そして俺が落ち着くのを待っていたのか、クウネルは話を再開した。

クウネルは図書館島の地下に保管されている人造異界の管理人でもあること。

「あなたが行った恋姫無双の世界やAngel Beats!の世界は私が作ったものです」

「え、そんな……」

「中で生きていた人は、ちゃんと魂のある人間ですよ」

「あ、なんだ……。でもどういうことだ？」

「物語と同じ状況になるように、あなたと同じ方法で手を加えただけです」

そういうことか。

その後、話は進んで行ってそもそも何故こんなことをしたのかという話になる。

このクウネルという人間。

図書館島の中でなら基本的に何でも出来るが、外には出られないらしい。

そのため、毎日が暇で仕方がなく、人生の収集が趣味になったそうだ。

「うわ、趣味悪っ！」

「ありがとうございます」

「いや褒めてないって」

それで趣味が興じて、暇つぶしで不幸な魂に能力と第二の人生を与

えていたそうさだ。

「暇つぶしって……俺もその一人ってことか？」

「いえ、アナタはある人に頼まれてですよ」

「ある人？」

「ええ。源しずなという、あなたの親戚の人ですよ」

俺は驚いた。

一度目の人生では避けられていたとばかり思っていたのに、第二の人生の手配までしてくれていたなんて…。

「私も驚きましたよ」

「え？」

「学園長しか知らない私の居場所を独力で探し当てて、会ってすぐにアナタのことを頼まりましたから」

「なっ……」

「不幸のまま死ぬことが避けられないのなら、死んだ後の幸せを与えてあげたい。そう言っていました」

「しずなさん……」

しずなさんには本当に頭が上がらない。

「しかし、まさか狭霧遊佐という子まで亡くなるとは思いませんでした。それで急遽（あわただしく）アナタをAngel Beats!の世界にも送ることにしたんです」

「……………」

そう……だったのか。

劉奏は幸せになる機会を与えてくれた2人に、すごく感謝した。

……………。

あの後も話は進んだが、俺たちはテラスの椅子に座っていた。

目の前のテーブルには紅茶のカップが乗っていて、いかにもお茶会という感じなのだ…。

丸テーブルに椅子が2つという状況に、俺はラヴァーズカフェのことを思い出していた。

そこでクウネルが遊佐に変身し…。

「こんな感じですか？」

スティック菓子を啜えて顔を突き出した。

「ブツ!!」

こんな感じでお茶が零れることはあったが、和やかに話は進んでいった。

そして話題は、劉秦が送ってきた3つの人生の話へ。

最初の人生、恋姫の人生、死後の人生の3つである。

「3つの人生で得たものは、あなたにとって大きいものだったみたいです」

「ああ」

「3回とも共通していたことはありませんか？」

「ああ」

「ここで一息つく。」

そして、3つの人生を思い出し、確かに全て共通していたと確信する。

だから俺は自信を持って、それを口にした。

「大切な人との触れ合いが自分を幸せにするのは、どの世界でも同じだった」

そう。

「最初の人生では遊佐。次の人生では母と神童の彼女たち。最後の人生では遊佐・立花・岩沢に新生野球部」

「……………」

「それぞれ相手は違うけど、彼女たちとの触れ合いの中で幸せを感じていた。それだけは、事実だった」

それだけは、3回とも同じだったんだ。

.....。

その後、話は1つ1つの人生についての話に移る。

まずは最初の人生だ。

「さて。あなたの最初の人生は、紛れもなく不幸な人生だったのですが……」

「ああ。だけどそれは、俺自身のせいでもあるんだ」

「どづいつことですか？」

「もし積極的に人に関わって素直に心を開いていけば、死ぬのは早

くても幸せな人生だったはずなんだ」

そう。

奏人の頃、俺はずっと引きこもっていたけれど…。

当時は知らなかったが、俺は周りから大切に想われていたのだから。

「少なくとも最後の6日間。死後の世界の時と同じように過ごせば、幸せな人生になったはずなんだ」

最初の人生を振り返り、劉奏はそう確信していた。

.....。

次は第2の人生である。

「恋姫の人生は、紛れもなく幸せな人生だったわけですが…」

「でもそれは、神童の彼女たちのおかげなんだよね」

そう。

風に魅了のままでは俺の奪い合いが起こると忠告されなかったら…。

「成都に神童が集結。1人で賊を退治する神童たちのバトルロワイヤルしたね…」

気楽で怠惰な酒池肉林生活に突き進むのを、彼女らが止めてくれな  
かったら…。

「麻薬中毒みたい。誰かがそう言ってましたね…」

俺の強大な能力を薬にたとえて、危険性と有用性を教えられなかつ  
たら…。

「破滅。他の転生者にはよくあることです」

……全部、考えるだけでも恐ろしい。

恋姫の人生を振り返り、劉奏は身を震わせていた。

.....。

最後は第3の人生である。

「死後の人生も、紛れもなく幸せな人生だったわけですが……」

「ああ。そして、初めて自分で掴み取った幸せだった」

「自分だけですか？」

「いや、もちろん立花や野球部員、遊佐や岩沢のおかげでもある」

そう、あの世界にはたった4日間しか居なかったけれど…。

立花の助言を得て、心残りを解消するために自ら新生野球部を結成した。

最初の人生を自力で思い出し、立花に恩を返して喜んで貰えた。

たった2日だったが、物凄く密度の濃い時間を遊佐と過ごすことができた。

ライブを最後まで続ける手助けをして、最後に満足の中で成仏できた。

「全部、自分が動いたからこそその幸せであり、彼女たちが居たからこそその幸せでもあるんだ」

死後の人生を振り返り、劉奏は幸せを噛み締めていた。

.....。

話が終わり、紅茶のカップも既に空になっていて……。

「彼女たちの下に逝きたい……でしたよね？」

「ああ。遊佐の下にもな」

「わかりました」

クウネルが立ち上がり、少し広い場所へ。

俺も立ち上がって、クウネルについていく。

クウネルが止まった後、少し送れて俺も止まった。

「さて、今からあなたは成仏するわけですが、その前に聞きたいことがあります」

「ん？ なんだ？」

「自分の人生に、悔いはないですか？」

「ああ」

俺は即答した。

クウネルはそれに驚いたようだったが、すぐに視線を真剣なものに戻す。

そして…。

「それでは、成仏してもらうにあたって、あなたにして頂きたいこ

とがあります」

「ん、なんだ？」

なんだろう。

また頼みごとだろうか。

ま、まさか今更になって俺の経験を本にしるとか言っくんじやないだろうな？

「それはもう終わっています」

「……じゃあ何なんだ？」

本当になんだろう。

…わからない。

クウネルは相変わらず真剣な顔だ。

「あなたにしてもらいたい事は……」

「…してもらいたい事は？」

「してもらいたい事、それは……」

……それは？

「彼女たちの下へ逝く能力」を自分で作って使うことです」

瞬間、俺は固まった。

よく考えれば、そうすれば彼女たちの下へ逝くことができたはずである。

というか、死後の世界でその能力を使えば、すぐに成仏できていたんじゃないか？



早すぎる転生物語 完。

**恋姫無双編を書き終えて、今思つこと（前書き）**

**注意**

この章では、活動報告などで書かれたコラムや裏話をそのまま掲載します。

ページ上部の作者名「ゆう」をクリックした先でも同じ物が読めますので、気になる方はそちらにどうぞ。

この章は「記事を探すのが面倒」または「そもそも活動報告を知らない」、かつ「裏話とかは裏設定とか裏で作者が何を言っていたのか気になる」という方のために、用意させて頂きました。

まずは1つ目の活動報告を、ぜひご覧あれ

## 恋姫無双編を書き終えて、今思ふこと

今回は恋姫無双の世界編の最終話『幸せ』の公開直後に書かれた活動報告です。

5月3日から書き始めていた臆病者の物語が一区切り付ききました。書きたかった物語を書きたいように全力で書けたと思います。

恋姫無双の世界で戦争を阻止。

このような物語を書いたのは、私が初めてではないでしょうか。

この状況に一石を投じることができたのなら幸いです。

原作キャラたちが真面目に戦争の正義に拘るから、それに引きずられるのでしょうか？

彼女らの正義を肯定するにも否定するにも戦争が必要ですからね。

仕方が無いのかもしれませんが。

臆病者の劉奏でも出来た、戦争の阻止。

正義を謳う立派なオリ主様にこそ、実現して欲しいものです。

## Angel Beats の世界編 突入！（前書き）

### 注意

この章では、活動報告などで書かれたコラムや裏話をそのまま掲載します。

ページ上部の作者名「ゆう」をクリックした先でも同じ物が読めますので、気になる方はそちらにどうぞ。

この章は「記事を探すのが面倒」または「そもそも活動報告を知らない」、かつ「裏話とかは裏設定とか裏で作者が何を言っていたのかが気になる」という方のために、用意させて頂きました。

2つ目の活動報告を、ぜひご覧あれ。

## Angel Beats! の世界編 突入!

今回はAngel Beats!の世界編の第1話『幸せ者の死後』の公開直後に書かれた活動報告です。

Angel Beats! の世界編に突入しました。

劉奏の歩んだ幸せな人生と、不幸な人生を歩んだ人を集める世界。

例外は、記憶を失って迷い込んだ音無のようなイレギュラーだけです。

一見、劉奏が迷い込んだのは矛盾しているように思えますが、しっかりと答えが用意されています。

神が送り込んだからだけじゃないですよ？

ちゃんとこの世界のルールにも則っています。

思いつきりボカしているのでわかり辛いですが、頭の良い人なら理由を推理できるかもしれませんね。

何にせよ、成仏する気マンマンの劉奏が送る Angel Beats!

ぜひご覧あれ。

**余談。私が影響を受けた作者について1（前書き）**

**注意**

この章では、活動報告などで書かれたコラムや裏話をそのまま掲載します。

ページ上部の作者名「ゆう」をクリックした先でも同じ物が読めますので、気になる方はそちらにどうぞ。

この章は「記事を探すのが面倒」または「そもそも活動報告を知らない」、かつ「裏話とかは裏設定とか裏で作者が何を言っていたのかが気になる」という方のために、用意させて頂きました。

3つ目の活動報告を、ぜひご覧あれ。

## 余談。私が影響を受けた作者について1

今回はAngel Beats!の世界編の第2話『成仏を目指して』の公開直後に書かれた活動報告です。

さて、Angel Beats!の2話を公開しましたが、どうでしたでしょうか。

今回は余談として、私が影響を受けている作者について話します。

1人目は、麻枝准氏です。

Kanon、Air、CLANNAD、リトルバスターズ!といったヒット作を世に送り出した大御所Keyのシナリオライターです。

私が知っているのはONE 〜輝く季節へ〜からAngel Beats!のアニメまでですが、特筆したい特徴は2つ。

まずは何を差し置いても『強烈なテーマ性』を特筆しますね。

初めてONEをプレイした時。

締めだけで全てのメッセージが伝わる強烈さに鳥肌が立ったのは今でも憶えています。

彼はよく設定の説明不足を批判されますが、それはテーマに直結しないものを極力削ぎ落としているからではないでしょうか？

テーマと直接関係ない18禁シーンについて、無い方が良いとよく言われるONEやAIRなど、初期の作品は特に。

Angel Beats!もそうですね。

あの作品には、神は実在するか、Angel Playerがどうやって世界に影響を及ぼしているのか、奏はソフトをどうやって手に入れたか、直井が催眠術をどうやって身に付けたか、等の大きな謎がありますが、全て明らかになっていません。

あ、列車事故で生還した皆がなぜ臓器提供意思表示のできるカードを持っていて、尚かつ誰も記入していなかったのか、という大きな謎もありましたね（笑）

他にも謎は多々ありますが、いずれの真相も人生賛歌というテーマから外れています。

だからバツサリ切り捨てたんでしょうね。

彼のテーマに対する拘りには、尊敬する他ありません。

テーマ性の次に特筆したいのは『斬新さ』ですね。

AIRの3部構成、CLANNADの野球と渚アフター、リトルバスターズ！のミニゲーム。

あ、男性向け恋愛ゲームとしては男キャラの扱いが斬新ですよ。

AIR最終章の主人公とか、CLANNADの勝平や幸村の爺さんとか。

リトルバスターのスタートとラストなんて男女比のバランスがおかしいです。すしね。

男4人に対して女は鈴1人というまさかの逆ハーレム状態だもの。

あとテーマの内容が斬新なの言うまでも無いです。

他のどこに『家族』や『友情』をテーマにしている恋愛ゲームがありますか。

今はあっても、かのゲームが出た当時は無かったと思います。

私も何かを書くたびにテーマ性や斬新さに拘ろうとしてしまうので、間違いなく私は麻枝准氏の影響を受けています。

拙作“早すぎる転生物語”も大きく影響を受けていると思われます。彼の影響がなければ、恋姫無双編のテーマが「幸せ」になることはなかったと思います。

麻枝氏の「幸せ」がテーマの作品といえば、もちろんONEですよ。ね。

“とても幸せだった”で始まる、永遠の世界を否定した、あの作品です。

## 余談・私が影響を受けた作者について2（前書き）

### 注意

この章では、活動報告などで書かれたコラムや裏話をそのまま掲載します。

ページ上部の作者名「ゆう」をクリックした先でも同じ物が読めますので、気になる方はそちらにどうぞ。

この章は「記事を探すのが面倒」または「そもそも活動報告を知らない」、かつ「裏話とかは裏設定とか裏で作者が何を言っていたのかが気になる」という方のために、用意させて頂きました。

4つ目の活動報告を、ぜひご覧あれ。

## 余談：私が影響を受けた作者について2

今回はAngel Beats!の世界編の第3話『想定外の放課後』の公開直後に書かれた活動報告です。

さて、Angel Beats!の3話を公開しましたが、どうでしたでしょうか。

今回も余談として、私が影響を受けている作者について話します。

2人目は悩みました。

『ONE』や『Kanon』で有名な久弥直樹氏や『それ散る』や『俺つば』で有名な王雀孫氏を取り上げようとも思いました。

が、影響を受けた点について麻枝准氏とかぶる部分が多いので取り止めました。

そのため今回は視点を変えて、このサイトで小説を掲載している作者様から選びました。

2人目は浦波氏です。

浦波氏の作品は、自称クズのオリ主が知恵と知識とコピー能力を駆使して奮闘する物語です。

その中でも最初の作品、『恋姫？むしろ三国志』の原作キャラ総否定という斬新な発想に衝撃を受けました。

そして自分も案だけ持っていた発想を形にしてみたいと思ったのが、早すぎる転生物語を書き始めたきっかけです。

彼の作品が無ければ、私がこの小説を投稿することはありませんでした。

また、善悪や正義に囚われずに、やりたいことをやりたいようにやるオリ主。

目的のために手段を選ばないその姿は、いっそ清々しいとさえ思います。

うちの劉奏はそのオリ主の影響を受けています。

というより、劉奏はかのオリ主を改変してできたものなのです。

根幹となる臆病で利己的な部分はそのままだに“間抜け&ヘタレ”を加えて精神を弱化する。

代わりに“コピー能力”を“創造能力&改造能力”にして能力を強化。

これで劉奏の根幹部分が完成です。

あとはヘタレ                    自己評価が低い                    他力本願といった連想ゲームで肉付け。

しかも、臆病だから任せるのは怖い                    任せても怖くないように変えてしまえ。

このような感じで劉奏が自力で生み出す能力の方向性まで決まりました。

このように、私は色々な人から影響を受けて、早すぎる転生物語を書いています。

また人から影響を受けている事そのものも、劉奏の物語には反映されています。

場合によっては、これを読んでいるあなたの影響を受けるかもしれません。

ありえない話ではありません。

現に私は、自分の作品を読んでくれる人の影響で、物語を書き続けているのですから。

## 物語製作の裏事情を公開！（前書き）

### 注意

この章では、活動報告などで書かれたコラムや裏話をそのまま掲載します。

ページ上部の作者名「ゆう」をクリックした先でも同じ物が読めますので、気になる方はそちらにどうぞ。

この章は「記事を探すのが面倒」または「そもそも活動報告を知らない」、かつ「裏話とかは裏設定とか裏で作者が何を言っていたのかが気になる」という方のために、用意させて頂きました。

5つ目の活動報告を、ぜひご覧あれ。

## 物語製作の裏事情を公開！

今回はAngel Beats!の世界編の第4話『劉奏の最初の人生』の公開直後に書かれた活動報告です。

さて、Angel Beats!の世界編の4話にて、とうとう劉奏の最初の人生が明かされました。

彼は Angel Beats! x Air x 魔法先生ネギま!? の多重クロス世界の出身でした。

.....。

ごめんなさい、Airの呪いの設定導入が中途半端ですよ。

批判は甘んじて受け入れます。

実は劉奏の最初の人生が酷くてAngel Beats!の世界で明かすのは、執筆開始時点から決まっていました。

せっかくの転生者ですから、幸福と不幸の対照的な人生の両方を経験させたかったです。

それで恋姫は幸福、Angel Beats!では不幸、という担当でした。

とはいえ能力を使う関係から恋姫で少しファンタジーな幸福を描いてしまったので、バランスをとるためにAngel Beats!でも少しファンタジーな不幸を描かねばいけないことに途中で気が付きました。

そういう意味で、Airの呪いは最も都合が良かったのです。

あとAngel Beats!の登場人物の誰かが劉奏の最初の人生に深く関わっている点も、執筆開始時点から決まっていました。

まあAir設定の導入を考える前は遊佐ではなく、ボーカル以外のバンドメンバーの予定でしたが。

なお、最初の世界で設定したイリーガル排除は2つ目の世界に続いていません。

イリーガルの排除は劉奏の能力ではなく、自称神による恋姫世界の保護からです。

でも保護が新しい世界にも続いている、と思込込ませる狙いはありません。

まあ続いている設定のままでも自称神に言い訳させることはできません。

独自設定極まっていますし、今回は自称神のテコ入れがあったってことでーっ。

あと順番ですが、Angel Beats!から始めようと考えたこともあるんですよ？

現世 死後の世界 成仏 神遭遇 恋姫世界の人生 の流れでね。

でもそうすると不幸語りが最初に来ちゃうから、それはきついよなと、そう考えたのです。

それでAngel Beats!は恋姫無双の次、という流れになりました。

初めての感想にありがとう！ 5話の裏話等を公開（前書き）

注意

この章では、活動報告などで書かれたコラムや裏話をそのまま掲載します。

ページ上部の作者名「ゆう」をクリックした先でも同じ物が読めますので、気になる方はそちらにどうぞ。

この章は「記事を探すのが面倒」または「そもそも活動報告を知らない」、かつ「裏話とかは裏設定とか裏で作者が何を言っていたのか気になる」という方のために、用意させて頂きました。

6つ目の活動報告を、ぜひご覧あれ。

## 初めての感想にありがとう！ 5話の裏話等を公開

今回はAngel Beats!の世界編の第5話『早朝の女子寮騒動』を公開し、感想を頂いた直後に書かれた活動報告です。

Angel Beats!の世界編の第5話を投稿しました。

そしてこの話を投稿して間もなく、初めての感想を頂きました。

初感想という事にも、期待してくれている事にも、感謝感謝です。

さて、原作主人公の成仏はやはり驚かれたみたいですね。

実は作者の私自身も驚いています。

なぜなら、私も最初はこんな展開にするつもりはなかったからです。

何が起きたかという裏話を明かすと、オリ主の立花に対する恩返し  
の時期が早まってしまったんです。

当初はAngel Beats!編の最後の方で、成仏しかけた劉奏が立花への恩返しのために踏みとどまる展開を考えていました。

恩返しの方法は音無が登場する原作の情報を与えるか否か、もしくは登場時期まで立花が待つか否かで変わる予定だったんですけどね。どちらにしても原作ブレイクが少なくても音無は最初から立花の味方だろうという展開でした。

以下に音無が主人公の外伝として考えていた、展開の一つを紹介します。

原作の『ここが死後の世界である証明のため、立花がいきなり音無の心臓をぶっ刺す』がオリ主の中途半端な忠告により…。

拙作で『ここが死後の世界である証明のため、立花がいきなり自分のお腹を掻っ切る』に変わってしまった。

いきなりの自殺に慌てた音無が必死こいて延命治療をした後、立花は何事も無く目を覚ます。

そして止血しただけの傷口が完全に塞がっているのを見て納得した音無は、自分を犠牲にして教えてくれた立花に感謝する。

そんな彼女を集団で虐めているSSSの存在を知って音無は怒り狂うが、それを当人である立花がいさめる。

…と。

この場合、外伝そのものが『被害者と加害者が自然に入れ替わる理不尽の連鎖』に焦点を当てた、一つのメッセージ作品になると考えていました。

完成させられれば凄そうだと思って、プロットまでは作ったんですが。

別にオリ主いらないですし、長くなりそうですし、前例までありそうだと思って、実際に書くのは断念しました。

あのアニメを見た大抵の人は、理不尽の連鎖の例外が立花奏しかない以下の構図に気がついていてしょうし、ね。

… 別の誰か 誰か SSS

… 直井の周囲 直井 SSS 立花奏

( 印による理不尽は生前のもので )

作る気はないですが、実際に似たような物を作るとしたら、オリ主無しの再構成物になりそうです。

実際の拙作では2人は早々に成仏してしまったので、外伝でも上記のような展開は起こりえません。

拙作のAngel Beats!の未来は、これから前例の無い領域に突き進むことになります。

ですが、早すぎる転生物語の主人公は、あくまでも劉奏です。

申し訳ないですが、世界の未来は二の次なんです。

それでよろしければ、今後ともぜひご覧あれ。

## プロットの大枠完成！ AB！編6話の裏話を公開（前書き）

### 注意

この章では、活動報告などで書かれたコラムや裏話をそのまま掲載します。

ページ上部の作者名「ゆう」をクリックした先でも同じ物が読めますので、気になる方はそちらにどうぞ。

この章は「記事を探すのが面倒」または「そもそも活動報告を知らない」、かつ「裏話とかは裏設定とか裏で作者が何を言っていたのかが気になる」という方のために、用意させて頂きました。

7つ目の活動報告を、ぜひご覧あれ。

## プロットの大枠完成！ AB！編6話の裏話を公開

今回はAngel Beats!の世界編の第6話『遊佐の想いと最期』を公開した直後に書かれた活動報告です。

作者にすら予想外の展開でプロットが壊滅してから1日。

大雑把にはありますが、再構築が完了しました。

これからは再構築したプロットを元に執筆を開始します。

それとAngel Beats!の世界編、第6話を投稿しました。

ここからは裏話ですが、第6話はプロット崩壊の影響をあまり受けていません。

受けていないのですが。

シリアスな遊佐の語りが100%を占めているという、早すぎる物語の中では異質な話となっています。

一応、劉奏が知らなかった自分への想いを遊佐から聞かされている

という感じで、視点が劉奏という点は固持し続けているんですけどね。

内容が完全に遊佐の1人語りですから、普段の劉奏の時のような文体や展開にするわけにもいきません。

では、なぜ劉奏のような展開にできないか。

想像してみてください。

お間抜けをやらかした遊佐が、衆目の中で叫びながら床を転がる様子を！

ビビリまくった遊佐が、涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにしながら叫んでいる様子を！

逆ハーレムを作った遊佐が、男だらけの酒池肉林生活を想像して喜ぶ様子を！

……ありえないでしょう。

というか、そんな遊佐は私も嫌です。

性格と展開は切っても切り離せない、というわけです。

文体については、拙作の遊佐で統一してきた敬語口調を変えることができない、ということであっていただけだと思います。

と、このような理由で早すぎる転生物語としては異質な話となったので、プロット崩壊の影響を受けずとも書き上げるのに苦労しました。

話の最初に“**「**”を付けて、最後に“**」**”を付けて終わるようにするとか、遊佐の記憶内の会話では鍵カッコの変わりに“**<**”と“**>**”で統一するとか、細かい工夫も必要でしたしね。

あと、Airの設定を導入したのに“呪い”ではなく“症状”と言われている事に困惑している方も居ると思います。

ですが、それは魔法先生ネギま！？とのクロス世界だからです。

どういう事かと言うと、この世界では魔法の存在が秘匿されている、ということですよ。

明かしても良いのですが、奏人に直結するもの以外を受け入れる余裕が遊佐にありません。

おばさんこと源しずなはそれがわかってるので、一般人向けにわかりやすく、奏人に直結する事実だけを話していたのです。

それで“オカルト”とか“力”とか言っていたんですね。

本当は、ネギまの烏族で白い翼が忌まれる原因が翼人にあるとか、しずなが治癒や解呪の分野で有名な魔法研究者だとか、膨大な設定を考えていたんですけどね。

しずなが話すとは思えないので、全てお蔵入りです。

しずなは「医療からオカルトまで手を出した」という一言で流しましたが、その裏にはオカルト（魔法）の方面で並々ならぬ苦勞をしていた、という裏設定があります。

自慢も苦勞も必要以上に語らない大人のしずなの経験なので、本編で明かせるとは思えません。

それに本筋にもあまり関係がないので、この場で公開しました。

と、こんな感じで6話の裏話を終わります。

遊佐の頑張り、しずなの苦勞。

そこから透けて見える、自分が思っていたより愛されていた事実。

加えて、何気にクロスしているガルデモのリーダー、岩沢の過去。

その話を踏まえて、物語はどういう展開を迎えるのか。

今後とも、ぜひご覧あれ。

7〜9話を公開！ Q&Aで疑問点も解決します。（前書き）

注意

この章では、活動報告などで書かれたコラムや裏話をそのまま掲載します。

ページ上部の作者名「ゆう」をクリックした先でも同じ物が読めますので、気になる方はそちらにどうぞ。

この章は「記事を探すのが面倒」または「そもそも活動報告を知らない」、かつ「裏話とかは裏設定とか裏で作者が何を言っていたのかが気になる」という方のために、用意させて頂きました。

8つ目の活動報告を、ぜひご覧あれ。



A・ちゃんと付いています。

|||||

実は、劉奏がうっかり見落としているだけというオチでした。

最初の方にちよこつとだけ書いたのですが、改造能力で表示されるステータスの項目は、制限無しの弊害で物凄く多いです。

その数は一人の人間が把握しきれるものではなく、劉奏もパツと見で重要そうな項目以外は無視しています。

皆さんに見せているステータスはあくまで劉奏が“抜粋”したものであり、それ以外の項目もしっかり存在しているということですね。

ただ、その抜粋している劉奏に技能『うっかり』が付いていますから……とある大事な項目郡を見落としています。

知力70なのにロクに頭が回ってないとか運200なのに飯が食えなかったりしたというのも、同じ項目郡にある何かのせいです。

もう少しあげると、劉奏の特徴である間抜け・変態・臆病者という設定も、同じ項目郡の中にあります。

もちろん、劉奏の技能『うっかり』も同じ項目郡にあるんです。

同じ技能でも、劉奏の母が持っていた『うっかり』とは違う項目郡にある、というのがポイントですね。

具体的な名称は言いませんが、もうわかりだと思えます。



つまり、劉奏にとっては女性の部屋で寝るのは当たり前のことなんです。

それどころか同じ布団で寝ることまでもが当たり前という認識です。

むしろ立花と別の布団で寝た事の方が異常だと劉奏は思っています。

だからこそ筋肉眼鏡との相部屋をあんなに嫌がったんですね。

肌を重ねて一緒に寝る状況を想像しちゃいますからw

1ヶ月も耐えられるわけがありません。

あと、劉奏が当たり前のように女子寮に居る理由として…。

劉奏の魅力90が地味に効いていて、女性の方も嫌がらない、という点を付け加えておきます。

実は天使ちゃんこと立花も、思いつき魅力90の影響を受けていました。

立花にとって劉奏は、恋愛とまではいかなくとも凄く気になる存在だったんです。

だから初っ端から原作ブレイク必至の行動ばかりだった…というわけです。

実はゆりっぺや直井も同じなんです……劉奏には全く伝わりませ  
ん。

ゆりっぺは裏目的な意味で、直井は無関心的な意味で。

合掌。

ストレートに協力を申し出た立花の勝利です

|||||

今の所、思いつくのはこれくらいでしょうかね。

他に思いついたら、またQ&Aを書いてみようと思います。

さてAngel Beats!の世界から送る劉奏の物語は、いよ  
いよ大詰め。

成仏までのカウントダウンも、もうすぐ0になります。

劉奏は、遊佐は、どのようにして成仏を迎えるのでしょうか。

最初で最後のライブは、どのようなものになるのでしょうか。

この世界に送り込まれたあの夜から、3日目。

最終日の終わりを、ぜひご覧あれ。

10〜11話を公開！ 裏話と次回予告も少しだけ。（前書き）

注意

この章では、活動報告などで書かれたコラムや裏話をそのまま掲載します。

ページ上部の作者名「ゆう」をクリックした先でも同じ物が読めますので、気になる方はそちらにどうぞ。

この章は「記事を探すのが面倒」または「そもそも活動報告を知らない」、かつ「裏話とかは裏設定とか裏で作者が何を言っていたのかが気になる」という方のために、用意させて頂きました。

9つ目の活動報告を、ぜひご覧あれ。

10と11話を公開！ 裏話と次回予告も少しだけ。

今回はAngel Beats!の世界編の最終話『満足』を公開した直後に書かれた活動報告です。

Angel beats!の世界編の10話と11話を公開しました。

この2つの話は作者初のライブイベントであり、Angel Beats!編の最後を飾る最も重要なシーンでもあります。

そういうわけで最初で最後のラブラブデート以上に全力を尽くしたつもりですが、いかがでしたでしょうか。

これを見ているあなたの心に、少しでも何かが残れば、私は嬉しいです。

さて、ここからは裏話になる訳ですが…。

この2話は、一度プロットが崩壊した時に劉奏が成仏を思い留まる

シーンが無くなった所です。

もちろん、思い留まる所以以外にも元のプロットと異なる部分が多いのですが、実際に書いてみて作者はそれで良かったと思っています。

……その分大変になりましたが。

でもそのおかげで……いや、今言うのは止めておきましょう。

何が言いたいのかは、明日の最終章が公開された後にて。

まだ微調整が残っていますが、05月17日(火)18:00に更新する予定です。

というわけで、恒例の次回予告と行きましようか。

劉奏が送った3つの人生。

ここまで見てきてくれたあなたに、感謝を。

そして、その総決算とも言える最終章を、最後の物語を。

どうか、ぜひとも、ご覧あれ。

**早すぎる転生物語、ついに完結！（前書き）**

注意

この章では、活動報告などで書かれたコラムや裏話をそのまま掲載します。

ページ上部の作者名「ゆう」をクリックした先でも同じ物が読めますので、気になる方はそちらにどうぞ。

この章は「記事を探すのが面倒」または「そもそも活動報告を知らない」、かつ「裏話とかは裏設定とか裏で作者が何を言っていたのかが気になる」という方のために、用意させて頂きました。

10個目の活動報告を、ぜひご覧あれ。

## 早すぎる転生物語、ついに完結！

今回は早すぎる転生物語の最終話『人生』を公開した直後に書かれた活動報告です。

早すぎる転生物語が、ついに完結しました。

最終章、まさかの1話完結に驚いた方も多いと思います。

ですが『幸せとは何か』がテーマのこの作品を纏めるのに、あれ以上の良いタイミングは他に無い。

そう思っ、完結に踏み切りました。

幸せとは、誰かと大切に想い合うことで得られるもの。

幸せとは、気がつかずに壊してしまうこともあるもの。

幸せとは、年齢や境遇に関係無く、誰でも得られるもの。

このようなメッセージが伝わってくれていたら、作者としては大成

功です。

もしそうなら、とても嬉しく思います。

ボタンを拾ってきました。(主人公紹介)(前書き)

注意

この章では、活動報告などで書かれたコラムや裏話をそのまま掲載します。

ページ上部の作者名「ゆう」をクリックした先でも同じ物が読めますので、気になる方はそちらにどうぞ。

この章は「記事を探すのが面倒」または「そもそも活動報告を知らない」、かつ「裏話とかは裏設定とか裏で作者が何を言っていたのか気になる」という方のために、用意させて頂きました。

11個目の活動報告を、ぜひご覧あれ。

バトンを拾ってきました。(主人公紹介)

今回は早すぎる転生物語の完結から数日後に書かれた活動報告です。

他の拙作2つの主人公と一緒に、主人公の紹介をしております。

他の拙作とは次の2つです。

1・『最強になったゴミクズがエロ方面で好き勝手しまくる話』

(通称：クズエロ)

2・『一晩で終わる聖杯戦争』

(通称：一晩戦争)

ちなみに『早すぎる転生物語』の通称は”早転物語”となっています。

他の作者様に触発されて、私もバトンを回してみようと思いました。

記念すべき最初の回答、ぜひご覧あれ！

1・主人公の名を答えよ  
早転物語……劉奏（真名は心眼、ネギま世界では源奏人）  
クズエロ……??（ネギま世界のオリ主“ボクちゃん”）  
一晚戦争……??（Fate世界のオリ主“僕”）

2・先代の英雄（回された人）の名を答えよ  
阿音様です

3・主人公の強さを答えよ  
レベル（100が上限として）  
劉奏………戦闘Lv・30 精神Lv・30 <Level  
up!（+29）>  
ボクちゃん………戦闘Lv・ 精神Lv・0  
僕………戦闘Lv・100 精神Lv・30

ボクちゃん上限を無視してるしw

ちなみに劉奏のレベルアップは戦闘と精神の両方です。

属性

劉奏……………悪・人・光  
ボクちゃん……………悪・神・闇  
僕……………悪・霊・無

最初に“悪”だけが綺麗に揃っている不思議w

HP/MP

( 上限9999 ) / ( 上限9999 )  
劉奏……………HP 100 / MP 10 ( 本人はHP9999 /  
MP9999と思い込んでいる )  
ボクちゃん……………HP / MP  
僕……………HP9999 / MP9999

また上限を無視w。

劉奏の注釈は、最後まで存在に気付けなかった隠しステータスの影響です。

攻撃力(上限999)

劉奏……………30 < Level up! ( +29 ) >  
ボクちゃん……………

僕……………999

相変わらずw

劉奏はレベルが上がっても1ずつしか上がらない雑魚w

守備力(上限999)

劉奏……………999

ボクちん……………

僕……………999

みんな高すぎw

いや、全員が能力値を好きに改造できるのだから当然ではある。

魔力(上限999)

劉奏……………0

ボクちん……………

僕……………999

劉奏まさかの魔力ゼロ。

1度は999になったのですが、武力を1へ戻した時に一緒に戻し

ちゃっています。

魔術抵抗（上限999）

劉奏……………999

ボクちゃん……………

僕……………999

これも共通して高すぎw

今のところ拙作のオリ主は防御中心型のようです。

幸運（上限999）

劉奏……………200

ボクちゃん……………

僕……………999

200は少ないように見えますが、彼が渡ってきた世界に限ればとても高いです。

戦闘スタイル

劉奏……………逃げる・守ってもらう・戦ってもらう。楽勝なら応戦。

ボクちゃん……………手加減・一撃必殺・計略（大量の分身で裏工作）

僕……………逃げる・一撃必殺・暗殺（情報チート&デスノート）

性格がよく現れていると思います。

3人の違いも、3人の共通点も、よく現れています。

違いを見ると、型月世界の僕は2人の中間あたりになりますね。

共通点は基本的に臆病な所。

自分と同等以上……いや、自分を少しでも殺す可能性がある相手と、正面から戦う発想はありません。

4・主人公の戦闘時のセリフを答えよ

<< 劉奏 >>

\* 戦闘開始時「（劉奏は先制攻撃を受けた）のわああーっつ！  
ちよ、何で俺が剣なんて持たなきゃならんのだっ！」

\* 通常攻撃時「でああああーっつっつ」

\* 特技使用时【特技がありません】

\* 負傷時「しぬうううーっつ！……！  
たすけてえええええーっつっつ！  
！……！」

\* 奥義使用时【奥義を持ってません】

\* 退却時「ギブギブグッ、俺にしては頑張ったんだよーっつ  
っつ！……！」

\* 道具使用时【道具がありません】

\* 戦闘不能時「サンドバッグになるのはもう嫌だああーっつ

「!!!!」

\* (自分以外) 戦闘不能時「左慈と于吉に筋肉だるま×2? どうでも良いし」

\* 戦闘終了時 「なぜ俺を襲った?」

×【 退却時・戦闘不能時と同じです】

<< ボクちゃん >>

\* 戦闘開始時「ぶひひっ、ボクちゃん無双はじまるよ」

\* 通常攻撃時「…(黙って念じる)」

\* 特技使用時【 特技は通常攻撃です】

\* 負傷時 【 負傷しません】

\* 奥義使用時【 奥義を持ってません】

\* 退却時 「…(退却した分身を消す)」

\* 道具使用時【 道具を使いません】

\* 戦闘不能時【 戦闘不能になりません】

\* (自分以外) 戦闘不能時「ぐひひっ、ざまあ」

\* 戦闘終了時 「ぐふっ、ぐふっ、この娘たち最高過ぎる」

「ぐふっ、狙い通り」

×【 敗北しません】

<< 僕 >>

\* 戦闘開始時「…」

\* 通常攻撃時「…」

\* 特技使用時【 特技はありません】

\* 負傷時 【 負傷しません】

\* 奥義使用時【 奥義を持ってません】

\* 退却時 「…」

\* 道具使用時「…(何も言わずにデスノートへ名前を書きまくる)」

\* 戦闘不能時【 戦闘不能になりません】

\* (自分以外) 戦闘不能時「(自分で切断した遠坂凜の首を見て…)  
ぐっ…うえっ」

\* 戦闘終了時 「(自分で切断した遠坂凜の首を見て…)(ぐっ…うえっ)」

× 【敗北しません】

「ここまで読んで下さって、ありがとうございます。ありがとうございました。」

次回作について迷っています。(前書き)

注意

この章では、活動報告などで書かれたコラムや裏話をそのまま掲載します。

ページ上部の作者名「ゆう」をクリックした先でも同じ物が読めますので、気になる方はそちらにどうぞ。

この章は「記事を探すのが面倒」または「そもそも活動報告を知らない」、かつ「裏話とかは裏設定とか裏で作者が何を言っていたのかが気になる」という方のために、用意させて頂きました。

12個目の活動報告を、ぜひご覧あれ。

次回作について迷っています。

今回は早すぎる転生物語の最終話『人生』を公開した10日後に書かれた活動報告です。

最近の作者は、クズエロの執筆と早転物語関連の活動報告文を公開することに勤しんでいます。

その合間に次回作を考えているわけですが、テレジア様に感想を頂いた後から早すぎる転生物語の続編を考えるようになりました。

その場合、今のところ候補に上がっている主な世界は……。

1・ゼロの使い魔

2・魔法少女リリカルなのは

3・NARUTO

の3つです。

ですが、全部作者が原作を見ていない世界だったりします。

二次創作を多く見ているという理由で、今のところ有力な候補になっ  
ていますが…。

劉奏が主役だと、どの世界に行っても恋姫世界の彼女たちが登場。

恋姫時代の戦略を流用するにしてみせないにしても、彼女たちが協  
力して世界を乗っ取ってしまいます。

その結果、どうなるかということ…。

#### 1・ゼロの使い魔の世界の場合

ガリア、ロマリア、エルフの集落を始め、全ての国家を恋姫世界か  
ら転生してきた彼女達が独占。

ジヨゼフとヴィットーリオの抵抗があるも大したことはなく、地下  
の風石の問題も能力で解決。

劉奏はゼロ魔にあるまじき平穏な世界で、彼女達との日常を楽しみ  
続ける。

#### 2・魔法少女リリカルなのはの世界の場合

とりあえず管理局の脳味噌を潰し、彼女達がトップを独占。

のみならず各世界のトップも独占し、安全な世界が実現。

ジュエルシード事件も闇の書事件も能力を使って即行で解決。

なのは、ユーノ、フェイト、はやての4人は最後までお互いに出会わない。

J・S事件も発生前に主犯が潰される。

やはり劉奏は安全な日常を過ごすことになる。

### 3・NARUTOの世界

全ての忍の国を彼女ら乗っ取り、大蛇丸やマダラといった敵はあっさり潰される。

おかげで戦争が起こらなくなり、忍稼業が商売あがったりになるほど安全な世界となる。

その後、舞台を政治と経済に切り替え、彼女らは活躍し続ける。

そして、やはり劉奏は安全な日常を過ごすことになる。

……と、こんな結果になります。

劉奏の意思と創造能力と改造能力。

恋姫世界の彼女達の人数と頭脳と行動力。

全員の念話ネットワークと心の制約と絶対の防御力。

これらが合わさると、世界は平和にしかなりえないのです。

遊佐が1人加わったところでもなりません。

烈風カリンとか虚無とか聖王無敵モードとか尾獣とか、大した強さではありません。

ジョゼフの頭脳チートも、同等以上の相手が数万人以上も団結していたら勝てるはずがありません。

本当に、平和です。

平和すぎて、文字通り“話にならない”のです。

色々制限を加える手も考えていますが…。

正直ピンと来るものが無く、テーマやコンセプトが定まりません。

いっそのことを能力を全部取っ払うと、今度は主人公が彼女達と再会しても気付きません。

……いや、ゼロ魔の世界には気付ける方法があります。

ですが、その部分だけがピンと来ても仕方がないのです。

テーマやコンセプトにピンと来るものが見つからないのですから。

いっそのこと能力をそのままにして、日常をテーマにでもしてみましようかねえ……。

少しだけ、そのように思い始めてきたというのが今の実情です。

……少し思い始めただけで、全然確定ではないですが。

全く新しい作品を作るにしても、書きたい話は今の作者の実力では  
厳しいものばかり。

そのため、作者は次回作について迷っている、というわけです。

何かご意見がお有りでしたら、遠慮なくどうぞ。

採用するか否かは別にしても、参考にはさせていただきます。

ただ、現実（就活＋生活資金稼ぎ）との兼ね合いもありますから、  
クズエロの後はしばらく執筆をお休みすることになるかもしれません。  
ん。

それでもクスエロの方は、どのような形であれ完結させますので、  
ご心配なく。

その場合、ご意見の反映は復活作品に、ということになると思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9540s/>

---

早すぎる転生物語

2011年11月14日00時38分発行